唐津



日本陶磁協會編輯

寶雲舍刊


SEAL OF THE UNIVERSITY OF CALIFORNIA
LET THERE BE LIGHT
1868

陶磁叢書・第二巻

唐津

日本陶磁協會編輯



繪唐津壺　　出光朝夕庵藏



中尾唐津茶碗　　根津美術館藏



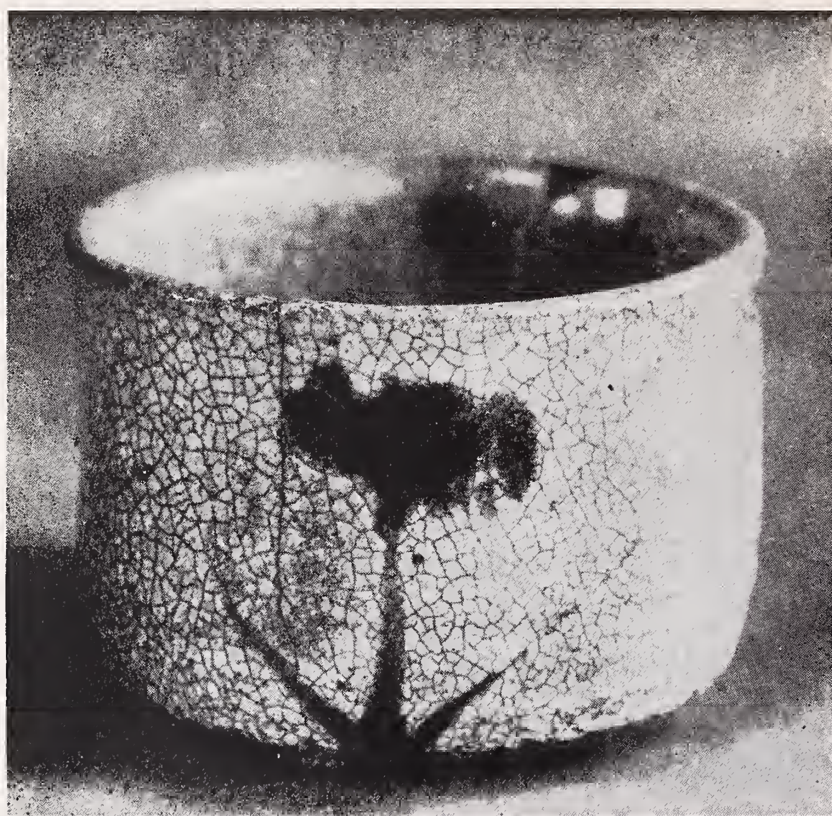
四　奥高麗茶碗銘眞藏院　　內本浩亮氏藏



五　米斗茶碗　出光朝夕庵藏



六　彫繪唐津茶碗　藤木正一氏藏



繪 唐 津 茶 碗　　田中丸善八氏藏



黑唐津茶碗　　小森新一氏藏



繪唐津茶碗

森永重治氏藏



三島唐津茶碗　　樋渡政次氏藏



1 繪唐津大海茶入　出光朝夕庵氏藏



3 繪唐津肩衝茶入　靑柳瑞穗氏藏



2 思河茶入　舊松平家藏



朝鮮唐津花入　　雅俗山莊藏



青唐津水指

磯野信威氏藏



唐津水仙ヘラ水指

古館九一氏藏



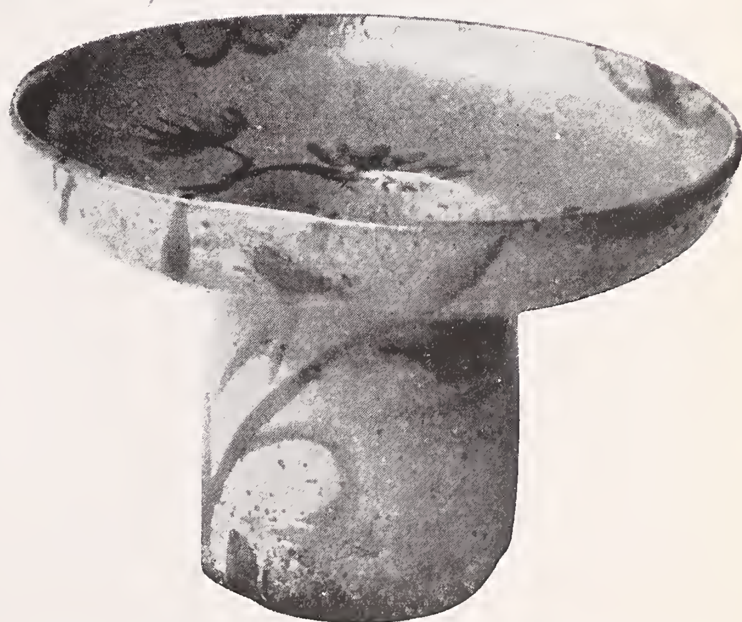
朝鮮唐津水指　中本守氏藏



1 唐津菱形香合　出光朝夕庵藏



2 繪唐津振出し　某氏藏



3 繪唐津盃台　田邊無方庵藏



1 斑唐津盃　出光朝夕庵藏



2 斑唐津盃　井上房一郎氏藏



3 繪唐津盃　某氏藏

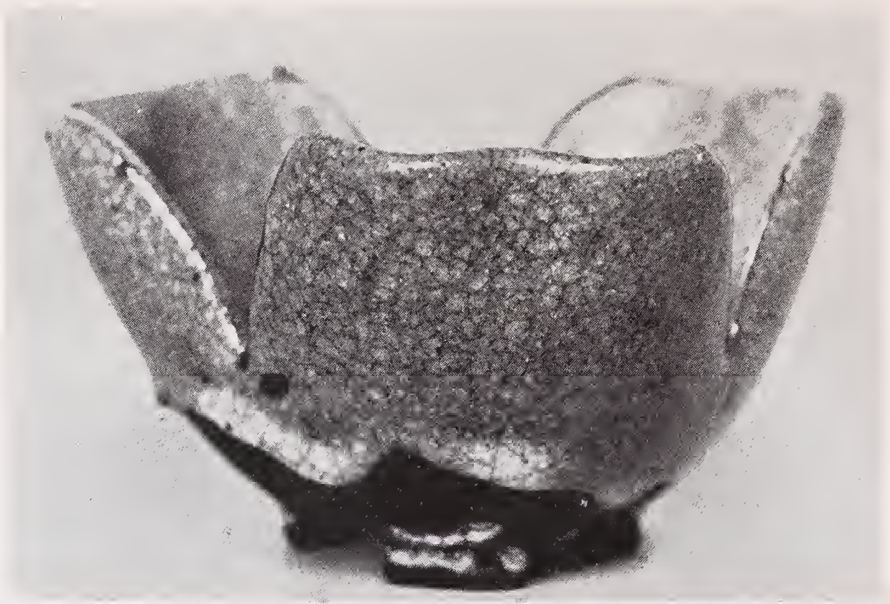


4 皮鯨盃　某氏藏



繪唐津扇面形向附　　出光朝夕庵藏





1 唐津割山椒向附　石橋德次郎氏藏



2 繪唐津四方向附　田中定雄氏藏



1 繪唐津四方向附　　出光朝夕庵藏



2 繪唐津四方向附　　山田岸太郎氏藏



繪唐津鉢　出光朝夕庵藏



1 藤の川内出土水指片



3 祥古谷窯出土黒唐津沓片



2 飯洞甕窯出土彫唐津片



2



1

唐津小山路窯出土片五點



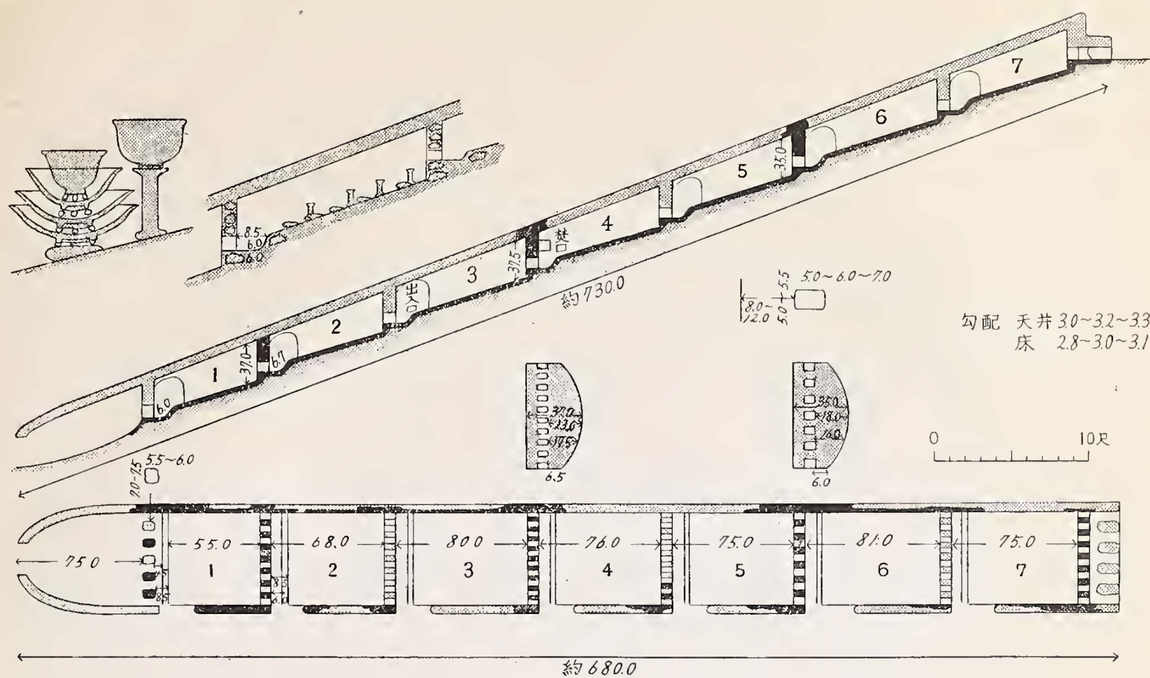
3



5

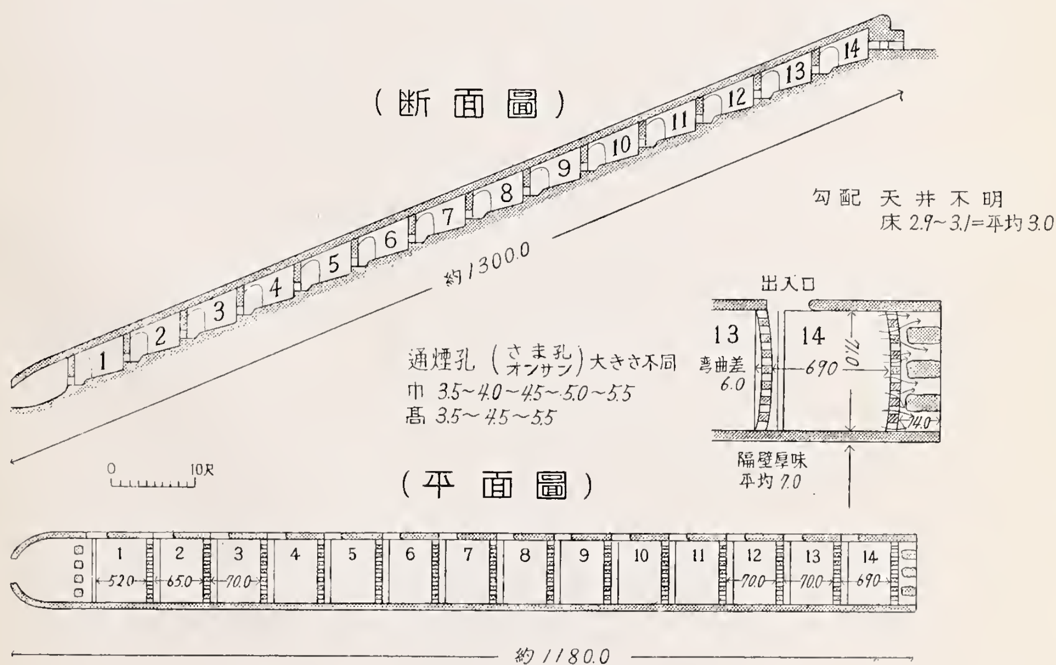


4



唐津飯洞甕下窯實測圖

昭和二十一年八月調査



唐津道納屋谷窯實測復原圖

昭和二十一年八月調査

序

昨夏の敗戰とともに日本は何もかにも一變した。我々も安閑と古陶磁器や古美術にひたつてゐることは、もう許されないと覺悟してゐたが、考へて見れば今後日本の生きる途は文化國家として再生するより他にない。然し文化國家文化國家と徒に聲を大にしても、文化國家は降つて湧いてくるものではない。古い傳統を堅持すると共に、生々とした新想のもとに、孜々營々、一歩一歩、我々がそれぞれの分野でこれを築いて行くよりしかたがない。この時代に抗して、失はれんとする道義を保つことは容易でない。然し何よりも先づ信實さなくしては文化の再建はなく、文化の建設には先づ傳統を深く凝視し、これを徹底的に究明することが必要である。今後國家的産業として重要な地歩を占める陶磁器の製産にしても、先づ古陶磁器をよく知ることが大切で、古陶磁器の研究は、必ずしも閑人の閑事ではなく、今後その意義は社會的にもひろく認められてくるであらう。

この春、日本陶磁協會が結成されて以來、發掘調査、展觀、講演會の開催と、華々しい活躍をつゞけてゐることは御同慶に堪えないが、別に陶磁叢書の刊行を企圖し、發行を寶雲舍に委囑することにした。古窯址發掘調査の結果を次々と報告し、最近に於ける優れた研究の發表を乞ひ、隱れた名品の紹介につとめたいと思ふ。

便宜上各編を窯別または時代別、種類別とし、各編ごとに編輯責任者をきめ、課題・執筆者、圖版の選擇を一切まかすことと

にした。執筆者は我國各地の古陶磁研究家のうち、現在最も實力のあり、權威とされてゐる人を擇び、おのおの得意とする主題の下に發表を乞ふことにし、圖版は主として未發表の名品竝びに新らしい資料の紹介につとめたいと思ふ。稿成り版終つたものから逐次上梓、やがては東洋古陶磁研究の一大集成たらしめ、斯界の啓蒙に資するところ深からんことを期してゐる。

昭和二十二年七月

日本陶磁協會々長

團伊能

陶磁叢書・第二巻

唐津

目次

圖版目次

挿入圖版

四、朝鮮古窯圖三葉

表紙、藤川内窯繪唐津猪口

廣田熈氏藏

圖版解說

第一圖　繪唐津壺　　出光朝夕庵藏

高サ　四寸八分　　口徑　四寸六分

繪唐津壺として最高のものでありこれ以上すぐれた優美な壺をその後見たことがない。形と云ひ釉藥の調子及繪の筆致と燒上りは全く申し分ない。壺形水指として長く大切に使用されたものらしく、自然のしみがかへつて雨もり手の如き味を示してゐる。草繪に花をそへた風情である。

唐津の壺に算盤形と云ふのがある。算盤玉にたとへたのであるが形がやゝ鋭角に近いもの、丸味のあるものがある。この壺は實にやはらかな丸味のあるもので、胴の張と口徑と高臺の大さの調和がかくも美しい姿に見せてくれて居るのであつてこのバランスは一分もゆるがせに出來ない。このバランスをはずせばこの美しさは下手になる。唐津の美しさの中には多分に量感がある。とかく唐津にはこの量感の強すぎるものがある。この壺の量感は内につゝまれた内面美となつて吾々にやはらかく迫つて來る。重くるしい强味はない。釉藥、繪の調子については云ふ迄もない。最近金森宗和公書附の繪唐津茶碗を拜見した。茶碗と壺とでは大分異るが、この壺が宗和公に見出されてゐたとしたなら、必ずや書附して秘藏したであらうやうな氣がこの茶碗を拜見して思ひ出された事であつた。

この壺の戸籍は東松浦郡道園窯又は阿房谷窯のものと推定する。（佐藤）

第二圖　中尾唐津茶碗　　根津美術館藏

口徑　四寸九分　　高サ　二寸八分　　高臺徑　一寸八分

枇杷色の、古唐津でも特に欣ばれる赤之出來の方である。大振りな端反りで、姿は熊川あたりを狙つたもので

あらう。

中尾唐津の名は古唐津の名物茶盌として古くから有名で、正德四年の記錄にも見えて居り「中興名物記」には當時冬木家の所持として擧がつてゐる。なほ鴻池家にも同名のものがあるが、本盌との關係は詳かにしない。ただ本盌には別にまた福壽草の銘がある。

中尾の名は所持者に基くものであらうが、古來の傳承には中尾是閑の所持によるとされてゐる樣で、私は中尾と是閑とは別人ではないかと一時考へたこともあり、これも有名な是閑唐津を高野是閑の所持によると述べたこともあるが、前記の傳承では中尾、是閑兩唐津共同一人中尾是閑の所持によるとある由で付記しておく。

中尾唐津は古唐津茶盌の一つのタイプを代表するものとして、世に中尾手といふ稱呼も行はれてゐる。(滿岡)

第三圖 奧高麗茶碗 銘、眞藏院

內本浩亮氏藏

高サ、二寸八分、 口徑 四寸三分

外箱、桐、古唐津茶碗 眞藏院

本箱、蓋表 奧高麗、蓋裏 眞藏院 紫皮紐二條通シ

替箱桐、蓋表 古唐津茶碗 蓋裏 雲州家藏器之內宗明記之

雲州松平家御藏帳寫

一、眞藏院 古唐津

袋 藍天鵞絨緞子 裏白羽二重 緒つかり藍天鵞絨

紫絹蒲團一ツ 箱桐白木包物花布裏淺黃羽二重

本箱の奧高麗の文字は不昧公が書かれたもので舊雲州邸は元閑院宮家邸に當り同所に眞藏院と云ふ不動明王を祀つた堂がある。此茶碗の胎土は粘土質多く赤味ある火肌を顯し高臺はやゝ低い方で高臺の削り出し及び腰下の削りに篦を尠く用ひて出來上つてゐて椽は僅に外反りの氣味を持ち大體に深目で大振りな形狀である。釉藥は長石釉に富んだもので紫桃色を呈し大小の缺入があつて軟味を感じる。そして見込の廣い所に釉溜りがあり外部の四ケ所に釉溜りの流れは景色となつて又施釉の時出來た二本の指跡は更に景色を添へてゐるものである。此の茶碗

は二十數年前に雲州家から根津家に渡つて現在に至つたものである。(金原)

第四圖　米斗茶碗　　出光朝夕庵藏

高サ　二寸八分　口徑　五寸三分／五寸一分　高臺徑　一寸八分

塗箱の表には古唐津茶碗と朱書されて居り、蓋裏に朱色の異つたもので「宗忠」の二字記されて居る。箱の調子から見ても相當の年代を經て居る事が知れる。宗忠の文字は或時期の所有者名であらうと察する。箱には古唐津としてあつて米斗とはして居ないが、私の多くの見聞した中でこれこそ米斗と云へるものである。異狀な大ぶりの茶碗であるが大して大きくは感じないのはこの茶碗に含まれ居る美しさがはげしくせまつて來るからであらう。全くこの茶碗を手にして實にその雄大さとその美しさにうちのめされた氣がした。何の變てつもない樣で見れば見る程その釉薬面の美しさに見とれる。見込ひろく暖かで、おかしがたい威嚴をもつてゐる。高臺が少し弱いと感じたが見るに從つて弱味は消えて美しさにうたれる。大きさのわりに薄作のためか三四ヶ所に山ひづみが出來て居るが割れては居ない。この山ひづみが實に又美しい景色となつてゐる。唐津山瀬窯の作品である。山瀬窯の傳世品には小茶碗をまゝ見るが、かほど立派なものに出合つた事がない。(佐藤)

第五圖　彫繪唐津茶碗　　藤木正一氏藏

高サ　三寸三分　口徑　四寸四分

この手の作品は在來ごく少かつたと見えてこれ迄あまり人口に膾炙してゐなかつた。たまさかあつても相當の目きゝにさへ上野、さつま、或は志野の一手かなどと云ばれたものであつて唐津と云ふ人が少なかつた。筆者の知る限りでは八碗しか見てゐない。中でもこの一碗がずばぬけてゐる。光悦唐津とでも名づけて見たいものであつてこれが唐津の最も古い窯とされてゐる岸嶽飯洞甕窯の製品であることはあまり人には知られてゐない。中に

は茶碗と思へぬ鉢然たるものがある。雄揮なヘラ彫のあとに鐵釉でなぞらへてある。雄大な姿、根が生えた如く動じないその量感に特徴があり、志野、御所丸に近似してゐるが又唐津でなくば出來ない重味を見せてゐる。堂々たる偉容の中に一種の品格がある。筆者はこれこそ唐津滯陣中の古田織部の製作意識のはつきり出たものと思つてゐる。土味も一見やはらかく、二重高臺。發掘破片と異る様に見えるが傳世した味と自づから異る所を見なければならない。筆者は織部唐津茶碗と名づけてゐる。(佐藤)

第六圖　繪唐津筒茶碗　田中丸善八氏藏

高サ　三寸　口徑　四寸

此の茶碗の胎土は砂氣が多く丈夫な感じがして作行も厚目で素地と細工との調子がよく出來てゐる。高臺の外部は直立に削られ高臺の内部は篦目が深く入つて大きな蜷尻がいくつも廻つて出來てゐる。釉薬は長石質の白味の多いものを厚く施され、そして所々に薄桃色の火變りが美しく出てゐて釉溜りの高低力強い篏入は非常に變化に富み何とも言葉に言ひ顯すことの出來ない深味を持つでゐる。描いてゐる鐵薬は黒色に出で花と思はれる部分に繪薬と釉薬と解け合つたのは又一種の凌味を思はせる程である。岸嶽の繪唐津筒茶碗では最も初期の作品と充分領かれる。(金原)

第七圖　黒唐津茶碗　小森新一氏藏

高サ　三寸　口徑四寸二分

この手の黒色又は蛇蝎手と呼ばれてゐるものは古くから薩摩燒だと云はれてゐた。なるほどその釉薬面からのみ見るとさつま陸立院燒や龍門司燒に酷似してゐる。然しその姿なり作意なりから見ても又土味から云つても明かに唐津の作品だと云ひ得るのである。先年内田祥古谷窯及古奈甲の辻窯からこの手のものがぞく／＼出土した。これによつて判然と唐津燒なる事が知れたのであ

る。傳世品にあるものはほとんど小ぶりで本來の用途は向附であつたらうと思はれる。こゝにかゝげたものは中でも最もすぐれた傳世品で、黑白二重がけとなつて居る。これは白釉がうすかつたため黑上りとなつて居る。可成大ぶりで作意もこせつきがなく雄大な感がする。見込廣く手にかゝえて重からず輕からず、瀨戸黑に比適するものと云へよう。（佐藤）

第八圖　繪唐津茶碗　森永重治氏藏

高サ　三寸　口徑　四寸五分

作行熊川なり、自然の丸味に對して八の字にひらいた高臺のふんばりは調子が合つて居て少しも不自然な所がない。全體の器形に對して丸文も大きからず小さからずでこの形によくはまつてゐる。繪唐津茶碗もこの樣なすきのないものは少ないと思ふ。土味やはらかく、長い年月人々に愛されたことが自づと知れる。東松浦郡、道園窯の製品と思はれる。（佐藤）

第九圖　三島唐津茶碗　樋渡政次氏藏

高サ三寸二分　口徑四寸六分　高臺高六分　重量一四八匁

三島手の唐津は椎の峯窯、内田窯等からの出土で早くから知られてゐたが、傳世にも發掘の茶碗にもあまり古いものと思はれるものは見かけない。ところがこゝにかかげる樋渡氏の茶碗は内田の東方三里、大草野窯からの出土品であり、無キズと云つていゝ位完全に出土してゐる。この茶碗を實際に手に取つて見ると實に古い時代の三島手である事が知れる。云ふ迄もなく大草野は寛永頃の窯であつて德川初期に屬する。

寫眞が不鮮明で殘念であるが、なりと云ひ、高臺の異狀な高さと云ひ、この三島の模樣の古拙さにふさはしい姿と云へやう。たくまぬ三島の模樣は見込に於て一層美しさを加へてゐる。見込中央に一花をおき、放斜線のまわりに十數の花を配してゐる。それより口邊に向つて檜垣となつてゐる、朝鮮三島茶碗程の品格はないが、象嵌

と云ひ、その姿と云ひ、ひななるが故にたくまぬ美しさが器全體を覆つてゐる。（佐藤）

第一〇圖

1. 繪唐津大海茶入　出光朝夕庵藏

高サ　二寸七分　口徑一寸四分

2. 思河肩衝茶入　松平家舊藏

高サ　二寸八分　口徑　一寸一分

3. 繪唐津肩衝茶入　青柳瑞穗氏藏

高サ　三寸四分　口徑一寸一分

　唐津には茶入がないと云はれて居る。なるほど、唐津茶入ですと云はれて見せられる十が十迄小壺であつて茶入ではない。こゝに示すものは長い間の見聞で見出した四五點の内の三點である。尤も思河茶入はさつまであると云ふ人もあるが唐津で通つて居るのでこゝに示したのである。出光藏の大海茶入も青柳氏の肩衝も共に繪唐津である。こうした茶入にも何等か繪をつけて見たくなつたのであらう。

　唐津に茶入のないと云ふ理由には遠州七窯に唐津が入れられてゐない點を見てもうなづける如く、遠州の好みには唐津は合はなかつたと見える。遠州がもし好んだとしたらこんな繪など書かせなかつたらうし、もつと優美な姿に變つて居たことゝ思ふ。出光氏の大海茶入は愛す可きもので釉藥に唐津らしい篏入があり、糸切あざやかである。青柳氏の肩衝は堂々たる貫錄を示して居りロクロあざやかである。少しく重きに過ぎるのが缺點であらうか。思河茶入については前田氏の記事を參照されたい。（佐藤）

第十一圖　朝鮮唐津花入　雅俗山莊藏

高サ　七寸五分　口徑　三寸―二寸三分

　唐津花入は朝鮮唐津にとゞめをさす。と云ふことが云

へる。何故かと云へば繪唐津、無地ものの花入もごく少い中にこの朝鮮唐津花入が一番花に合致するからである。ことにこの花入は兩耳の一方が窯入前にとれて了ひそのまゝ釉藥をかけて燒き上げて居るあたり朝鮮陶工らしいやり方とこの完全でない所が侘茶道にうけ入れられたものであらう。掛花生のつもりで穴あけはしたが釉藥によつてふさがれて了つてゐる。朝鮮飴釉の上に白の長石釉を流しがけして、飴との交さ點、及白釉のうすれてゐるあたり、藍色が美しく出て居る。朝鮮唐津花入として出色あるものと云へよう。藤川內窯製品。(佐藤)

第十二圖　彫唐津水指　磯野信威氏藏

高サ　七寸　口徑　四寸

こゝに示す水指は、少し燒物をやつた人には誰しも古伊賀、古信樂の水指又は美濃伊賀水指あたりと一連のつながりのあるのに氣附かれるだらう。なほ古帖佐の茶入の中に新兵衞作ではなからうかと思はれるものがある樣にこれ等の水指の中には朝鮮人の作ではなく、當時中央の茶器製作者の作と思はれるものに出合ふ場合がある。この水指が新兵衞の作であるとは云へないにしてもそうした共通の香りのする事は十分認められはしないか。

この手はどれも堂々として、現今の點前ではこび出しには一寸無理な位大きなものがある。釉藥に青味をもつのが特長で、ヘラづかひあざやかなものがある。同手に石橋德次郎氏の有名な水指がある。岸嶽飯洞甕窯の製品となつて居るが筆者はつまびらかにとして居ない。(佐藤)

第十三圖　唐津水仙ベラ水指　古館九一氏藏

寸法不明

バランスのよくとれたこの水指はむしろ瀬戸水指と思ひたい位である。よく見ると釉藥と云ひ胎土と云ひ間違ひのない唐津である。その上、底部から胴部にかけて二

條のヘラ目があざやかに描かれてゐる。これこそ「唐津水仙ベラ」と云はれてゐるものである。唐津特有の作意である。耳附上部に胴紐が太くめぐらされて居てこの器を一段と引きしめて居るあたり、さすがうまいものだと感心させられる。口、矢筈で底板興し。前記の水指を作意があり過ぎると云はれる人にはこの水指は感心されることゝ思ふ。筆者の九州で拜見した水指でこれの右に出づる水指は澤山はない。この水指の生れは岸嶽帆柱窯である。(佐藤)

第十四圖　朝鮮唐津巾着水指

中本守氏藏

高サ　四寸　　口徑　四寸七分

朝鮮唐津水指はあつてもかくの如き姿のものは實に希である。白長石釉が多く、飴釉が少く、所々うすれた所が藍色に發色して實に美しい。底部丸味があつて一寸すわりが惡い樣だが席に使用してぴつたりする。土味ねばり氣のあるやはらかな細目の胎土である。藤之川内製品ときめたいのだが云ひ切れぬふしがあつて筆者には判然としない。が相當時代のあるもので、この姿と云ひ釉薬の美しさと云ひ申し分ないものと云へよう。(佐藤)

第一五圖

1.　唐津菱形香合

出光朝夕庵藏

高サ　一寸五分　　徑最大　二寸

形物香合以外にも多くの立派な香合があるが唐津には香合の美しいものが少い。こゝにかゝげた香合は中でも秀逸である。節句の菱餅の様な形で、つまみと云ひ形と云ひ凡人の作ではない事を思はせる。どの窯の製品であるか不明であるが唐津に間違ひはない。

2.　繪唐津振り出し

某氏藏

寸法　不明

唐津小山路窯作品の繪附は何んと云つても瀬戸美濃系の味が濃い。志野、織部の繪附そつくりのものがあつてよく美濃唐津だと云はれたものである。こゝに示す振り出しは裏面に霞網があつて志野、織部にそつくりである。秋風にすゝきの穂がなびいて、小鳥が三四羽網からのがれて飛び去る風情は詩味豐かなものである。鐵上り美しく發色して申分ない。唐津振出し中の逸品である。誰の手に愛されてゐるか今は不明である。

3. 繪唐津盃台　　田邊無方草堂藏

高サ　三寸三分　　口邊直徑　五寸一分

唐津の盃臺は實にめづらしいもので同じく小山路窯の製品である。内外の繪附が飴色にやはらかく發色して美しい。この上に朱の盃の置かれた姿を思ふ時實に美しいものであつたらう。口邊大きく立派なものである。佐藤)

第一六圖

1. 斑唐津ぐい呑　　出光朝夕庵藏
2. 斑唐津ぐい呑　　井上房一郎氏藏
3. 繪唐津ぐい呑　　某氏藏
4. 皮鯨ぐい呑　　某氏藏

唐津ぐい呑には種々種類があるがこゝには四個を選んだ。本來酒盃ではなく猪口である。茶人に古くから愛されてぐい呑と呼ばれ酒盃に使用されて居る。1の斑唐津はむしろ朝鮮唐津とも云ふ可きもので飴と白のかきわけで實に美しいものである。この手は唐津ぐい呑中でもことに少いもので現在知られてゐるもの數點をかぞへるのみである。寸法も申分ない。2の斑盃は火度の關係で口邊自然にゆがみ飲口がついて居て茶人に愛されるものである。白長石釉美しい。土味赤く發色して申分なし。3の繪唐津盃は兩面に若草が描かれてゐて發色は黒味の鐵が出てゐる。見込に一文字釉印があり美しい。高臺中迄釉藥がかゝり土を見せてゐない。製品は平戸系に屬する

ものか。1、2は岸嶽帆柱窯製品である。4の盃は鯨魚の切口に似てこの名があり、白味のある釉薬に黒飴が美しく映えてゐて古くから茶人に愛されたものである。藤川内窯製品。（佐藤）

第一七圖　繪唐津扇面形向附

出光朝夕庵藏

高サ　二寸六分　口邊廣い所　三寸七分

繪唐津向附には種々雑多な姿のものがある。又製品も各窯によつて自から異つてゐる。こゝにかゝげた六個の向附は傳世品として實にめづらしい東松浦郡松浦村の御房谷窯の製品である。御房谷は道園阿房兩系統に屬する窯で傳世の品はごく希である。その優秀な出來ばえは唐津向附中群をぬいてゐる。丸形の上部を扇面に形ちどり胴部全面に野葡萄が描かれてある。筆致と云ひ鐵上りと云ひ生地の白釉薬と云ひ申分なく美しい。高臺どれも正しくロクロのさえを表してゐる。長年月かくも美しく今窯より出したまゝの如き姿でよくも保存されたものと驚ろく外ない。（佐藤）

第一八圖

1. 唐津割山椒向附　石橋德二郎氏藏

高サ　二寸三分　徑　四寸二分

此の向附の胎土は鐵分が多く目の細い粘土質で充分燒き締つてゐるが篦で切り取つた跡は木彫の様な軟か味があり朝鮮唐津に見る土味を持つてゐる。形狀を作るにはロクロで丸く茶碗の様にまづ作り、そして高臺も丸く作つておき三方に足を篦で切り出し上部も三ヶ所切り取つて内方に曲げたものである。釉薬は朝鮮飴のような軟かく感ずる半透明の鼠色釉又は白玉の様な釉溜りと釉止り、そして黄鼠、黄黝青の窯變釉があつて深味のある澁い釉色を呈してゐる。

唐津と云へば割山椒をすぐ連想する程古來から茶人には貴重されてゐるが、其の本歌とも云ふ可き名器は至つ

て尠い。此の割山椒は明治七年佐賀の亂の時何は棄てゝもこればかりはと命にかけて持ち出されたもので現在も無事で傳世されてゐる。(金原)

2. 繪唐津四方向附　田中定雄氏

寸法　不明

繪唐津向附の内でこの位あざやかに發色の美しいものは少い。胴部に一本線があり、その上に四方に二個づゝの擂座がついてゐる。高臺は碁笥底で土見がよく燒けてキラ〳〵と輝いてゐる。兩面胴に草繪、一方檜垣、寫眞の正面は何を表したものか。これと同一のものが雅俗山莊藏にあるが、この繪をウンスンかるたの繪だと云はれてゐる。こぢつけで一寸無理な解釋だと思ふ。

小山路の製品に限つて擂座があまり、への字形のつけ足がある。鐵分が胎土中に多いためか燒上の土見がキラキラと光るものが多いことはこの窯の特長とも云へる。(佐藤)

第一九圖

1. 繪唐津四方向附　出光朝夕庵藏

高サ　三寸　口徑二寸八分

口邊皮鯨、唐津にめづらしく口邊四方が鋭角となつてゐる。釉薬面が青味上りになつて居り静かな草繪と共にむしろ淋しさを感ずる程である。鐵上り黑であるがよく發色してあざやかである。唐津向附として異色のものと云へよう。製作窯は御房谷窯か道園窯と思はれる。(佐藤)

2. 繪唐津四方向附　山田岸太郎氏藏

寸法　不明

唐津向附として志野、織部向附に最も類似の作品として示したのである。形姿と云ひ繪附と云ひ寫眞だけでは

志野か織部向附ではないかと思はれる位であらう。「唐津陶の觀賞とその種類」記事參照されたい。（佐藤）

第二〇圖　繪唐津鉢　出光朝夕庵藏

高サ　四寸三分　口徑　七寸二分五厘

寫眞では立派な繪唐津茶碗に見られるだらうがこれは大ぶりの鉢である。何んと見事な豐かな鉢ではないか。兩面に草花があざやかに描かれて器の大部分を示てゐる。見込大きくうづ巻き口邊迄のロクロ見事である。口繪色刷と好一對とも云ふ可きもので道園窯の製品と思はれる。たくまぬ草花の繪は全く唐津ならではとうなづかせる。無地ものゝ鉢は見かけるが、こうした立派な繪唐津鉢は傳世にはあまりない。（佐藤）

第二一圖

1. 藤川内窯出土水指片
2. 飯洞甕窯出土彫唐津茶碗片
3. 祥古谷窯出土沓片

「唐津陶の觀賞とその種類」の項參照されたい。唯注意迄に一寸申上たい事は1の水指は三つ足であり、口邊部の出土片がなかつたので判然としないが、おそらく矢筈口であつたらうと思はれる。釉薬はねずみ地、兩面に飴色で若松の様な繪が描かれてゐる。2の彫唐津茶碗片は數年前金原氏の指揮のもとに發掘されたもので戰前古館九一氏の奔大な破片中からさがし出されたものである。（佐藤）

第二二圖　唐津小山路窯出土片　五

1、2、3は繪模様を示したもの、4、5は高臺及底足を示したのである。これによつて、美濃陶志野、織部と如何に近似してゐるかが解るであらう。くはしくは「唐津陶の觀賞とその種類」參照されたい。（佐藤）

第二三圖　飯洞甕窯及道納屋谷窯實測圖

加藤土師萠氏の「唐津燒陶技の考察」參照ありたし。

表紙、繪唐津猪口　　廣田凞氏藏

高サ　二寸五分　　口徑二寸一分

このすぐれた繪唐津猪口は藤川内窯の製品である。兩面草繪くつきりと强く器の面からくい込んで居る。何んと云ふ繪のうまさだらう。さながら龍門造像の銘を見る如き强さを思ふ。多くを述べる必要はない。（佐藤）

唐津陶の觀賞とその種類

佐藤進三

唐津觀賞の二觀點

一

日本陶窯の二大潮流ともいふ可き瀨戸と唐津は多かれ少なかれ日本各地の陶業へその影響を及ぼしてゐる。だからといつてこの兩窯業の創立が最も古いとはいへないが、信樂、丹波、備前、常滑等も實に藤原期から始まつてをり（須恵器以後陶器窯として）互ひに相影響してゐることは云ふ迄もないが、然し近世陶業の本流をなすこの二大窯業程近代全國の窯業に及ぼした影響の偉大なものは他にあるまいと思ふ。

今こゝで唐津窯に就ていつて見れば、彼の九州の京燒だと迄いはれてゐる現川燒を例に取つて見ても明かな如くその手法、燒成等の母胎をなすものは明かに唐津であるといふことが出來る。その製品は全く日本化されてゐるとは云へ彼の美しい刷毛目、高臺作りの手法は唐津の母胎卽ち朝鮮式手法の傳統を受けついでゐるのである。肥前肥後にある多くの近代の窯業は多かれ少かれ唐津の流れ卽ちその根底をなす朝鮮手法を見のがして觀賞は成立しないと思ふ。今この偉大な影響力を持つ唐津陶と云ふものに就て少しく觀賞上のポイントともいふ可きものを考へて見よう。

今こゝに一個の繪唐津茶碗を前にして觀賞してみる。丸味のある大ぶりの茶碗で高臺高く外びらきの所謂バチ高臺、胴の兩

面に丸文を雄渾な筆致で描いてある。(口繪九頁參照) 發掘によくある繪唐津の小ぶりの茶碗形ではない。所謂茶碗として生れたものである。全體熊川風の作りで雄大、見込ひろく大きい。高臺内は丸味のあるヘラ取りでかすかに中央兜巾をなしてゐる。繪唐津として如何にも雄大でしかもとゝのつた姿は吾々をして一服の茶を所望せざるを得ぬものがある。この茶碗の美しさはどこから來るのか、まづ第一に地に根ざした樣な落ちづきのある安定感、全體とゝのつた姿、器形に對する繪のつり合ひ第二に釉藥面のやはらか味、澁味のある釉色、それ以上にたなごゝろにのせて兩手でかゝへた感觸、裏がへして見た高臺のよさと土味のやはらかさ、かうした條件をそなへた茶碗はさうざらにあるものではなく、唐津陶としてもすぐれたものゝ一つといへよう。然しひるがへつてかうした美しさの根底をなす美意識は何によつて生れたらうか。この茶碗のよさがよつて以つて生れた根底に如何なる創意とそれから出た手法上の美意識があるのだらうかを考へて見たい。

二

唐津陶を觀賞する時筆者はいつも二つの大きな流れの思想を感ずる。卽ちその一つは、唐津陶の根底をなす基本相とでもいふ可きものと第二にはその基本相を根底としてその上に立つ上位相とでもいふ可きものゝある事である。云ひかへるとこの基本相なるものは朝鮮的美意識の流れであり、上位相は日本古來からの日本的美意識である。常に唐津陶は朝鮮傳來の美意識の流れが根底をなして居り然もその上に必ず日本的美意識が支配してゐるのである。唐津は李朝期の陶器に非常な近似點を見出すが如何にそれが李朝風であつても、それは李朝陶でないことはいふ迄もない。然し李朝陶の美を認識しないで唐津陶のよさは分らないのである。それと同時に日本陶のよさ美しさの理解なしには唐津陶のほんたうのよさは解らないのである。常にこの兩者を度外視しては唐津陶の眞のよさ、眞の美しさは理解されないのである。

朝鮮の風物中美しさをとくに感じた事が一つある。それは民家上の瓦の波である。得もいへぬ美しさは一體どこから來るのかと考へて見た。それは不調和の調和である。瓦工は一枚一枚嚴格な寸法によつて作つたものではない。瓦として用が足りればいゝので寸法の違ひ等問題にして作つては居ない。從つて縱横どれも合つてはゐない。不ぞろひの瓦が組み合はさつての美しさである。日本の屋根からおよそこの様な美しさは見られない。この「不調和」の「調和」の美意識を感得しなければ眞の李朝陶も分らず又唐津陶も解し得ないと信ずる。長い間の傳統の持ち味は一つの流れとして一つの相となつて無意識の内にその美の中にそれは含まれてゐる。その美意識はすべてその國の文化の相となつて傳承されるのである。唐津陶の基本相をなすこの朝鮮的美意識はどの唐津陶の內にも含まれてゐるのである。それは無意識の內に一つの流れとなつて傳はつてゐる。この流れの上に立つてそれを支配するかの如き美意識が上位相の日本的美である。この二つの相は而も唐津陶として混合しあつてゐて別々のものではない。相とけ合つて一つの唐津としての陶器が生れてゐるのである。云ひかへれば朝鮮的美意識を度外視しては唐津陶は解釋されず又日本的美意識なしには唐津陶の美しさは成立しないのである。しかしその濃度は時代によつて決定づけられ、又時の思想によつても左右されるのである。

こゝで先にあげた繪唐津茶碗に就て改めて觀察してみよう。まづ手法上から見て形成上に多分に朝鮮式ロクロのあざやかな調子を見る。高臺のひらいた大きくどつしりした削り出し、又は鐵繪の丸文は李朝鐵砂を思はせるに十分である。然しそれは熊川茶碗の姿ではない。吳器茶碗のそれでもない。內に含まれてゐる豐かな量感と安定感は當時戰國武士が彼の利休によつて創意された草の茶席に於て使用し得るに十分な日本的美の發露をこの一個の茶碗に見る事が出來るのである。この場合手法上の作意の基本相の上に覆ひかぶさる如き上位相をみのがしてはならない。こゝに又一個の向附がある。(圖版二〇頁2參照)一見志野又は織部ではないかと思はれる繪附と作意とが見られる。然しこれは明かに唐津の向附であるのである。口邊から底部迄の形成上の作意、ことに口邊近く二個づゝの磨座を附し、竹に菫の繪を鐵で描いてゐる。明かに美濃陶とのつながりをこの向

附に誰しも氣附くであらう。然し又一面これが形成上の手法を注意深く見る時はそこにおのづから美濃陶の手法ではないもののあることに思ひ當る。卽ち高臺の削り方、高臺内の取り方、灰藥の釉藥、これはこの一個の向附のみの手法ではなくこの種の向附すべてに云ひ得る共通點である。かう見て來るとこの向附には明かに二つの異つた相を見る事が出來る。卽ち日本的手法と朝鮮式手法との二つの觀點上の相である。がこの二つの流れは全く相とけ合つて少しの不自然さをみとめられない。この場合より多く上位相が表面化して基本相はかくされてゐるのである。かく觀察して來ると唐津陶の美意識を形成づけてゐるものは單に朝鮮式手法の繼承ではないのである。そこには明かにその表面に或は内面に日本的美の意識が自然に含まれてゐることを見逃してはならないのである。この基準を度外視して唐津陶の觀賞は成り立たないと筆者は信ずるものである。

然らばいつの時代にもこの唐津陶にこの兩面の相を判然と觀察し得るかといふ問ひに對して筆者は先にも記した如く、その濃度は時代によつて差異を生じ又時の思想によつてこの相は一方的に濃くなる場合があるといふことを記して、次に唐津陶の初期に於ける兩相の交渉、關係等煩をいとはず記してみよう。

三

燒物戰爭と迄いはれた太閤の朝鮮征伐を契機として朝鮮の陶工は我國、ことに九州に渡りこゝに唐津陶が生れ薩摩、上野、高取、小代の各地に窯を築きその地の藩主の保護のもとにそれ〴〵の窯業をいとなむに至つた。とくに唐津地方に渡つた陶工は肥前一帶にひろがり各藩とくに寺澤藩、鍋島藩、平戸藩の保護のもとにその土著した者の數は相當多かつたのである。當時太閤は肥前名護屋城にゐて朝鮮へも渡る考へのもとに全國の藩主將兵を督勵して師を進めてゐた。歷史の傳ふる所によると彼太閤は一年有半の長きに渡つて名護屋にゐてつれ〴〵なるまゝに能に茶に、遊樂に明暮諸大名と共に熱心であつたことが認め

られてゐる。諸大名もおのづからその風にならつて盛んに行つてゐたことは自明のことである。かくして來朝した朝鮮陶工はその藩の命ずるまゝに、茶器も作り又民衆の雜器も作つた。この事は現在唐津地方各地の古窯から出土する破片をつぶさに研究すれば明かなことであつて、それ等の古窯からの出土中には民衆の雜器を主として燒いた窯又は茶器のみを燒いた窯等がある。然し初期の窯と目される諸窯から當時の思想を反影して初期茶道に使用されたであらう茶器が多く燒かれてゐるのを見るのである。文祿慶長に渡來した朝鮮陶工がその鄕土に於て手なれた雜器以外に渡來まもなくこれ等茶器を燒いたといふ事實に對して、然らば一體誰の指導、指圖によつてかくも立派な茶器を製作し得たのであらうかといふ疑問が生ずる。

當時中央に於て最も盛んに茶會に使用された茶器は「今燒」といはれる樂燒と「瀨戶燒」に代表される志野、織部燒である。特に美濃窯の全盛時代であつた當時その「朝日手燒」(志野)の發見者加藤景延の功績はけだし近世瀨戶陶窯作品の創始者といふことが出來るであらう。天正黑といはれる瀨戶黑茶碗から黃瀨戶志野やがて織部と天正から慶長にかけて完成されたこれ等の美濃陶を指導した者はその背景をなす茶道の完成者利休であり、古田織部であることはいはずもがなである。この大きな中央の流れは自然地方の陶窯にも影響したであらうが、我が唐津にあつては直接その指導が渡來の朝鮮陶工の上になされたといへるのである。卽ち古織の名護屋城滯陣といふことと加藤景延の唐津行の二つである。古田織部が秀吉に從つて名護屋城に一年有半滯陣して直接太閤の帷幄に參じてゐたことは歷史に明かなことで、ことに太閤が茶の湯に明暮すごしてゐたことは彼自身の文書によつても明かな如く又山里の茶席を大阪城より持ち來たらせ、又唐津に唐津茶屋を作らせなどして茶の湯にはげんでゐた背景には利休なきあと古織のあることは見逃されない。

第一高麗陣之時より名上り秀吉數寄の和尙になさせたるは古織初なりと天祐和尙物語り給ふ。(松屋日記)

と松屋久好は記してゐるのをもつて見ても明かなことと云へよう。特に唐津岸嶽古窯及その附近の古窯から雜器に混つて當時の豪放な茶器の生れてゐる事實はこのことを裏書きするものではなからうか。又茶會記で最も古いとされる天正時代彼の尨大な津田宗及日記その他に唐津燒の使用が見られぬに反し、古田織部の茶會記、而もそれは慶長七、八年頃から中央での茶會に使用されてゐることを判然と見る事實は名護屋城滯陣中彼の指圖、指導を裏づけてゐるものと見得ないであらうか。

圖版六頁のものは彼の指導、創意になる尤なる茶器の一つといふ可きであらう。この雄大にして豪放な茶碗がこの唐津岸嶽古窯で生れた事實はその物原より出土の陶片が明かに證明してゐるのである。（圖版二二頁參照）又唐津古館家に藏されてゐる水指、矢筈口、胴中央上部に太く帶をして兩耳がそれにつき、疊づきより胴紐迄に所謂唐津の水仙ベラがあざやかに二線描かれてゐる。岸嶽帆柱窯の製品といはれてゐるものである。岸嶽外廓の一古窯藤の川内窯からこれと同樣の花生が出土してゐる。

古織傳書の茶會記に

慶長八年二月廿三日　一、唐津花入

同　四月廿五日　一、唐津燒すじ水指

慶長八年四月廿日朝　一、あやはん唐津燒

等がこれ等にあたるものではなからうか。

一方この古織の創意を體して美濃の陶工加藤景延の唐津行は美濃に殘る「瀨戸大窯燒物並唐津窯取立之來由書」によつて知ることが出來る。同書によれば同地淸安寺の和尙の緣者、唐津の森善右衞門につれられ遙々唐津地方に下つたのである。景延は森善右衞門から朝鮮渡來によつて築かれた唐津窯が遙かに美濃瀨戸諸窯の築法よりすぐれてゐることを聞かされてゐた。彼

はその染法を取り入れたく、又唐津窯で自己の製品も燒く希望に燃えてゐたであらう。當時景延は美濃の一陶工ではなかつた。大きく云へば日本的に知られた陶工であつたことは「久尻清安寺由來書」にある如く志野燒といはれる「朝日手燒」の創始によつて時の上皇正親町院から筑後守の位を賜つてゐた程であつたことを見ても知ることが出來よう。さて景延は森善右衞門に案内されて肥前のどの窯を見たであらうか、唐津のどの窯で自己の製品を燒いたであらうか。どの窯に最も多くの影響を及ぼしたであらうか。このことが判然としなければ前記「唐津窯取立之來由書」も信を置くに足りない事になるわけで、直接瀨戸の技術が唐津に及ぼした影響の根據があいまいになるおそれがある。然しこのことは筆者がこゝ數年來の古窯調査によつて得た窯跡とその作品によつて判然と景延の唐津行を知ることが出來た。その最も明かな窯は小山路窯即ち武雄内田の東にある鍋島分藩後藤藩に屬する一古窯跡でこの窯跡から實に瀨戸美濃系と全く範を一にするもののみが出土した事によつて、この窯こそ景延の唐津での仕事場でもあり最も技術的影響を多く與へた場所であることを知るに至つたのである。（くはしくは拙稿織部唐津參照）この窯は渡來の宗傳一派の窯であつてこの一派の開窯した内田系諸窯ことに祥古谷窯、古奈甲の辻窯、甕屋の谷窯及金一派の藤の川内窯又は道園窯、阿房谷窯にもその影響を見ることが出來るのである。これ等の諸窯の出土品によつて明かに景延の唐津行は裏づけられ、又如何に強く唐津の諸窯に瀨戸美濃の技術、作意が移入されたかを知ることが出來るのである。

今こゝに少し例證を擧げて說明を加へてみよう。前揭圖版第二〇頁2は小山路窯の代表的向附であつて解說は前記の通りである。圖版二三頁の五點は同じく小山路窯出土の皿及向附である。一つは志野で有名な住吉手の橋繪であり一つは同じく松島手の繪附でありかうした例記は實に多く枚擧にいとまない位である。かうした繪附は在來朝鮮李朝期作の繪附には全く見られぬもので明かに瀨戸美濃との直結を物語つてゐるものである。次に作意に就て示さう。圖版二三頁4は小山路窯の鉢の底部である。轆轤仕上げで引上げて後ヘラで高臺及角目を實に雄渾に力強く削つてゐる。この作意は全く美濃陶初期の作品を見るや

うでこれこそ景延の作ではないかと迄思はせるものがある。同圖版5は平向附の底部である。三つの〜の字形の付け足は志野、織部によく見るもので唐津にはこの小山路窯以外に見かけぬものである。口邊から底部迄の作意を注意深く見られたい。次に圖版二二頁3は內田祥古谷窯出土の黑唐津沓といはれてゐるもので、白黑二重の釉藥により火度の關係上油滴の如き効果を表す場合がある。この二つの作意はとりもなほさず織部の創意以外何物にも比すべきものがない。創意、作意といふものはたやすく出來るものではない。まして轆轤上に於ては容易に作り出せるものでないことは最近の作家の作品を見ても明かなごとく新なる創意による作品はごくまれなことを見ても知ることが出來よう。こゝに示す水指の破片は圖版二二頁1松浦村藤の川內窯の出土品である。如何に伊賀、信樂の初期の水指、或は美濃伊賀と呼ばれる作品に近似してゐることか。かうした作品が渡來早々の朝鮮陶工の作意により出來得るものか、思ひ半ばに過ぎるものがある。

以上種々例證を擧げて示した如く加藤景延によつて明かに深く美濃系創意が唐津諸窯に影響を及ぼした事が判然としたと思ふ。この創意こそは古織の創意であり景延によつてこれが技術的に唐津に傳へられたのである。これ等岸嶽諸窯の作品及以上例示した作品は朝鮮陶工渡來初期に於て彼の偉大な古織の創意になるものだけに表面實に日本化されてゐるとはいへ、その技術的根本をなす轆轤技術はどこ迄も朝鮮傳來の蹴轆轤であり如何なる作品もこのロクロ技術によつて製作せざるはないのである。型ぬき及手轆轤による技法ではないことを知らねばならない。かくて製作されたこれ等の作品を見る時この場合基本相の朝鮮的美意識は上位相の日本的美意識に覆はれて表面化せず、日本的美意識の裏にあつてその基本技術にのみどこ迄も依存してゐるのである。かゝる時代の美意識は表面日本的美意識のみが濃く朝鮮系のそれはむしろ影をひそめてゐるといふことが出來る。時代の大きな思想――この場合古織の創意――によつて左右されるといふことのこの時代程强い時はなかつたのである。何故なれば古織以後古織なく我が工藝ことに陶窯に及ぼした彼の力は想像以上に大きいのである。一方唐津の雜器をながめて見る時反對に朝鮮傳來の美意識が強く基本相が表面化してゐてその自然な姿、手法に魅力を感ぜざるを得ない。彼の朝鮮

唐津で有名な佐賀珍ノ山窯及藤ノ川內窯の作品、德利の首を不器用につぎ合はせたもの又は德利の口のかけたまゝその上に釉藥を掛けたもの等は實に愛す可き作品であつて、前記朝鮮の屋根瓦の美しさを解さねばこの美しさは理解されないものである。松浦拾風土記といふ書物に

チャンコ會は馬場村妙音寺の裏山を云ふ（略）此所をチャンコ會と云ふ事は太閤秀吉公、名護屋御在陣の時朝鮮の國より燒物師を呼び寄せられ土地見立てに彼の燒物師を連れ諸方巡見有りしに彼の所に至つて朝鮮人大いに悅ぶ、又大きに愁ひて後ち踊り戲れけり役人問て曰く如何なれば喜ぶや又愁ふるや、朝鮮人答へて吾が國のチャンコ會と云ふ所に少しも違はざる由を答ふ。又曰く我故鄉に能く似たり故に悅び愁ふ、今チャンコ會と云ふ踊を致し候と答ふ

とある。彼等はこの喜びと悲しみの心を陶土にむけたことであらう。そこから生れた器物及その繪附の美しさに我々は打たれる時が實に多い。彼等はその心を筆に托して肥前の風物の美しさを描いたのである。然しその繪はもはや李朝染附の秋草ではないのである。窯繪の花鳥ではないのである。それはもはや日本化された美の表現、肥前唐津の草花風物の美しさに同化した日本的美の表現であるのである。こゝに根强い朝鮮美意識の上に打ちたてられた日本美意識があるのである。

唐津觀賞の要素

陶器のよさ美しさを見る場合、その燒物が如何にして出來たか、形姿や胎土、釉薬、繪附、燒成等についてあらかじめ知つておく事がより以上その陶器のよさ美しさを深く認識する事に役立つのである。又一方學問としての發展もこのすべてをきはめ知る事によつて深く掘り下げ得ることになり、發達する所以である。知る事が十二分でなくては見ることの深みは出て來ない。美を見る直感を養ふことも深く知ることによつて深められ廣められる。今後の陶磁學といふものもかうした立脚點に基礎が置かれる樣になるべきであり正になりつゝあるのである。すべてを知る事の大切さは物を見る目の邪魔になる樣ではならないが、知るに勝つた事はない。「いゝものが解ればそれでいゝではないか、根ほり葉ほりする必要はないではないか」と相當學問した人がいはれることがある。學問の發達とかいゝものが何が故にいゝのかを知らうとしない人達である。餘談に渡つたが、さて吾が唐津陶についてかうした立脚點に基礎をおいて形姿、胎土、釉薬、繪附等に關し出來るだけくはしく知りたいと思ふ。

一、形姿

形姿は整形の作意、手法の歸結である。器物の美しさは特にその形なり姿によつて見る者に迫つて來るのである。繪附の美

くしさも釉薬の深味もこの姿態に左右されることが多い。唐津陶の整形は實に多種多様でいひつくせぬ感があるが、唐津の一番の整形上の條件となるものはすべてが轆轤仕上げであるといふことである。整形する場合必ず轆轤仕上げであつて型ぬき又は手作りの製品は全くないと云つてい丶。唯時代の下つた作のものにまゝ手捻のものを見かけるがこれ等は本來唐津燒とはいひにくい。瀬戸その他に見る樣な型ぬきは全くない。種々複雜な形の向附、火入等があるがどれも型ぬきではなく轆轤仕上げである。だから始めにロクロで引上げてから手又はヘラで四方にしたり六角又ば種々の形を作り上げるのである。どんな器物でも裏がへして高臺から見るとそれは判然とする。高臺脇から胴部にかけて自然の丸味が出來て居り、決して鋭角のものはない。だから嚴格に云つて大きさも違ひ五人前十人前と揃つたものも全部が全部いくぶん姿、寸法が異つてゐるのである。

在來唐津には附高臺といふものがないとされてゐる。なる程茶碗にしても香爐、向附等にしても全部が全部といつてい丶程削り出しであつて附け高臺ではない。香爐の場合、丸く高臺を削り出してから三ヶ所足として殘して他を取り去つてゐるものが多い。然しこゝで注意せねばならないことは、美濃の手法の影響を直接うけた小山路窯に限つて附け高臺がある。即ち香爐火入に限つて糸で切つたあとへ三つの團子脚をつけて居り又向附の中にへの字形の三つの附け足のあるのを見るのである。又この窯に限つて碯座を附けてゐるものがある。然し輪高臺で美濃にある樣な附け高臺はない。故に輪高臺でつけ高臺となつてゐるものがあつたら唐津ではないと判斷してい丶と思ふ。これと反對に手法上けずり出しの出來ないものに水指、花生の耳がある。唐津の耳に作意のあるものは少い。せい〴〵繩耳であつて左右平均のとれたものもあるが、大概の場合左右少しでも異つてゐる。大小上下、たて横の附け方を異にしてゐるものもある。この邊が唐津の面白い所で、この器には耳を附けた方がいいと無造作に計りもしないで附ける場合が多いからである。珍の山の口かけ德利を考へれば自づとこの邊の心根が解るのである。

唐津陶の袋物、即ち壺、水指、德利等の製法に叩き延べといふ技法がある。これは紐作りか又はロクロで大ざつぱに引上げ

てから内部（時として外部もある）に木型をあてゝ叩きのばして薄作りに作り上げて行く方法である。だから唐津の袋物をのぞき込んで見ると波状の丸形紋が内面に殘つてゐるのを見る。この手法は唐津ものに限つてはゐないが、一番唐津に多いのである。袋物の形に唐津では算盤玉といふのがある。そろ盤玉の形をしたものが多いからであり、又胴締といふのは丸形のものにくびれを胴中で作つてあるものをいふのである。形姿の上で變化の多いのは何と云つても向附である。これは、美濃陶の影響があつたからである。この影響なしにかくの如く多くの變化は見られなかつたであらう。扇面形、菊形、四方、六角、桃形その他何形といへない多くの形がある。唯前記の通り基本はロクロ仕上げであるため俯瞰の變化よりも横から見た變化の多いものであつて、これに繪附けの効果が加はつて一層向附としての美しさを發揮するのである。

唐津の土はどちらかと云へば非常に荒いものが多くロクロは難しい。從つてどうしても分厚な作となる。そこに又唐津らしさがあるのであるが茶入等小物の場合よほど達者なものでないと製作しにくい。從つて唐津には茶入が少いのである。尤も遠州によつて唐津は用ひられなかつたことも茶入の發達を見ないで了つたのであるともいひ得る。然し初期には幾分あつて重厚な肩衝が殘つてゐる。織部十作とでもいふ感じのものがある。それと同時に十作の誰かが來て作つたのではないかと思はれる樣な高臺の削り方がある。志野、織部に見ると同樣の雄大豪放な高臺作りである。然しこれも前記した如く手造りの附け高臺ではない事勿論である。ヘラ使ひのうまいものも多い、沓茶碗、沓鉢の口のヘラ使ひ、胴及腰のそれ等全く朝鮮陶工のよくなし得たかをうたがはしめるものがある。唐津陶の高台に竹ふし高臺及三日月高臺と云ひ傳へられてゐるものがある。なる程唐津の高臺は竹のふしの如く、小さな高臺でも竹ふし高臺のものが多い。これは作陶上高臺が竹のふしの如くなつてゐる方が都合がいゝので、ロクロで仕上げて了つてから釉藥を掛けるのにこの高臺をつかんで藥がけするので、竹ふしとなつてゐれば指から器物がすべり落ちることもなく、從つて仕事も能率が上るために自然生れた手法である。案外ひくい高臺でも竹ふしとなつてゐる。茶碗に限らず器物を裏がへして唐津のよさがこの竹ふし高臺にあることが約束かの如く見る者を喜ばせる。唐津の三

日月高臺といふがロクロで削り取る時にロクロの廻轉の調子で疊づきが片方が太く片方が細くなつたものをいふのであるが、窯跡の物原で見る破片の高臺からこの三日月高臺をさがし出すのは一苦勞である。たま〳〵かうした不出來のものが茶人に喜ばれたのであるが、唐津の陶工はこの三日月高臺を作るにはあまりにも上手であつた爲め正しい正圓の高臺はどの窯跡にもたやすく見出すが、三日月高臺はめつたにはさがし出せない。茶人は不完全な美、侘の茶器をそこに見出したのであらう。

二、陶土

唐津の素地即ち陶土は全體荒目のものが多く、爲めに高臺内外に皺文を作ることが唐津の約束かの如くいはれてゐる。「唐津のちりめんしほへぬけて落るやう成毛拔にてはさみ取ならは可取く」(鑑識錄)であることが古くからいはれてゐる。これと反對に「唐津の土至つてこまか成こし土也ちりめんしほあり」といはれてあたかもこし土と迄いはれてゐる細目の土もあるが、獻上唐津以外こし土には唐津ではしてゐない。こした如くに見える程こまかな土のことである。この二通りの陶土が唐津土を代表してゐる。唐津東松浦郡と西松浦郡とでは土質も自から異つてはゐるが一體に唐津土は荒くロクロは引にくいとされてゐる。素地を山から掘出してそのまゝの粘土を水でのばし捏ねて使用したものである。他から土を持つて來て混合するなどは考へもしなかつた。從つて單味の土味であり、水漉をしない爲めに小石も混つてゐて石はぜも自然生れるわけで、意識して石を入れるのではないのである。だから石はぜ唐津は面白く表現されてこれを非常に茶人が喜こんだのである。荒目の土であつても唐津の土は耐火度が強く粘力に富んでゐるから火度が上つて、ひずみが出來ても、たれ下る事が少い。即ち腰が強いといはれてゐる。尤も内田地方ことに小山路窯の如く腰の弱くへたる土もあるが稀である。細目のこし土かと思はれる如き土は特に粘力が強く可成薄作にロクロ引されてゐても火度に強い。從つて形姿に色々の工夫がなされて變化の多い作品が生れ得る原因

もこゝにあるのである。素地に鐵分が多く火度によつて赤味のある發色を見る事が多い。高臺脇が赤く發色して白斑の釉薬と溶け合つた美しさは他に見られぬ唐津の一つの景色である。なんでもなく掛けられた釉薬が見込脇に三角形の釉薬のかゝらぬ所が出來それが火にあたつて所謂火間を作りそれが赤く鐵色にさえてゐる景色を昔からやかましくいはれたのも無理ないことゝうなづける。こんな所から火間唐津などいふ言葉が生れたのである。一體に内田、武雄、黒牟田附近の素地は鐵分が多すぎて赤黒く發色して土味は面白くない。やはり何んといつても岸嶽系の胎土は鐵が燒けて薄赤味に發色して一段と美しさを増す。素地のよさは自然釉薬の美しさを左右するものである。

三、釉　薬

唐津の釉薬は土灰釉と長石釉が基本をなしてゐる。長石釉に鐵分の含有量が多くそれが還元して所謂なまこ釉のものがあるが、朝鮮北方より渡つた手法だとされてゐる。土灰釉は唐津のどの窯でも使用されてゐる様に釉薬の基礎をなすものでこの土灰に鐵分の多いものは熱度の高下によつて青又は黄味を持つ所謂青唐津、黄唐津となるのである。土灰釉の成分によつて種々の變化をなすものである。これは一方に火度といふものゝ高下によつて變化するもので同一の釉薬であつても火度の高い所で燒けたもの低い溫度で燒けたものと自づと出來上りに變化のある事はいふ迄もない。唐津の釉薬にもう一つ鐵釉がある。この鐵釉の中に含まれてゐる他の礦物質によつて種々の變化をなす。例へば天目釉となり又飴釉ともなる。

以上の三つの釉薬が唐津の上薬の基本をなすもので瀬戸唐津、朝鮮唐津、黒唐津等の名稱は主としてこの釉薬の變化から名づけられたものが多い。又この三つの釉薬の内二つの混合によつて面白い變化を來すもので斑唐津、黒斑唐津等はその變化から生れたものである。釉薬の變化、深味、味ひといふものは素地の胎土のよし惡しによつて左右されると同樣窯の火度、燒成

によつてこれは決定づけられる。唐津の窯はすべて登り窯であり自然還元燒成となりがちであるがかうした唐津陶の如き深味澁味のある燒物を燒くには所謂ねらしを出來るだけ長時間かけて燒くもので三日も四日も燒きつゞけるのである。かうして出來上つたものは釉藥もよく溶け從つて釉藥に深味と澁味が加はるものであつて急激に短時間で燒き上げては全く變化にとぼしく面白味もなく雅陶唐津は生れて來ない。かうして生れて來た雅陶唐津は使用すればする程味ひを增し美しさを放つものである。これは素地の胎土に迄しみ込む如く釉藥がとけてゐて使用すればする程深味が加はつて來るからである。又一方唐津陶は古くは施釉前に素燒をせずにロクロ仕上げの上よく乾かして、釉藥をなまま掛けのまゝ窯入れするもので、その爲め素地胎土と釉藥との收縮度が異り所謂釉藥にちゞれが出來るものである。そのため火間が出來たり尻まくりと云ふ釉藥が高臺に迄流れずに途中でたまり厚い玉となつてゐるものが出來たりするもので、これがかへつて景色となり古くから喜ばれたものである。

釉藥は素地土と燒成によつて變化を見るもので釉藥のよし惡しは勿論であるが、釉藥の美しさは胎土と燒成の如何によつて決定づけられるものである。從つて繪附の美しさも同樣のことがいひ得るわけである。

四、繪附

繪附のうまさと變化の多いこと、自由自然であることとは繪唐津の一つのほこりといへる。どこの繪附も唐津の右に出づることは出來ないと思ふ。自然を友とし、まづ手近な草花を手本としてあるがまゝなる姿を描いて行つた唐津の陶人は偉大なる自然兒であつたと思ふ。唐津茶碗に三羽鳥といふものがある。茶碗に三ヶ所鳥の飛ぶ姿を描いたものである。夕日に映えた空を鳴き渡る鳥を單純な筆法で描いたものである。そこには何の巧もない。實にこの繪はその器に合してゐる。見るものをして唐津の空を思はしめる。器からぬけ出して鳥は飛び去るかの如く感ぜしめる。こゝに一個の唐津茶碗がある。それには達筆に

唐草つなぎの模様が描いてある。單純な唐草である。唐津の野にある草花から生れた美しい模様である。唐草模様は中央アジヤから渡つたものだ等とむづかしいことはいふ必要はない。彼等が自然からつかみ得た模様である。その美しさはこの器を一層引立てゝゐる。器と繪とがとけ合つてゐる。

繪唐津の美しさは器と繪とのハーモニーである。それは二にして一である。いつの場合でも器にそぐはぬ繪は唐津にはあり得ない。描く可き器には繪をつけてゐる。それは繪といふより器の景色である。火間である。

唐津の繪附に二通りがある。一つは唐津陶工が自然に描かんとして描いた草花鳥木繪である。他の一つは美濃陶の影響をうけて敎へられた繪である。いづれも美しい。然し敎へられた繪には利口さがある。複雜さがある。從つてその描く器には自づと變化の多い形姿がある。器に凹凸が多く彎曲がある。自然描かれる場所も制約される。從つて繪に發達性がある。この發達は美濃陶から來た手法である。想像によつて描かれた繪も生れてゐる。それだけに複雜であり繪の種類も多い。この繪附を代表してゐるものは小山路窯である。霞網、山水風景、蓮、柳に水鳥、串團子、檜垣、蛇籠、松島手、住吉手、橋上人物、等々つくせぬ程種類が多い。とは云へ器を無視しての繪はない。少し描き過ぎてゐると思はれるものもないではないが、實にあざやかである。一方自然を友とした繪は單純である。草繪が多い。實によくなれ切つてゐて美しい。陽春五月松浦村方面を歩いてみると美しい名もない草が萠えてゐる。仰げば蛾眉山が目の前に迫つてゐる。秋はたわゝに實つた柿が美しい。雜草に交つて秋の七草が咲き亂れてゐる。古い唐津の陶工もかうした自然を打ちながめながら描いたのであらう。道園窯、阿房谷窯、燒山窯からかうした美しい繪唐津のものが澤山出土した。

繪唐津には何を描いたか解らぬ繪がある。北斗七星かと思ふものがある。×點を太く描いたものもある。十字架かなと思ふ樣なものもある。かうした繪が草繪に交つて藤の川内窯から澤山出土してゐる。繪唐津はその素地土及釉藥の調子、それ等と燒の溫度によつて眞赤に鐵が發色するものと、黑味がちに燒上る場合とがある。よく燒けたものは手でさすつて見ると象嵌し

た様に繪の部分だけへコミを感ずる。それだけ鐵がよく熔けて胎土に喰ひ入つてゐるのである。唐津は全體還元化しやすいので釉藥は青味をもち繪附の鐵が赤く反映して何んともいへぬ味に燒け上つてゐるものが多い。

五、重さと觸感

燒物をガラス越しに觀賞する程味氣ないものはない。本來陶器は使用して見て始めてそのよさ美しさが解るのであつて皿立に飾るものではない。茶碗にしても皿にしてもまづ何んと云つても手に取つてみて始めてその美しさとよさが解る。唐津陶を手に取つてみて第一に感ずることはその量感である。手に取つてみて輕きにすぎた場合、だまされた感を深くする。唐津陶の大事な要素の一つはこの量感であつて、重からず輕からずといふことが大事である。安定性もそこから生れて來る。或程度の重量のない茶碗は安つぽく感じ不安をいだくものである。唐津陶からはかゝる不安は少しも受けない。そこに唐津のよさがあり、重々しい器格があるのである。

唐津の茶碗を兩手にいだいてみて或る量感を感ずると同時に手の觸感のよさを感ずる。すべ〳〵する感もなくさりとて傳世の茶碗はかさついた不安もない。ことに唇に觸れた感じは薄さからくる輕やかさもない。唐津の茶碗には一種の匂があると迄いふ人さへある。これは極端な話ではあるがさういふ感觸さへもあるのかも知れない。彼の美しい斑のぐい呑が唇にふれる時の感觸は酒通でないものには解しかねる觸感といへよう。繪唐津ののぞき筒向附を會席の盆にのせて出された時、あやしくもその美しさに視覺はうたれる。

六、內面美

唐津陶で最も大切な觀賞の對象はその器格に現れた内面の美である。この根底をなす内面の美が解らないでは唐津陶を解したとはいへないのである。基底相の美も、上位相の美もこの内面の器格からにぢみ出る美しさである。筆者はこゝに先輩金原陶片氏の内面美についての語をかゝげ讀者と共に唐津陶の醍醐味を滿喫したいと思ふ。

「器物の善悪、高下を己れの好き嫌ひによつて定めることは、其人個の好みであつて果してそれが正しい見方であるとは云へないのである。たとへ百人の内九十九人が善いと云つてもその九十九人の見方が誤つてゐたとすれば殘り一人の悪いと云ふのが確かになる。兎角物の善悪は簡單に決定される性質のものではないが、それが古陶器の場合には尚更むつかしいのである。ひとり陶磁器と云はず美術工藝品には品格の高いものと品格に乏しいものとがある。之れは勿論形狀寸法の完璧、色彩の調和等種々原因もあることであるが、それ以外に說明の出來ない言葉に云ひ盡し得ないあるもの、品位と云ふか氣稟と云ふか、名器に對して自ら頭が下るやうな氣持、さうしたものの作用でもあるのである。之こそ名器の持つ内面美が人を感動させ引付ける力であらう。此の内面美は云ふまでもなく無形の反映であつて見る人により各々受感の程度が異るものである。正しい器物でもうつす鏡面が歪んでゐれば歪んで寫り鏡面が正しければ正しく映ずるのである。見る人の程度と云ふのはこゝの事である。此の内面美は何によつて生ずるのであらうか。即ちこれこそ作者の眞心を打ち込んだ魂の顯現でなければならない。作者の眞心を打ち込む精神力は指先を傳うて轆轤物にも彫刻物にも必ず反映するのである。私が使用する多くの陶工の中に技術も達者なれば頭も鋭い陶工があるが、其の陶工の造つた作品は唯鋭いばかりで頭の下るやうなものは出てこない。又技術も達者であるが人格に於て私が常に敬服する陶工があつて此の陶工の作品には犯す可からざる器格と品位があつて頭の下るものがある。燒物は壹阡度以上の白熱化した窯中で燒成されるのであるから陶工の精神も燒却されるかに思はれるが、事實はさうでなく壹阡度が千五百度、萬物をも熔かすかのやうに燒きに燒いても益々現はれるもので實にこれ

は恐ろしいまで確かである。今日名器として金襴に包み二重三重鄭重なる箱に入れて茶室で絶讃される價數萬金の茶入、茶碗水指等も名も無い一陶工の作つた雜器の下手物の中から而も戰國忽忙の血生臭い時代に大茶入が此の精神力の內面美を見出して珍重したものが多いのである。古唐津には作者の銘もなければ印もない。古唐津の陶工は己の作品が後世かく迄珍重されることを豫期せず、おそらく夢想だもしなかつたに違ひない。山間に四季の遷り變り以外何等變化も刺戟もない谷間の茅屋でたゞ自然を友として自然にまかせゆるやかに陶車を廻して內面美豐かな器物を作つたものであらう。」

この無我の境地に作陶三昧に入り得た陶工は立派な內面豐かな器格のあるものを生んだのである。吾々もこの陶工と同樣な無我の境地に於て古陶の美を把握せねばならない。

唐津陶の種類

一

一井戸二樂三唐津又は一樂二萩三唐津と昔からよく茶人にいはれてゐて吾が唐津が早くから、侘、さびの對象の茶器として重く用ひられてゐたことは人の知る所である。それだけにその種類も多く又最近は種々の名稱のもとに何々唐津のよび名がつけられて分類されてゐる。爲めに非常に煩雜となつて來たうらみがあるがそれだけ作品上の種類の多い事を物語つてゐるといふことが出來よう。さてそれ等の種類に就て一々出來る限りの説明を附する前にこれ等の名稱がいつ頃から生れ如何に發展したかといふ經路をたどつてみるのもあながち無駄なことではないと思ふ。

そも〳〵唐津陶が陶磁史上いつ時分から記錄にしるされてあるかといふと、これは何んといつても古い茶會の記錄、即ち茶會記に出てゐるのが最初であつて然もそれは天正時代の茶會記には一つも見當らず、慶長七、八年の織部の茶會記に最も多いのである。

古織正傳慶長御尋書には

慶長八年五月之朝　織部所にて

一、水差唐津燒置合て

一、茶碗唐津燒

慶長十二正月十一日不時夜會　織部所にて

……手水之間に唐津の水差

慶長十二正月十五日之晝不時之會

一、からつ皿にくぢらしゝみあへて膳に有

慶長十三六月六日之朝

織部風爐之數寄、盆にて被立候覺

……水こぼし唐津燒、

古織全書に

慶長八年二月廿三日

一、唐津花入

慶長八年三月十日

一、唐津足有御水指

慶長八年四月廿日朝

一、ちやわん唐津燒

慶長八年四月廿五日

一、唐津燒すじ水指
慶長八年十月五日
一、水指唐津燒
一、唐津燒水さし
一、茶碗唐津燒

等瀨戸茶碗、信樂水指に混つて唐津燒が多く織部によつて使用されてゐるのを見る。慶長七年以後相當茶器が唐津で燒かれて中央へ持ち來らされたことが次の文獻によつても知る事が出來る。

古織傳書に

（慶長九年十二月十三日）
四ツ時
　春田又左衞門へ
　　古織殿　最福院　久好
色々御菓子共出申候　取賣共道具持參候て御覽　是より町を御見物被成候
寺林町ニテ唐津水差御見付候テ春田ほしきかと被仰候間　久好其儘水差を取　中々春田ニやる事ニてハ無之
とて及喧嘩組合て取て久好晩の茶湯ニ開候なり

これは奈良松屋久好の古織傳書中にある記事で面白くその當時の樣子を物語つてゐると思ふ。取賣共と云ふのは道具屋の事

で當時相當の茶道具商があつて唐津燒もこれ等商家によつて多くあつかはれてゐたことが解る。久好によつて少々誇張されてはゐるか織部は一見してそれが唐津燒なる事を直感してゐることは織部と唐津との關係の深かつたことを裏づけてはゐないだらうか。同書に舟越五郎右衞門永景への織部の傳書に

風呂ニテ水さすハ唐津燒手弦口あるのにてとある。

當時手附水つぎのあつたこともこれにて知れる。織部によつて瀨戸と同樣茶會に多く唐津燒の使用された事を知ると同時にこれ等の記事が唐津燒の文獻上に見る最初のものであつて、それ以後の當時の日記類に少しづゝ散見してゐる。彼の細川三齋によつて生れた上野燒も當時盛に燒き始めて居り、三齋入洛の度每に土產として上野燒と同時に唐津燒も持ち來らされたことは當時姻戚關係にあつた吉田神社の宮司吉田兼見の弟で吉田神龍院の僧梵舜の日記に見ることが出來る。

梵舜記慶長十一年六月

十五日壬子天晴晚夕立雷鳴……次越中殿ヨリカラ津皿三十茶碗一つ給也

とあり又鹿苑寺の有名な鳳林和尙の日記隔蓂記は近世茶陶史料として今後大いに注目さるべきものであるが、寬永十二年より寬文八年に渡る三十八年間の長きに渡り京窯を中心に他窯の製品に至る迄の記事が隨所に見出せるのである。その中から唐津關係の記事をひろつて見ると正保四年頃より今利燒の茶碗、鉢等が多く出て來るが唐津燒としては

慶安三年四月十九日

神屋茶碗唐津燒爲賣却遣大平五兵衞買也

慶安四年三月朔日、
　肥前燒香合
萬治二年十月廿五日
　神岡宇右衛門來唐津燒之茶碗一ケ
寛文三年一月六日
　……今里三島手茶碗一ケ

があり當時今利燒が斷然多くなつてゐる中に唐津燒として上記記載されてゐる。

かくの如く多くの記錄を見ると瀨戸、信樂、備前等の茶器に間々見うける「モト信樂」とか「古き備前」「古瀨戸」とか當時にて古い信樂とか備前とか瀨戸とかがあつても「古き唐津」といふものが一つも見られないことを注意せねばならない。これは織部以前の茶會記に一つも唐津の使用を見ないことゝ共に朝鮮征左以前に唐津燒の生れてゐない一證左となりはしないだらうか。（唐津燒の起源については拙稿唐津燒起源參照願ひ度し）「古い唐津」として名の出てゐるのは上記日記類より可成時代の降つた延寶、正德頃以後のことであつて、三菩提院宮御記中延寶八年十二月十四日の條に「舊辛津水指」と出て居り又正德四年御道具代請取帳に「古唐津晩鐘茶碗」と出てゐるのが初見である。然しこの時代前後に記錄に殘る唐津が一二ある。それは是閑唐津として名のある唐津茶碗である。これは毘沙門堂門跡の茶友で光悅とも親交のあつた高野是閑が特に愛用して居た唐津茶碗を後人が是閑の名を附して是閑唐津と呼んだものである。唐津茶碗に名稱の附され殘る記錄の古いものといへよう。尙今日有名な中尾唐津もおそらくこの是閑唐津と軌を一つにしたものであらうと思ふ。なぜなればこの兩茶碗は全く同一の作風であり、同時代の一品製作であつて今日唐津茶碗中高名なものとなつてゐるのである。これ等の茶碗は當時古唐津と呼んだのではなく

唯單に唐津茶碗といはれてゐたものであつたらうと思ふ。それが元祿頃元の所持者の名を冠して是閑唐津中尾唐津、と名づけたもので、それによつて古唐津の意を表したものと考へられる。當時元祿頃の書物で諸道具類の記載で最も古いとされてゐる萬寶全書、古今和漢諸道具見知鈔中唐津の項に

一、唐津燒物之事　肥前國なり、茶碗、水指、水こぼし、花生、鉢、とくり之類有其中に古き茶碗花生に重寶之物有云々

と出てゐる。この頃となると古唐津の名稱を多く見る樣になり古唐津を貴んだ樣子がよく解るのである。藏帳として有名なものゝ中で古織の直系である小堀遠州藏帳の中には唐津は一つも見つからない。これは遠州その人を考へる時うなづける事で遠州七窯といはれてゐるものゝ中にも唐津は入つてゐないことによつて彼の好みが織部と如何に相違のあることかを語つてゐる。然るに時代の下つた土屋、雲州の藏帳には多くの唐津を見ることが出來るが現在傳世品として雲州藏帳中の眞藏院及秋夜の銘ある二碗だけが殘るのみで多くのこれ等の名器の行方は知る由もないが、眞藏院及秋夜二碗に見ても不昧公の好みが解り、引いて當時の唐津ものゝ觀賞の觀點を知ることが出來よう。今この兩藏帳から唐津ものをひろつて見ると次の如くである。

土屋家藏器目錄　茶碗の部

一、津田　唐津ヒ、キ有 いさよひ手　箱書附十左衞門殿

一、唐津　松浦箱書附十左衞門殿

一、唐津三島

水指の部

一、唐津　渦　塗蓋

雲州松平家御藏帳

名物並之部

茶碗　深山路　奥高麗

上之部

茶碗　眞藏院　古唐津 箱奥高麗

相生　古唐津 靑出來

秋夜　古唐津

奥高麗　靑出來

時鳥　瀬戸唐津大ワレ（郭公）書附

冬月　瀬戸唐津 キズカスガイ打

古唐津　箱御筆亦出來

薩摩島津公につかへ畫家として有名な木村探元が口述した「白鷺洲」の中に・

川上因幡殿之寺澤志摩守様より被下候繪唐津の茶碗別而かたき出來にて繪も有之候

とある。この「白鷺洲」は寶暦年間に書かれたものであつて繪唐津の記錄として最も古いものといへよう。次に繪唐津として松平不昧公の選著になるといはれてゐる古今名物類聚の中に只一點

九、茶碗の部

一、繪唐津

とある。名物に選ばれてゐるものであつて繪唐津として記録に殘るものである。尤も古く藪内家にある繪唐津の茶碗は太閤名護屋にて唐津陶工に燒かしめ初代藪内劍仲に土産として賜はつたものとなつてゐるが記録として傳つてはゐない。かく列記して來ると慶長頃が唐津燒の文獻に見える最初であり、時代が相當下つてそれ等を古いとか舊唐津とかの名稱によつて呼ばれ又同時に所持者の名を冠する樣になつたのである。寶暦頃になつて始めて奥高麗の名稱が生れ、文化文政頃になつて瀨戶唐津朝鮮唐津の名稱が散見する樣になつたのである。然し茶人間で相當古くから呼びなされてゐて實に古いと考へられてゐる米量、根拔といはれて居る名稱はいつ頃から生れ、如何なるものをかくよんだのであらうか。少しく文獻をあさつて說明を加へてみよう。

二

奥高麗

廣義の意味でのこの奥高麗は九州古窯の上野、高取、八代の或るものに就ても云ひ得られるかも知れないが、狹義の奥高麗は古唐津燒の一手の内一品製作を名づけたものと思ふ。奥高麗に就て面白い說が「白鷺洲」に出てゐる。

○一、右咄の內に奧高麗と被抑候はいか樣成事に候哉と申候に奧の奧高麗とて井戶などの類にて候都の方にて燒候を熊川抔と申候總て都の物は見事に有之候故古帖佐などの茶碗茶入の藥立はやはり熊川にて候井戶は田舍細工の故麁相に有之候唐津などは其奧高麗人を寺澤殿御つれ被成候其燒手故殊の外上方にては賞翫仕候由（白鷺洲）

木村探元は薩摩に於て最も著名な畫家であつて元祿十六年江戶に出で狩野探信の門に入り寶永四年大守島津吉貴から探元の號を賜つてゐる。寶曆年間三曉庵を建て靜隱と號して自適の生活に入り茶を樂しんだ。「白鷺洲」は島津久峰が靜隱との談話を錄したものであつて茶事、燒物、美術、文學に關する探元の豐富な觀賞論が記載されてゐる。この探元の話は實にうがつた說で傾聽に價する。おそらく奧高麗といふ名も彼によつて始めていはれたのではないかと思はれるのである。唐津を井戶系として麁相なものであり、高麗の奧の工人を寺澤志摩守が朝鮮征伐の節つれ歸つて窯をきづかせ燒かせたもので、その作を奧高麗といつたものと解釋出來るのであつて、後世奧高麗を朝鮮又は滿洲の製品だとした說の如きは燒物を實際にあたつて硏究しなかつた空論とも見る可きである。元祿、寶曆頃迄は相當古實が忠實に墨守されてゐた樣に思はれる。

○唐津の古きは奧高麗といふ、唐津の奧に竈あり是へ唐人來つて燒く是を奧高らいと云ふ、土は唐津の土也この土至つてこまか成こし土也ちりめんしほあり、茶碗平目にて津ぼみ有、香臺ひくし平目につき口藥立は色々眞白なる藥なし（鑑識錄）

この書は寫本であつて京都加藤義一郞氏藏で未だ公刊されてゐないが、前後の記事より察すると文化文政以後のものと考へて間違ひない樣である。全卷を通じて實に忠實に鑑定して居り一々圖示の說明と共にこの位眞面目に鑑識された書物を他に見ない。相當立派な目利の錄したものといへよう。この奧高麗の記事は筆者の云はんとする事を云つてくれてゐる樣で唯蛇足と

して附け加はへるに過ぎない。筆者の見聞では奥高麗には大略二種ある様である。一つはこの鑑識錄の示す様に土至つてこまかなものでチリメンしわがあり全體小ぶりのもので深く、割に高臺が低い。釉藥は全體白味を帶びたものが多いが燒の工合では地はだ赤味の爲に枇杷色がゝつた黃味のものもある。全體小ぶりで深くまとまつてゐる。もう一つの手の奥高麗はこれとは反對に大ぶりで、口邊開いて居り、井戸ねらひで、探元が述べた如きものである。土には色々あるが、ねつとりねばりのあるものが多くチリメンしわが少い。高臺は高目であり、全體どつしりとした感じである。

○奥高麗ト云フハ高麗人來リテ唐津ニテ燒シ故ニ高麗ヨリ奥ト云フコトナリ（茶道筌蹄）

○惣作造り高麗物の如くにて見事なるものなり、藥白茶色薄赤之色少し靑味出來もあり、土も古唐津造りざぐりと結構なり一品の物にて高臺作も違ひ見事なるものなり格好よき茶碗はすくなく大ぶりなる茶碗あり、見事なれ共大の方は少し下品なり（山越伊三郎覺書）

山越伊三郎は嘉永年間京都押小路にゐた道具商で實に目利だつたといはれてゐるだけにこの奥高麗の記事はうがつたものといへよう。「大ぶりなる茶碗見事なれども大の方は少し下品なり」としてゐて當時の好みをよく表してゐて小さくまとまつたものが好まれ反對に大ぶりなものは下品なりと下位におかれたものらしい。現代吾々はこの大ぶり茶碗に唐津のよさを多く見出してゐて慶長、元和時代古織によつてかゝる茶碗こそ賞美されたのではなからうかと想像し得るのである。

○唐津燒高麗左衞門ニ始ル、奥高麗ト稱スルモノハ朝鮮忠淸道ノ西北ニ唐津監アリ唐ノ船付ニテ此地ノ燒物ナリ、土藥ヲ見ルニ朝センナリ、古唐津ハ似テ違ヘリ（陶器考）

○奥高麗トイフハ文明ヨリ天正年間ニ至テ製スル所ノ者ナリ、此際點茶盛ニ行ハレ人高麗ノ茶碗ヲ珍愛スト雖ドモ舶載ノモノ少クシテ得易カラズ故ニ唐津ニ於テ模造セシム後世之ヲ奥高麗トイフ奥ハ往古ノ義ニシテ古キ高麗ト云ハンガ如シ陶膚稍密ニシテ釉色枇杷實ノ如ク又靑黄ノモノアリ是モ亦臺輪ノ内ニ皺紋アルヲ以テ良トス（工藝志料）

○奥高麗は滿洲の（撫順と本溪湖間）方面の陶器であつて肥前唐津燒とは能く似てゐる。八九百年前の品と思はれる。土味は硬い方で土は細かく結いらしく見えたが肥前唐津は非常に鬆砂質土であつて至極造り難い。高麗熊川茶碗とゝや茶碗の類は土はサクイので造り難いのであるがこの奥高麗茶碗は造り易く見えてゐる。火度は同じらしい。朝鮮京城には所持人が大分ゐた。（泥中庵藏六）

陶器考の田内梅軒は奥高麗は朝鮮ものと解したらしくこの説が嘉永以後明治大正と相當ひろく根強く傳承されたらしく時々奥高麗は朝鮮のどの邊で出來たものですかと云ふ質問に驚くことがあるが、陶器考の力に今更驚異の目をはる次第である。泥中庵藏六は近代の名工として知られて居るが、唐津に關しての鑑識は實に一風變つた見方をしたもので實際に見て歩いた人だけに吾々はこの説も奇異に感するのであるが藏六氏の鑑識は畫家が古畫を鑑定するに似たうらみがある。

米斗

○一、古唐津も少し端そり也土こまか成香臺同樣俗に米かしの手と云ふ、土かハらけ色ニテ少し狐色かゝる、ちりめん志は香臺の中に有外に無之（鑑識錄）

○肥前唐津、古唐津極古キヲ云米斗（茶家醉古襍）

○米斗トイフハ元亨年間ニ製セシ所ノ者ナリ陶膚ニ薄釉ヲ施ス而テ潤澤ナシ古ヘコレヲ以テ斗量トスト云フ説ハ非ナリ其ノ

故ハ其狀一ナラザルヲ以テ其ノ然ラザルヲ知ル唯米ヲ斟スルヲ以テ名トナスノミ（工藝志料）

米斗、米量とも書く、古唐津の一手であり奥高麗の大ぶりなものに含まれてゐる樣である。傳世品で昔からこれが米斗りであると云ひ傳へた茶碗にあまり出合はない。誰もこれこそ米斗り茶碗だと云ひ切れる人はおそらくあるまい。聞いてもいつもあいまいな事が多い。二三の古い商家に尋ねて見たが答へる人はなかつた。鑑識錄時代には米かしの手卽ち米斗りの手と俗に云つたものがあつたらしく、土は灰鼠色で少し赤味があり、ちりめん皺が高臺內にあるが外にはない、と述べてゐるだけで全體の整形その他知る由もないが古唐津の一手であることには間違ひない樣である。工藝志料には陶膚に篩釉を施すと云つてゐるだけで要を得ない。茶家醉古襍あたりから唐津のごく古いものが米斗りだと云ひ出してから工藝志料は元亨年間に迄持つてゆき觀古圖說は米を量つたのだから「多クハ茶碗ノ大ナル物斗リ」であると、分らないまゝに想像したに過ぎないと思ふ。とにかく今日筆者は寡聞にして傳世の判然とした米斗茶碗に出會はない以上、かういふものであつたらうと想像する他仕方ないと思ふ。唯奥高麗の一手であると信ずるだけである。

根　拔

これに至つてはさつぱり分らぬといふより仕方ない。價がづぬけて高いものとか、根がぬけた樣に高臺が低いものとか全くたわいもない話である。工藝志料は「建武ヨリ文明年間ニ至テ製スル所ノモノナリ其質白土アリ赤土アリ釉色ハ鉛色ニシテ臺輪ノ內縮緬ノ皺ノ如ク纈狀ニ土質ヲ露シテ釉ヲ施サズ」と述べてゐるが、釉藥、胎土から考へると結局奥高麗に含まれて了ふやうである。鑑識錄は根拔に就ては何等述べてゐない。他書にも全く見當らない。筆者はやはり奥高麗の一手であつて或時代にその一手をかく呼んだのであらうと考へてゐる。

朝鮮唐津

○一、朝鮮唐津といふは白き藥飛び〳〵に有體朝せん燒也（鑑識錄）

○朝鮮カラツニ二手アリ土藥トモニ朝鮮ノモノアリ朝セン陶ナリ唐津土朝鮮藥アリ朝鮮唐津ヤキナリ和訓同シキユヘニ物ヲ一ツニシタル也（陶器考）

○朝鮮唐津ハ天正ヨリ寛永年間ニ至テ製スル所ノモノナリ朝鮮ノ土及釉ヲ用テ唐津ニ於テ製ス土質赤黒ニシテ青白ヲ雜ヘタルナマコ藥ヲ流布ス水壺盞盆ニ多ク茶碗ニ稀ナリ（工藝志料）

○世ニ朝鮮唐津ト云物有リ唐津ノ朝鮮ニ似タルヲ云フ之レニ二種アリ朝鮮國ニ於テ作リシ物ニ唐津作ニ似タルハ目方重クシテ土固シ又唐津ニ於テ作リシ物ニ朝鮮作ニ似タルハ少シ目方輕シ土モ少シ締ラズ此作人ハ秀吉ノ朝鮮征伐ノ時同國ノ陶工唐津ニ來リテ製作シタル物ト思ハルナリ以前ノ唐津燒ニ比スレバ藥ノ色ハ別種ニテ栗色ニ流レアリテ光澤多シ（觀古圖說）

以上の文獻を見ると一樣に朝鮮と云ふ言葉にとらはれてゐて一つは朝鮮他は唐津と云ひ或は全く朝鮮燒であるとも云つてゐる。古く水指の一手に朝鮮水指といふ書附の、內側波狀のたゝきのある、ごく輕い飴又は薄靑味の釉がゝりのものをよく見かける、必ずといつていゝ程朝鮮水指となつてゐる。朝鮮と考へたものに違ひないが明らかに唐津產である。藤の川內又は燒山のものが多い。かうした朝鮮の作意から朝鮮產と考へたのも無理からぬと思はれる。少し大きい袋物は必ず內側木型でたゝきのめしになつている。薄作りで輕い朝鮮傳の手法である。釉藥は飴釉又は木灰釉單味のものもあるが、多くはこの飴釉に白の長石釉が流しがけにしてあるものが多い。壺、德利等は板輿しで輪高臺がない。茶碗皿等で飴、白の流しがけが自然の景色となつて美しいものがある。

朝鮮唐津も廣義の意味で上野、高取、八代、萩又は朝鮮産のものもあらうが、狹義の朝鮮唐津は唐津生れ一手しかないわけである。朝鮮飴釉に似たる鐵釉を基調としてそれに白の長石釉を流しがけしたるものを云ふのである。土質は窯によつて幾分違ひがあるが、槪してねばりのある延びる土で、岸嶽帆柱皿屋窯及珍の山、藤の川内、燒山とそれらの分窯の産である。

瀨戸唐津

○瀨戸唐津、唐津の瀨戸に似たるを云ふ（茶道筌蹄）

○、一瀨戸唐津ハ唐津の竈にて燒、黄瀨戸の藥をかけたる也大クワン入也白藥あり此時分の黄瀨戸藥ははや黄にあらず白し此手土あらき故せかい底の所土ほつれあり（鑑識錄）

○瀨戸唐津惣體薄茶白色にて貫入藥なり、白薄茶色ざんぐり土あらし作は尋常なるもの深きなりの茶碗すくなく中平の方多し、茶碗目ありかひらぎもあり（山越覺書）

○瀨戸唐津ハ應仁ヨリ天正年間ニ至テ製スル所ノ者ナリ尾張ノ瀨戸ノ釉水ヲ用ヒル故ニ此ノ名アリ白土ニシテ白色釉ヲ濃ニ施セリ故ニ龜紋ノ劈痕甚シ（工藝志料）

瀨戸唐津に二種類がある。一つは市價の非常に高い皮鯨の手であり他の一つは本手瀨戸唐津といはれてゐるものである。皮鯨の手は平目で淺く高臺小さく引しまつてゐる。この高臺の小さく瀨戸天目に共通した感がある所から、又釉藥の黄白味やはらかな點、土味は荒いがやはらかな點等から考へて瀨戸唐津は瀨戸出來だと考へる人もある樣である。がこれは一槪に云ひ切れない。唐津陶で一番今もつて不明なのはこの皮鯨の瀨戸唐津である。唐津からも瀨戸からも發掘で出て來ないもので今日判然といひ切れないのである。これに反して本手瀨戸唐津は岸嶽諸窯から出土してゐるので判然と唐津陶の一種であると云ひ切

れるのであるが、同じ本手のものにも二通あつて、皮鯨の手に似た土の白くやはらかで小ぶりの平目茶碗があるが、これ等は皮鯨手と同窯で生れたものらしく末に發見されないでゐる。瀨戸唐津に繪のあるものがある。平目の茶碗には見かけないが、筒形のもの、猪口のたぐひに繪附のものがある。繪の上りは黑いものが多い。この手は小山路窯から僅かではあつたが出土した。岸嶽諸窯から出土する瀨戸唐津の胎土は荒目で非常に堅い。釉藥は長石に灰の混入した厚味のあるもので岸嶽特有の竹シダ灰が交つてゐて燒上りに所謂卯の花と稱するものが現れるものがあり、窯變して紫色を呈するものをまゝ見かける。「土あらき故せかい底の所土ほつれあり」とあるものもまゝ見かける。土が堅くあらい爲め底と口邊部にめくれが出るのである。つみ重ねの目あとは三つ又は四つに限られて居る様である。今後の窯跡調査によつて皮鯨手もやがては明かとなる時期が來るであらう。雲州藏帳にある瀨戸唐津の「時鳥」及「冬月」兩茶碗共きズものであつたらしいが上の部に入れられ不昧公によつて大切にされて居たものであるが、現在不明のこの二碗もその如何なる手のものであつたか知る由もない。

繪唐津

○繪唐津の手香臺念頃也薄作も有土少荒目あり青藥白藥はなし形こもかへ形りも有香臺牛月形りもあり常の香臺もあり土重し繪はなくても繪唐津の手也（鑑識錄）

○繪唐津ハ慶長年間以降ノモノナリ茶碗盞盃等の雜器多シ其質赤土ニシテ青黃黑ヲ兼ネタ釉ヲ施セリ最モ潤澤アリ繪ハ草畫ナリ（工藝志料）

○奧高麗米量リニ麁ナル畫ノ有ルヲ世ニ畫唐津ト云ヘリ其畫色ハ黑色カ又ハ黑勝チノ栗色ナリ（觀古圖說）

木村探元の「白鷺洲」に繪唐津の記のあること及び古今名物類聚に繪唐津茶碗が名物として記錄に殘ることは前章で述べた

が繪唐津の優秀品は何んと云つても茶碗より壺、向附、皿類に銘品が多い。壺では口繪の色刷の出光氏藏の壺が日本一だと信じてゐる。壺としての均整のとれた又それに對しての繪附の美しさ、傳世が作つたにぢみの美しさは他にその比を見ないものである。向附皿にも美しい唐津陶がある。ことに當時の雜器の中にすぐれた繪唐津がある。雄渾な筆致と云ふより可憐なすなほな筆致は無意識になぐり描きしてあるものに實にくみつくせぬ味ひがある。志野、織部にも美しい作の繪があるが唐津の繪程自然で、のびやかで、簡粗な繪は他に見られないと思ふ。李朝の繪にもかほどの美しさは見られない。

三島唐津

○唐津はけ目是ハ繪唐津の藥立にて藥色藥なりはけ目あり火替りもあり香臺に藥かゝる土少し荒方也形こもかい形もあり（鑑識錄）

○香合水指茶入向附皿片口等色々出來あり三島もあり（山越覺書）

白の化粧釉を刷毛目にしたもの又は白釉を象嵌したもの又は刷毛目したあとを線彫したもの等である。慶長初期から一部の窯で燒かれてゐたのであるが、一見八代燒の古いものに似て混入してゐるものが多く箱には唐津三島となつてゐてもこれは八代だと稱する人がある。唐津刷毛目、唐津三島を知らぬからである。傳世には水指の類が多く、茶碗の古いものはあまり見かけない。然し土屋藏帳に唐津三島茶碗として有名なものが記錄されてゐることを見ると古くは三島唐津茶碗も相當尊ばれたものと思はれる。推の峯窯、大草野窯あたりからすばらしい三島茶碗が生れてゐるが他窯の名稱で傳つてゐるのであらうと思ふ。土あら目で、高臺迄釉藥のかゝつてゐるものが多い。水指も同樣板輿しとなつてゐて底迄釉藥が掛けてあるものがある。爲めに土味が十分判明しにくい。色目は青味を帶びた鼠色が多く古い八代燒と一寸見分けにくいものがある。時代の降つた推

の峯又は内田諸窯で燒けたものは八代で多く通つてゐる。「象嵌ものは八代燒」と云ふ一枚看板に唐津三島はその聲價をうばはれたうらみがある。鐵釉で刷毛目をしたもの鐵刷毛目といふものをまゝ見かける。

掘出し唐津

○掘出ト名ツクル故ハ火候度ニ過キ或ハ歪ミ或ハ缺損スル者アリテ工人コレヲ不用ノ者トチシ土中ニ埋メシヲ後世ニ至テ掘出シ得テコレヲ賞シ以テ名トナス是ヲ以テ其ノ元ヨリ埋マザル者モ此ノ器ト同種ナル者ハ皆掘出シト名クルニ至ル（工藝志料）

○世ニ掘出シ唐津ト云有リ古キモ新シキモ有リ土色白ク藥ノ色薄綠ニ鼠ヲ帶ヒ質細ク固ジ此ノ掘出シノ內ノ古ノ素燒ヲ見レバ一千年ヨリモハルカ前ニ有リシモノト見ユ、掘出シ唐津ト云ハ文化ノ比掘出セルト云フ（觀古圖說）

以上の如く「陶器考」以下に掘出し唐津の參見するのを見るのであつて文化文政頃の書留には見られない。これは唐津陶が茶人間にやかましく云はれ出して、それに商家が便乘して唐津あさりをやり、遂には窯跡發掘に迄發展し、發掘ものが金になる氣運が吾も吾もと發掘をやる樣になつて堀出しの手と呼ばれるものが生れる樣になつたのである。昭和の始め頃以來美濃及唐津の發掘ばやりと同樣發掘品が金になることゝ流行が一つの「掘出し唐津」を生むに至つたのである。文化以降天保弘化頃と思はれる。當時相當盛んに行はれたのであらうがそれにしても一つの發掘についての記錄のない事は殘念な次第であるが、當時としては止むを得なかつたのであらう。堀出し唐津の箱銘を見かけるものは大概小ぶりの雜器で、茶碗は雜器の碗であつて茶の湯の茶碗ではない。多く東松浦郡道園窯、阿房谷窯、推の峯窯、燒山窯等のものが多い。岸嶽のものはあまり見かけない。

獻上唐津

唐津城主代々に渡つて獻上物として燒かせたものであるが、特に寛政以後當時の城主小笠原藩が獻上物として唐津お茶碗窯等で御用として燒かしめたものであつて唐津三島風、雲鶴の印刻又ハ象嵌もの或は染附ものである。多く枇杷色の釉色又は薄青味のある釉藥で胎土こし土の細目で白いものである。在來の唐津燒からはよほど離れた京窯の影響のあるもので、一見八代燒にもまがふものがある。

以上の外「石はぜ唐津」「斑唐津」「土井唐津」等々あるが古くは重要なものにあつかはれて居らず近代になつてやかましく云はれ出したものが多い。最近瀨戶系の名稱の影響を受けて新に出來た呼名もありこれ等をまとめて次に記することゝする。

石はぜ唐津

幕末頃から明治にかけて近代この手の茶碗が喧傳され出したのは他の燒物に類を見ない點、又は石はぜが一つの大きな景色だと云はれ出して、赤星家の賣立で非常な高價を呼んで以來益々高名となり、唐津の近代の名物と迄なつたのである。概して小ぶりの引しまつた茶碗で胴部に大きく石が窯中燒けてはみ出してゐるものである。この手の茶碗は作自體すぐれたいゝ出來のものが多いが、石はぜそのものには大して茶碗を價値づけるものではないと思ふ。京都初代二代耕山あたりにこの石はぜをねらつて作つたものがある。窯入前に石をわざと胴部に嵌め込んだものである。不自然な作を時々見かけることがある。

斑唐津

これも近代茶人間にやかましく云はれ出したもので、この手にも二種ある樣である。一つは三角の沓形で小鉢又は茶碗に使用されて居り、作意の多いものでヘラ描の繪があり割高臺が多い。高臺脇に王の文字を見かけ釉立はやはらかな白長石釉と鐵飴釉とを半掛にしてあるものである。土味やはらかく白長石釉も溫かみのある所から茶人に非常に高く評價されてゐるもので

ある。然しこの手は未だどの唐津の窯からも出土せず、從つて唐津研究者からは唐津燒である事に疑問をもたれてゐる。他の一つは岸嶽窯及他一二窯から出土を見た白失透釉に珪酸灰の加はつた白斑上りのもので鐵飴釉の自然交つたものもある。茶器は少く雜器が多い。斑のぐい呑とさはがれてゐるもの又近來斑唐津茶碗として尊ばれるものがこれである。岸嶽帆柱、皿屋、大川原窯等に出土してゐる。

靑唐津、黃唐津

この手は唐津の至る所で燒成されて居る。靑磁釉の透明なものが厚くかゝつたもので還元焰に近い溫度に迄達した燒のものである。黃唐津はこれがやゝ熱度の下つた中性焰又は酸化焰で燒上つたもので、一方はくすんだ透明靑味をもち一方は枇杷色の透明な黃味を持つ。古瀨戶椿窯その他で燒成された黃古瀨戶釉からこれ等の名稱が出來たものである。岸嶽諸窯のものに美しい色の作品がある。

黑唐津

この手に二種ある樣である。一つは不透明黑釉、卽ち鐵分にマンガンの含まれた黑釉の燒上つたもので火度の强弱によつて天目色にもなれば飴色がゝつたものにもなるのである。今一つは長石白化粧釉を下ぬりしたものへ前記黑釉をかけたもので黑斑唐津とでもいふ可きものであらう。（蛇蝎手唐津とも云つてる人もある。）前者も後者も初期唐津に多く品種も多い。內田系の祥古谷窯と古奈甲の辻窯に主として燒かれてゐる。傳世品に相當多く、在來薩摩燒だと云はれて居たものであつたが、以上の窯の發掘によつて明かに唐津で燒かれてゐた事が證明されたのである。

彫繪唐津

これは最近筆者が名づけたものである。唐津陶でヘラ又は釘様のものでその胎土に横線又は繪を彫りつけたものであつて、ごく少いが、これを代表するものに岸嶽飯洞甕窯より出土を見た大ぶりの茶碗の胴部へ檜桓様の横線を雄渾に彫りつけたものがある。口繪二二頁はこの代表的の傳世品である。彫られた上へ鐵飴釉を流しがけしてある場合もある。水指又は花生に繪を彫りつけてあるものもあるが三島唐津の如き象嵌ではない。水指、花生では藤の川内窯から又岸嶽からも出土する。

織部唐津

この呼び名は最近唐津小山路窯發掘調査以來筆者が名づけたもので、この窯に限らず、少くも瀨戸美濃とのつながりの直接的で深い卽ち古織の意識、想意が反影して生れた唐津ものをかく名づけた次第である。古く古今和漢諸道具見知鈔の織部の項に「瀨戸織部、唐津織部とて二通有」と出て居り又永末氏藏の筆寫本に「唐津織部茶入云々」と出て居るのであながち筆者が名づけたとは云へないが、小山路窯發掘を契期としてこの手がやかましく云はれ出したので改めてかく名づけた次第である。繪唐津あり彫繪唐津あり又黑唐津にもかく呼び名されるものがある。(くはしくは「美術工藝」第二十五號織部唐津參照のこと)

以上で古く名づけられた唐津の名稱及近代名づけられた種類について主たるものをつくしたと思ふ。今後の發掘調査と文獻によつて意外の發見を得、又新なる名稱も生れて來ることゝ思ふ。

尙、京唐津、美濃唐津、萬古唐津等の名稱のものがあるが、すべて唐津作ならざるものは記入する必要を認めないのではぶいた。

茶陶唐津

加藤義一郎

茶盌

唐津の茶盌はやはり「石はぜ」に魅力を感じるし、思ひ出もある。大正六年と云へばまだ二十代の若年で董賈の端くれに籍を置いてはゐたものゝ、ホテルの廊下トンビ、骨董渉りの外人の客引に專念して古伊萬里錦手ものや蒔繪もの乃至支那陶磁の綺麗ものを對手にしてゐて「お茶」などはさらに知らずといふ境涯にあつたのであるが、それでも修業のために東京行が許されて天下の「赤星入札」を見學することが出來た。この入札に古唐津石はぜの小服一盌があつた。當時の目録を出して見ると

石はぜ面白ししまりて愛すべき茶盌

と印象を書入れてゐるが、これを林樂庵主人が一萬二千圓で落札して、同入札の鎌倉彫義經香合と共に永く秘藏したので、その後時々主人の愛撫に相伴して親炙したものである。この茶盌はその後「大正名器鑑」にも收載されたので今も時折はそれによつて面影を偲び思ひ出を新にすることが出來る。

小服の茶盌に大きな石を嚙んでゐる處がこの「赤星石はぜ」の身上であつた。轆轤の作り様、釉のなだれ、腰から高臺へかけての强さ等もさることながら、「茶味深甚」と謳はれた唐津茶盌中でも、きりゝとしまつた小服の、喫茶後にうち返し見る「石はぜ」のけしきは、いく度見ても見飽きせぬ興深く初印象の味ひを益々高めるばかりであつた。この一碗はその後藤田耕雪氏の切望に逢ひ、否み難い破目に陷つた樂庵が「値で斷はる」手で「五萬圓ならば」と吹きかけたところ、豪快な耕雪氏はものゝ數ともせず云ひなりに召し上げたので「賣りも賣つたり、買ひも買うたり」と京童の口の端にかゝつて世の取沙汰とな

つたが、結局この茶盌の傳來に色を添へることゝなつたばかりで、賣つた方の負けとなつた樣なのは、すでに二人とも故人となつた今では單に一場の物語に過ぎぬ、この茶盌今なほ藤田家の秘藏にあるであらうか。

大正名器鑑を繙くと「赤星石はぜ」の次に丁度同じ頃合の一碗が載つてゐる。これにも殆んど同樣の箇處に大きな石はぜがあつた。大正十三年六月に名古屋で吹原氏の入札に出たものであるが、これには一部の茶人が毛嫌ひする「入齒」——口緣に鱗形の破れがあつてそれを紛繕ひしたものゝ通稱——があつて、その他疵も多かつたが、口徑で二分大きく、高臺も心持ち大で、前者のやゝ端反り氣味な形なのに對してこれは碗形であつたために、少々ゆつたりと大きい心持がしたのと、負けない位の大石はぜが魅力をもつてゐたので、その入札での買物を相談されたお得意にすゝめて何としても買つて貰ひたく思ひ、札を入れさせても貰つたのである。不幸にしてこれは落札に及ばず他へ逃げたのでその後愛撫の緣に惠まれずに終つた。

唐津石はぜとの緣はこれ限りかと思つたのに、その後茶箱入の小盌を不計も入手することが出來た。これは石はぜの箇所に石が飛び出して仕舞つてそのあとに白い上釉が玉になつて溜り、口緣の一箇所が自然に土が薄くほつれとなつた處が見所となつたといふ變な愛嬌者である。唐津は由來とりつくろひのない無骨者である。石はぜや、かせや、火變りや、土のちゞれや、三日月高臺や、腰高い土を見る處や、すべてぶざまなところを侘びに叶ふとして茶人に見出され愛されて來てゐるので、嘗てもさる名だたる愛陶美術史學者から『唐津は野蠻なものに見える——殊に朝鮮役後連れて來られた陶工達の境遇といふ背景を思ふとたまらなく悲しくなるので——この淋しい心持と野蠻の氣とがこんがらがり襲つて來るのでじつと見てゐられない』とまで排擊を喰つた唐津である。

この物の數でもない小碗——これでも茶陶唐津の一員たるの資格はあるが—につなぎをもとめて、爾來石はぜの本格的な茶盌に親昵するを得てゐる。

その一は端反形、總體蒼さび色の茶盌で、久須見疎安書附の箱に納まつてゐる。その二は疵だらけの凄い面魂を持つた茶盌

であるが故に「永き日を御影の里に石刻む」と石工に身をやつして世をしのぶ「彌陀六」と一世の俳茶人雅俗山莊の逸翁によつて銘ぜられたものである。そしてまたその三は總體靑味――老蒼・蒼古の釉肌に、赤味――澁茶・濃褐色の大きい土晃をもつ、古唐津の堂々たる茶盌で、その名「踞虎」がその體を表はせるものである。これにも小さいが石はぜがある。そしてこの茶盌は心持ち反つた口端が所謂「玉緣」で、厚みを持ち含みがあるのは、筆者が指摘しようとする「石はぜ」の病弊とまでは云へないかも知れぬが――そのさゝやかな缺點を持たぬもので、これはこの茶盌が古作で、作られた石はぜでない故であるのであらう。

元來石はぜは窯の中で燒成中偶然に出來たのが―この「踞虎」の場合の如く―その起りには違ひないが、かく並べたてた茶盌のそれは、かくあれかしとその効果を睨つて石を嵌めて轆轤を挽いたものである。であれば、石はぜの茶盌は唐津の茶盌中でも最も技巧的なものと云ふ事が出來よう。石を嵌めて挽いて、石が柘榴の笑み割れたやうに土からとび出るやうに火度を上げて燒く、のであらうと想像する――技術上のことは皆目わからないのであるが――。それで石はぜの茶盌は堅いのであらうと想像する。

一井戸二樂三唐津（また國燒本位では一樂二萩三唐津ともいふが）と謳はれる茶盌のよさは、その茶盌の茶の喫み工合のよさを云つたもので、この喫み工合のよさといふものは、茶盌がぼうやりと燒けてゐて、あたりの柔かなことから來るものである。素地の燒成に於て、土の中味が鬆立ち氣味になつて、その上を可なり厚みのある釉が覆ふものが卽ちこのあたりのよさ、柔らかさに該當するのである。自然土の堅く燒き締つたものは中味の湯茶の熱さを直地に外に傳へるので、このよさの規準には宛て嵌まらないのである。石はぜある唐津の茶盌は概して堅く燒き締つて、肌冷たい感じがする。手取りは重い。それは胴から底へかけて土が厚いからである。その割に、これは轆轤の挽き加減によるものか、上半口緣にかけて次第に肉薄となつて、口緣では極めて薄くなつてゐるのが常である。それ故掌で支へる碗體から熱を感じることの尠い代りに、口緣から茶をのむ唇

の感じに強すぎる恨みがある。果して「石はぜ」は「三唐津」の條件に宛て掀るものであらうか、常に疑問に思ふのはこの點である。然しながら概して景—眺めに乏しい唐津の茶盌にあつては石はぜは唯一無上の景であり、且つ他の茶盌に見られない特徴であるから、茶人が採上げて唐津茶盌中随一の愛嬌者として持ち上げたのにも肯定される理由がある。

思ふに「三唐津」の條件に叶ふものは、石はぜなど茶人の愛玩を意識して作つた茶盌の時代よりも一時代上つた「古唐津」と呼ばれる一群の茶盌に當るのであらう。これには

米量(こめはかり)　根拔(ねぬけ)　奥高麗(おくごうらい)

などの名稱が古來の茶書・陶書に見え、それぞれその名の起源も想察されてはゐるが、いづれも茶人の心覺之程度の名稱であつて、唐津を考へる上にさして力あるものとは思はれない。殊に「奥高麗」には種々の臆說があつて、朝鮮で燒いたもの、滿洲で燒いたなどとも考られたらしいが、今では唐津で燒いたとの說に歸一してゐるし、現物に見てもこれは動かぬところであらう。

古唐津の茶盌で有名なものに「中尾」「是閑」「眞藏院」などがある。「中尾」は鴻池家の秘藏にあり、一見の榮を得てゐないが、某氏からそれの鑑賞直後『出來の上下は云ふ迄もないが「中尾」もこの手の唐津で、姿、大きさ、土、作振りも全くこれだ。』と示された一盌は箱に古唐津米量と張紙のあるもので、それによつて會得することが出來たのであつたが、世に奥高麗として傳はつてゐる茶盌も畢竟この手一連の古唐津である。その着目すべき特徴は總じて大振り深目端反形で、一言で盡せばからもの熊川茶盌の形である。

「眞藏院」は不昧公の愛藏したもので雲州藏帳には上之部に左の如く登載されてゐる。

眞藏院　古唐津（箱奥高らい）大川淸右衞門（細川三齋公ノ寺眞藏院）　安永　伏見屋十枚

卽ち「古唐津」に並べて「箱奥高らい」とあるのは、もと奥高麗と傳へられたこの茶盌を不昧公は古唐津なりと極めた證左で

あることは、夙に滿岡忠成氏によつて指摘されたところであるし、大川淸右衞門は前の所藏者で、註記の示すものは眞藏院の傳來、さらに細川三齋由緒のものとも想像されるのである。それ以下は安永年間にお出入の道具屋伏見屋から代金銀十枚で納めたものなることを示すのである。これ以外「眞藏院」に就て記す資格はないが、滿岡氏の實見記（萩・唐津―「日本人と陶器」）によれば

こし土、稍小振り深目で、長石釉のかゝつた赤出來

なることが知られる。

不昧公の雲州藏帳を檢すると唐津、奧高麗に左の數盌がある。

深山路　奧高麗　京三井　寛政　伏見屋　銀三枚（位金五百兩）
眞藏院　前出
相生　古唐津　靑出來　寛政　竹屋喜助、伏見屋　五十兩
秋夜　古唐津　文化　伏見屋　十枚
冬月　瀨戸唐津　キズカスガイ打　箱黑柿金嵐吹く淸見關の浪の上に時雨てはるゝ冬の夜の月　谷貞　三百兩
時鳥　瀨戸唐津　大ワレ　（郭公）書付　上總屋助右衞門　五十兩

これによつて昔は唐津の茶盌といへば古唐津、奧高麗、そして瀨戸唐津までが茶人の選に入つので、これが「三唐津」の範圍、從つて石はぜ乃至これから觸れやうとする朝鮮・まだら・黃・白・繪―唐津の如き、云はば小乘的な茶盌は問題にならなかつたものと知るべきである。

古唐津茶盌の概念を滿岡氏の言葉を借りて要約すると『端正な熊川形の大振りな茶盌で、長石釉がかゝり、土は鬼子岳土、酸化焰燒成の所謂赤出來で、唐津目利口傳に佳しとする「土かはらけ色にて少し狐色かゝる」もの』である譯で、奧高麗にあ

つては『小振りが悦ばれた様である』といふ。『中尾唐津は、端反りの大振りな茶盌で、姿端正、丈けや、平目、火度の加減にて土やゝ和らか目、高臺重厚正調』とあれば、これにて説明は盡きることになる。

「目利口傳」中奥高麗・古唐津に關する項を拔萃する。

一唐津の古きは奥高麗といふ、唐津の奥に窯あり、是へ唐人來て燒く、是を奥高らいと云、土は唐津の土也、此土至てこまかなるこし土也、ちりめんしぼあり、茶盌平目にてつぼみ有、香台ひくし平目に付く、口藥立は色々、眞白なる藥なし、はたそり（圖有）、香台土を見る、内ちりめんしぼあり、（唐津貫入は龜甲、萩貫入は唐松の様也）

一古唐津も少し端そり也、土こまかなり、香台同様、俗に米かしの手といふ、（圖有）此所（口緣を指して）藥はげ有。土かはらけ色にて狐色かゝる、ちりめんしぼ香台の内に有、外に無之

瀨戸唐津は、ふところ廣く端反り形のものと、開いた平茶盌とがあるが、前者を本手と稱してゐる。前掲雲州藏帳の「冬月」は本手に屬し不昧公の愛玩を得たらしく思はれる。瀨戸唐津の窯に就ては、その名稱にこだはつて「瀨戸か、唐津か」と論議されたものであるが、これも今日では既に過去の問題となつて唐津窯の所産に間違ひなく、滿岡氏に引用（前出）された私藏寫本の目利口傳にもはつきりと「瀧戸唐津は唐津の窯にて燒く」とある位なものをどうしてその論議がなされたのであらうか。

目利口傳はさらに説明して云ふ。

黃瀨戸の藥をかけたる也、大かんにう也、白藥あり、此時分の黃瀨戸藥ははや黃にあらず、白し、此手土あらき故せかい底の所土ほくれあり

瀨戸唐津の平茶盌は多く口緣を鐵粉で塗り、恰も黑い覆輪をかけた様に見える。この白釉に黑筋の被つた處の色目を見立て「皮鯨」と稱へ、專ら茶人愛玩の的となつてゐる。

繪唐津とは鐵粉で草畫の文様をつけたものである。この草畫文様は多く繪志野の文様と通ふものがある事が指摘されてゐ

る。そして志野・織部を含む美濃古窯の製品が古田織部の指導によるものとして、それらの概稱を「織部」とするのが適當であると提唱する人が、さらに進んで多分の相似性を持つ故に、繪唐津をもその「織部」中に包含して考へて然りといふ新説を掲げたことは尠くとも古陶關心者をして瞠目せしめた事であらう。

それはそれとして繪唐津の茶盌は、沓形、俗に「算盤玉」と云はれる塩笥形、筒形など、總じて元からの茶盌ではなくて、黄瀬戸の茶盌同様向附乃至火入として生れたもの丶轉用がその大部であらうと思はれるので、茶盌としてはこれを例外に考へたい。

然しながら繪唐津の茶盌全部が轉用品であるとあながちに斷じられないことは、現に大正名器鑑所載の藪内家藏菊桐紋茶盌の一例に見ても明らかであるし、目利口傳に左の記載があることによつても短見專斷が謹まれるのであるが、たゞ概念を述べたものに過ぎない。

繪唐津の手　香台念頭也、薄作も有、土少し荒目なり、青藥白藥はなし、形こもかへなりも有、香台半月形もあり、常の高台もあり、土重し、繪はなくても繪唐津の手也

通例の唐津、繪あるも無きも有、青藥はなし、こもかへ形もあり、平たいもあり、土なし、荒め砂をふくむ

そろばんつぶの形りは繪唐津の手なり

これで見ると「繪唐津の手」を一種別立て丶「繪が無くても」この手といふものを鑑別すべきであるといふ意味らしいが、詳らかではない。

金原陶片氏の編纂にかゝる「繪唐津鑑賞圖錄」によつて教へられるところによると、桃山時代に於て既に茶盌として生れた優秀な繪唐津茶盌が少からずあることが明らかである。これによると、筆者の速斷はいよ〳〵これを是正しなければならぬ。但しこれが古來茶に取上げられることの少かつたことも亦事實であることは間違ない様である。

斑唐津に沓形の茶盌といふものがある。茶人の好む斑唐津の厚い釉がかゝつてゐて、而も形は織部切形と考へられる沓であるから、茶家の垂涎渇仰に値ひするものである。沓のほかに割高台で端反形の小盌もある。石はぜ同様、茶意識を多分に持つものとは、善悪兩面の解釋からも云ふことの出來るものであらう。

白唐津、乃至唐津白釉の茶盌といふのは、上記斑唐津の變態であらうと思はれる。小振り端反形などを見かけるが多くあるものとは思はれない。

唐津黄釉茶盌といふものに、形は筒形乃至小深い端反形で、總體黄色勝ちの褐色窯變の流れ釉で覆はれ、一見肥後焼または高取焼かとも感得されるものがあるが、高台疊附の土を見て唐津なることが納得出來る一手がある。

その外「唐津はけ目」「唐津三島」などの茶盌もある事は、本を見て始めて啓發される處で、唐津の茶盌にはどんなものがあるであらうと指折り數へる時には一寸思ひ浮べ得ない種類である。元來が唐津は朝鮮傳の窯であるから、刷毛目も三島も乃至雲鶴風の象嵌などがあつても不思議は無い筈である。これらは土によつて唐津と見分けられる時は、珍物として一層茶家を喜ばせるものであらう。

唐津はけ目　是は繪唐津の藥立てか、藥色藥也、はけ目有、火替りもあり、香台に藥かゝる、土少し荒き方也、形こもかへ形もあり（目利口傳）

「日本陶瓷史」によると唐津・三島・刷毛目は元祿以降の製であるといふ。

以上で茶盌の大要を盡したかに思はれる。唐津茶盌に就て目利口傳の記載中、前出以外の分を茲に轉記して參考に資することにしたい。

一こまかき手の唐津といふ一派あり、藥青も白きも有、此香台竹のふし多し、内に火間あり、是を上品とす、此手に繪唐津もあり、土ぬめり有

一唐津の土は狐色のやうなるよし、ちりめんしぼ香台の内にあり、外にはなきものなり、萩のこし土と同じ様なれども萩は銀ばり有、唐津はかはらけのごとし

一荒土の唐津土至てあらし、繪もあり、香台半月もあり、宗旦時代のもの也

一唐津のちりめんしぼはぬけて落るやうなり、毛抜にてはさみとるならば取られべき也、萩などのちりめんしぼとは違ふ

水指

水指は朝鮮唐津、黑白の流れ釉がふきほんほうに景色を成したものにしくはない。「古唐津」その肩に「江戸」と書き足した古い桐箱に入つた水指があつた。唐津の稱へは多いが「江戸唐津」といふのは末期に屬するからこれは常識に從つて、「江戸で購つたもの」乃至「江戸藏在中」位に解してをかう。形は臼形とでもいふか、獨樂胴形の下部に壺形の底をくつつけたやうな胴締形で、丸形の天は一文字で可なり巾廣の緣を殘して丸い口をつけてゐた。大體白釉のところへ一ヶ所海鼠釉が流れ、それが胴の締つた處から下へ蛸の足のやうに擴がつてゐた。面白い景色であつたが、流釉の窯變は内部に於て一層甚しく、千變萬化内側一體の景色で、よく「これが内外代つてゐたらなア」と嘆じられたものであるが、かうした窯變の面白さは得手して内部にありたがるもので、これは窯中の火加減による現象であらうと思はれる。寸胴形の水指で上下白黑段染になつた頗るいき好みの水指がある。手、口の附いた湯次形のものや、平水指もある。また飴釉の斑になつたものもある。長角の釣瓶といふのは、長方形で二等分した一方は共土で箱なりに覆ひ、一方だけ切り開いて杪を通はせるやうにしたもので、角ばつた手がその中央境目に付けられてゐる。この角張つた大きい箱形をよく燒いたものだと思はせるものであるが、疊附の一文字、平らであるべき底は四點の貝殼跡を殘して流石に浪うつてゐる。貝殼燒は一つの手法で貝殼を伏せて四方に置き、その上へ器物を載せて燒いたもので、熔着を防ぐ手段であるが、貝殼の縞目が底土にのこるところを賞美されてゐる。

元來朝鮮唐津の類は最も意識して燒かれた茶陶である。水指と云ひ花生と云ひ德利と云ひ、相當頭をひねつて形造り、釉掛

けした苦心の跡が歴々指摘される。たゞ窯變のみは火の工みであるから、思つたやうにはならず、思ひがけぬものが出來たことであらうと思はれる。外面に出てほしい流れ釉が内部にのみ現はれてゐるのはその適例であるし、また長角釣瓶の水指で同趣同大のものが萩燒にもあることは、茶入の好みの切形がその生みの親であることを物語つてゐる。

唐津の水指は概して朝鮮唐津の手であるとは云つたが、古唐津の大きい堂々とした水指も稀に存在する。頸にて締められ、胴張り裾ひろがりに据り、篦目地文があり、耳が附いて多く青黑色釉がかゝつた姿は黑革縅を鎧つた山法師のやうな趣きがある。古伊賀、美濃伊賀、古備前の水指にこれと同じ趣のものがあるから、恐らく同時代（桃山時代中心か）のもので、朝鮮唐津の手より先行するものに違ひない。

花　生

花生も朝鮮唐津の手が寵兒となつてゐる。耳附、口締、寸胴など姿もいろいろではあるが、釉がけは極つたやうに口から肩へかけて流してゐる。黑・飴色の上へ白をかぶせたやうな形で、その白藥が變化して海鼠の七色―と云つたやうな色々を表現する。

尤も黑釉一色の花生もあれば、たまには繪唐津の花生も見かける。

朝鮮唐津花生の一流には德利がある。何れ元は酒屋の通ひ德利に生れたものがその窯變の面白さを購はれて花生に出世したものと思はれるが、後にはその出世を追ひかけて花生のための德利も造られたのであらう。これは傳世の現物を見れば明らか

である。

徳利の小形、二三寸のものは皆振出しに出世してゐる。なんばきびの皮で作つた栓をして貰つて、茶籠入の小菓子入、或は待合席の湯盃の上に香煎入の容器となつて珍重される。形は小形でも中々馬鹿にならない高價に成上つて堂々たる大花入の壘を摩すばかりである。朝鮮唐津とは釉藥による特徴であつて、目利口傳には

朝鮮唐津といふは白き藥飛々に有、體朝鮮燒也
朝鮮唐津是も唐津の窯にて燒き朝せん藥をかける、白藥也

と書いてゐる。然し土を仔細に見ると二通りあつて、唐津本來の重い土と朝鮮樣の粘り細かく輕い土とが見分けられる。釉はどちらも趣に變りはなく見へるが、總體觀の品位は唐津本來の土の方が優るやうである。

又花生の變りものとして舟形の釣花生があつた。これも朝鮮唐津の手であるが、作は頗る鈍でその鈍なところに雅味を感じるていのものであつた。土物の舟花生は、樂燒に長次郎作と傳へるものもあるから、いづれ茶人の好みによつて特製されたものであらう。

鉢・向附

次は食器である。食器に於て目立つて多いのは云ふ迄もなく繪唐津である。然しながら古來茶家に珍重せられ、從つて價値の王座を占めるのは「割山椒向附」ではなからうか。これは黑鼠色釉乃至青鼠色釉の古唐津に屬する手で、三葉とも云はれ

る。切れ目をつけた花瓣形三方開きの向附小鉢で割高臺が約束になつてゐる。これも古い茶人の好みであらう。萩の同品と時代の先後を爭ふものである。

鉢では目立つて片口が多い。古唐津、石はぜ、繪唐津、口紅（鐵粉の口緣塗附であるから口黑で紅と云ふは當らないが）等種々の手を網羅し、概して土厚く、高臺低く、口大きく、形は歪んでゐる。水に濡らして水保ちのよい處から、香物鉢として用ひるのが定型となつてゐる。

この繪唐津の片口を茶盌に用ひて名物になつたものがある。銘を「放駒」といふ。今一つ片口の口をかき取つて詰め繕つたものを「繫駒」と名附けてゐる。「口を取つた」から「つなぐ」で、口をそのまゝにしたものを「放れ」と洒落れたものだといふ。

片口の鉢は本來日常用に生れたものの登用であるが、玆に「斑唐津三角鉢」といふ大物がある。織部好の沓鉢に似た不等邊三角形の鉢で、各側面に箆による筋搔きがあり、片身當りに白釉と飴釉がかゝり、若干の窯變がある。底高臺は白けた土見で高臺內に「王」字の押印がある。さして多數在る品とは思へないし、またそれ故にこそ高價なものであるが、所見による何れもは大同小異同趣である。これは片口やその他の唐津鉢の所製と異り、茶人の好みになる特製品と推せられる。さるにても一例に見た箱書附の「柳川織部」といふのは何を示唆するのであらうか。學者の所說が伺ひたい。

斑唐津―朝鮮唐津とのけじめは甚だむつかしいが、二者を混同したとしてもさして不都合であるとは思へない―の手鉢は、上手物として作られた立派な茶陶であるが、食器を云ふときこれを見のがすことは出來まい。

繪唐津の向附は筒形のもの、平形のもの、さまざまあつて、燒きも厚手にて柔かいもの、薄手にて堅いものと種々あり、いづれも鐵粉の草畫文が附けられ、その文樣が美濃窯の志野や織部と同趣のもの多いことも指摘せられてゐる。その內のいくばくが或は茶盌となり、或は火入に轉用されることも人の知るところである。

唐津に德利があることはこのやうな原始土燒窯本來の目的物として當然であるが、酒呑猪口が特に珍重されることは、唐津

本來の茶盌によい性格が、酒をもうまく飲ませることによつて亦當然であらう。その多くは瀨戶椿手、黃瀨戶、志野、同等のぐい呑である。一頃鐵道驛賣の茶瓶に附屬した唐津窯茶呑が數奇者に取り上げられて、その出來と三日月高臺を愛でられたに見てもその一般が知られるのである。

茶入・香合

以上茶陶としての唐津を思ひつくまゝに擧げて書いて來たが、元よりこれに盡きる唐津でもなければ茶陶でもない。現に茶盌の項を書き終つてから數日後、懷に入れて珠玉とも愛玩したい樣な斑唐津の小服と、世にも不思議な黃唐津の筒茶盌にめぐり逢つてその奇緣に驚喜したことである。この二つの印象は是非共追記しなければなるまいが、今玆に、茶陶としては第一位であるべき茶入とそして香合について何ら觸れてゐなかつた事に心附いた。

さて唐津の茶入に就ては思ひ出が無い。薄茶器に轉用された繪唐津の小壺などはあつてもこれは本式の茶入でもなければ、物ずきの程度を出ない雜器でしかないものである。

大正名器鑑を繰ると不昧公の「思河」と小松侯の「松山」の二つが名物茶入として載つて居り、行衞不明として今一つ「玉簾」のあることが別記されてゐる。要するに唐津は茶入を燒くのに不適當なものであつたのである。遠州以降諸侯の國燒窯では我れ一に茶入を燒くことを競つたものであつた。適當なる土の無い處では土を移入し、技工の未熟な處では策を講じて專ら茶入を燒いたと云はれてゐる。かくして燒かれた茶入は諸侯のお國自慢となり、自己保全の音物となつたのである。それ故他

の窯藝はともあれ、茶入に關する限りは何處の國燒でも凡そ似たり寄つたりで獨自性に乏しい同類項である。この情勢の中にあつて、古窯であると同時に純朝鮮系に屬する唐津窯では、その立場を矜持して茶入燒成に獨自な立場を取つて動かなかつたのではあるまいか。かういふことが名物茶入として遺つてゐる例に見ても、土重く、厚作で、釉がゝりの鈍重なところなどからして想察されるのである。或はこれは伊賀、信樂乃至伊部茶入の程度にも達しない「頗る不調法な面白さ」からする筆者の思ひ過しかも知れないが、どうも朝鮮からものは茶盌までで、さればこそ唐津と萩には古來さしたる茶入が無いのだと、結果論からして斷ずるのは尙早であらうか。

香合も亦數少いものゝ一つである。記憶に浮ぶものは、長方形棧蓋の筥形で、その蓋の甲に半月彫で光悅好み半身の鹿を表はしたもの、俗に「一葉」と呼ぶ木の葉形の棧蓋ものなどである。いづれも靑鼠色に白い上釉のかゝつた風の色合である。どうせ器用な細工ものに適しない唐津であるから香合の少いのも自然の數であらう。さればこそその香合の價値は實質よりも遙かに高く購はれてゐる。

唐津のよさ

さてもうこの邊で「茶陶唐津」の締括りをつけて見たい。一口に云へば、成り立ちからして朝鮮に近かつた唐津窯は、文祿役後故國工人の移入に力を得て一層朝鮮風に進んだのであつた。朝鮮の日用熟練工の無雜作な、無意識的な藝術か、作り飾りのない天衣無縫のやきものを燒いたのである。唐津のよさは要するに野放しのよさである。そこにからもの茶盌のよさを傳承

したからこそ茶人のめがねに叶つたのである。美しさはあつても、雅趣はあつても、それは決してとりつくろつた美しさでも、意識して作り上げた雅趣でもない。これが茶人の意圖した侘び、寂びに合致したのである。時世が下つて工人がさかしらになつても、唐津に在つてはよく保存された傳統は破綻をまぬがれた様である。さればこそ、前に例示した「意識して作られた茶陶」のいくつかでさへ決して鼻もちならぬ程度にまで成り下ることなく、今日にまで愛玩賞美を維持し續けてゐるのである。

最近に見た斑唐津の小服茶盌の如きは恰もこの適例に屬するもので、外が白釉で中にたつぷり、黒釉が溜りそれがまた内側面から外側の一部にかけて美事な海鼠の幕釉となつて流れかゝつてゐる。釉がけが如何に無雑作になされたかが、腰高の土見と内側面に現はれた様に長い楔狀の火間によつて示されてゐる。高臺をつまんでうつ伏せに茶盌をもち、ざぶりと釉につけ、上げ際に仰向けて、中にすくひ上げた釉をぐるりと手を廻し加減に内面に行き渡らせざま、さつと餘りをあけ捨てたであらう手際を、今見るやうに生々と見せる釉がかりである。土見の處に點々釉の飛沫が散つてゐるではないか。そして高臺から腰へかけての土はきちんと約束通り「狐色」に赤味を帶びてよく燒けて居り、高臺内には生々とした土のしぼが見られる。茶盌の丸味はぐつと寄せられて小判形の口緣をなしてゐる。これは云ふまでもなく作意の歪みに違ひないが、かくすることによつて完全の平凡さから救ふことが指圖せられたのであらうし、かゝる小服茶盌の當然として茶籠に仕組まれる時、長方形の容器に適合して、而も他の道具を詰め合はせる便宜にも叶ふ様に考案されたのだらうとはあながち筆者の思ひ過しとも斷じられないのである。今一盌は黄唐津の筒茶盌である。總體が綠を少し含むかと思はれる濃さ加減の黄色かんにうあるビードロ釉でそれに表裏二ケ所にやゝ廣い幕狀の辰砂の濃赤色が出てゐるのである。内面茶溜は黄一色であるが、周圍はぐるつと簾狀をなして辰砂が流れてゐるし、外側裾廻りの釉溜にも一連の辰砂が、あるかないかの様にめぐり、その上にうのふのやうな海鼠釉がかすかに點滅してゐる。高台は極く薄作りで、内面で削り上げた様な片双になり、土は燒けちゞれた様になつて殆んど見えず、高台

内にも辰砂が出てゐる。外側口縁近くに一ヶ所小ほつれがあるが、古疵なので眞くろになつて土を覗ふすべもない。一見してこれは黄瀬戸の一種かと思はれたので「瀬戸でせう」とは云つたものゝ、つぶさに見れば唐津である。新味を湛へた色調ではあるが決して新らしいものでないばかりか、卓上に斑唐津の茶盌と朝鮮唐津の逸物の花生と並べ置いても、堂々ひけ目を見せずたじろがない面魂は一通りのくせものではないことが感じられた。藏者の新收品でさる茶家愛藏の茶箱に疵ものの祥瑞箱茶盌と入子にして入つてゐたものであるといふ。

思へば何かで「黄唐津」の記錄を讀んだことがあるがと、それから心當りの唐津文獻を片端から引き探がしてやつと見附け出したのが左に抄出する小野賢一郎氏の記述である。この上は、世の唐津學者と共にこの一盌を再検することの近きを望み、そこで確認されれば所藏主と筆者の喜びはこれに過ぎず、又本稿を綴つた意義も自から生ずるといふものである。

……最も私を驚かしたものは黄色釉の一手であつた。卽ち文祿元年より三年頃燒かれた飯胴甕古窯の發掘破片及び一個の傳世茶碗である。この手のものは今更らしく私が驚くのがおかしいかしれない。…………(中略)

それは瀬戸の椿窯や瓶子窯その他に見らるゝ黄瀬戸と同じ釉色である。黄といひ條いくらか暗灰色を帶び、釉は透明で、釉のたまりは正に「瀬戸黄瀬戸」である。卽ち「美濃黄瀬戸」のざんぐりした土とちがつて堅緻な瀬戸黄瀬戸そつくりの土であり釉である。釉際の鐵分を呈した赤色まで瀬戸の夫れに類してゐる。………(中略) 考へてみれば瀬戸でも唐津でも古い時代には之れだけの釉が掛けよく、燒きよかつたのだ。黄色釉は或る時代の釉であつたのだ。その時代の釉は黄色が便利であり、且つ喜ばれたにちがひない。人の好まない釉、人に迎へられない釉をわざと掛けるわけがない。黄瀬戸と地方別の名を以て呼ぶならば肥前の飯胴甕窯のものは宜しく「黄唐津」と呼ぶべきである。(「黄唐津と朝鮮唐津」―小野賢一郎氏―茶わん第三四號―紀行唐津の一日・古舘氏蒐藏所感―)

要するに唐津は茶陶の中にあつてはワキ役であつて、どう見てもシテに廻るものではない。茶盌にしても漢作名物茶入に伍して堂々と用ひられるものではなく、濃茶を練られることはあつても草庵の侘び用でしかない。薄茶用にしても蔭にまはる替茶盌、茶籠に忍ばすにふさはしく、むしろ獨悦茶人の伴侶となる場合が多く、またそれがその役所なのである。花生の場合にあつてはまた伊賀・備前の列に入つて比肩しようとも思はず、侘び茶人がその用ひ場所にあて嵌めるのをぢいつと待つ唐津である。鉢ならば金襴手、祥瑞の引立て役に廻つて始めから香物鉢と忍從する。茶人よどうか火入の灰を洗つて、それで客にお茶をすゝめ、當世の唐津はこれだといふやうなことをしないでほしい。火入に生れたものは火入である時こそ一番美しいのである。

唐津は、竹の花入に一段の愛着を感じる茶人の膝下にあつて親まれ愛される宿命を持つものである。

古唐津窯址概觀

金原陶片

前　　言

燒物の代名詞を東で瀨戶物、西で唐津物と言ふ。瀨戶と唐津は起源も古いが假に國燒の番附を作るなら東西の大關に瀨戶と唐津を選ぶであらう。

唐津の傳說起源は神功皇后三韓征伐の折り三韓の三王子を入質として連歸り、其內の高麗小次郞冠者に小十冠者村で製陶せしめたことゝ尙下つて齊明天皇の朝に唐津灣頭の山麓に窯を築き高麗風の大形茶碗を燒いたことゝが傳へられてゐる。此傳說に對し大正十年より調査を續行して來たが遺憾ながら信賴す可き文獻も遺蹟も發見することは出來なかつた。偶々數年前鬼子嶽と唐津市との中間鬼塚村で耕地整理の時鬼子嶽古唐津と異つた靑磁の茶碗皿等が多く出土した。其內に重なつて燒付いたまゝの破片があつたので此所を中心に探査したが窯址らしきものは何等發見し得なかつた。

工藝志料や陶器類集は唐津燒の起源を元亨年間と記してゐるが此說を確認する古文獻も又否定する古文獻も發見することが出來なかつたので、其後も元亨說を其儘にして來たのである。凡そ史の闡明は正しき文獻と遺蹟の探究精檢に據らなければ其眞相をつかむ事は困難である。故に現在更に確實な文書の發見出來ざる限り遺蹟の精檢が目下唯一の尺度ではあるまいかと思ひ此意味に於て永年の古窯發掘研究を基礎とし重ねて鬼子嶽城主波多家と海外關係を考察して玆に唐津燒の起源を室町初期時代と私考を發表する次第である。

古唐津とは室町初期時代より室町中期室町末期桃山江戶初期時代迄の製作に磁器の影響を受けてゐない作品を言ひ、唐津と

は江戸初期時代より江戸中期江戸末期時代迄の製作に磁器の影響を受けし作品を筆者は言ふ。なほ鬼子嶽を現在は岸岳と書かれてゐる。

岸岳古唐津

延久元年（八百八十餘年前）渡邊綱の曾孫渡邊源太夫判官久は鎮西領の爲め京都より遣はされ、肥前國北松浦郡御厨の庄賀治屋城に居を定めた。久より松浦小源次正松浦好松浦源四郎直松浦源三清と代を經て、清の三男源次太夫持は波多の地に封ぜられ、寛元三年（七百餘年前）鬼子嶽に吉志見城が出來た。持より波多駿河守親波多伊勢守好政波多丹波守橘好久波多信濃守好救となり、天文十三年（四百餘年前）波多家相續に就て同族間の不和となつて内部が亂れ始めた。此間三百年が鬼子嶽の最も全盛時代とも言へよう。前記源次太夫持に統一せられてより其勢力は益々盛となり單に北九州に止まらず朝鮮支那遠くは南洋方面迄も手を伸ばし或は交易を行ひ、或は侵寇をもするに至つた。歴史で言ふ倭寇は之を指すものであらう。倭寇即ち鬼子嶽住民が朝鮮の北境を侵掠したのは恐らく高麗末の頃よりと考へられる。丁度此時代は我國の足利義滿將軍時代即ち室町初期時代に當るので鬼子嶽領に朝鮮北方の文化が移入され朝鮮北方系陶工の渡來したのも此頃と思はれる。永祿八年（三百八十餘年前）鬼子嶽波多家は有馬家の藤童丸を迎へて嗣となし、波多三河守鎮となつた。其後永祿十二年に有浦の亂元龜二年に名護屋の亂があつた。天正元年同族大川野日在城主鶴田因幡守勝と戰ひ、鎮敗れて濱崎附近の草野鎮永方に遁れた。鎮は草野に引入りて數年留まつたが佐嘉龍造寺隆信の女を娶り龍造寺の力を借り、天正五年（三百七十餘年前）再び鬼子嶽城主となつて還

住したのである。天文十三年より此の間三十年製陶の不振は勿論或は陶業の中絶した事も想像されよう。鎮は好清と改名した。文祿元年豐臣秀吉征韓の役を興し三月軍を朝鮮に派し肥前國名護屋に國內の大名に命じて城を造り自ら四月此地に屯して三軍を指揮した。而して三河守好清は鍋島直茂の軍に屬し、韓土深く順天山まで攻進し將卒の半を失ふ程惡戰苦鬪したが、寺澤志摩守の讒言によつて秀吉の不興を招き、文祿三年（三百五十餘年前）好清朝鮮より歸陣するや、小川島にて秀吉の命を傳へ常陸國佐竹義宣に預けられ、秀吉は波多の領地を沒收した。此時城下は悉く兵燹にかゝつた。鬼子嶽落城と共に幾多の陶工も離散しこゝに鬼子嶽窯は全く廢窯の止むなきに至つたのである。

岸岳古唐津窯時代表

室町初期時代	室町中期時代	室町末期時代	桃山時代
飯洞甕窯	同上		
	帆柱窯	同上	
		飯洞甕上窯	同上
		岸岳皿屋窯	同上
		道納屋谷窯	同上

平松窯			
岸岳大谷窯			
小十官者窯			
珍ノ山窯			

岸岳古唐津窯址（九窯）

飯洞甕窯　東松浦郡北波多村大字帆柱字鮎歸

唐津線山本驛で岸岳線に乘換二十分にて終點岸岳驛に着く。驛を出て左に鐵砲町を過れば稗田八幡宮の前に出る。右に陣ノ平山左に岸岳を望みて尙十二三丁進めば二三戶の農家があつて、一番奥の家が藤川安之助氏宅である。此所より更に左り桐木盤越しの雜林山道を溪流に添うて十丁餘登れば、鮎歸官林道の分岐點に着く。此附近より道端に種々の藥草が點々と繁茂してゐるが昔時城主波多家で栽培せしものが野生となつたものであらう。官林道を右に五丁餘行けば溪流の會した御茶ノ水がある。此麗水の溪谷には三四十年前迄茶碾臼が數個あつたと土地の古老の話があつた。道路の左に杉林があつて此の中に飯洞甕の窯址はある。今尙此附近の地名を土地の人は飯洞甕と呼んでゐる。飯洞の言葉は我國でも各地で使用されてゐて其源は飯洞甕に基づくものではないかとの說がある。唐津燒古窯址が現在迄判明してゐる內では飯洞甕窯が最古の窯であらう。故に唐津

燒創業の窯とも言へる。此窯が世間に衆知されたのは昭和六年であつた。之より先數年前筆者は波多家の記錄と遺蹟とを調査して岸岳の七窯址を發見してゐた。其頃迄は破片を採集する者もなく破片は表面に露出し青苔が破片を覆てゐて生の儘の姿であつた。其後も岸岳が筆者を招いてゐるやうな氣持ちがして月に二三回は必ず岸岳の山に入つた。それが數年續いたので岸岳驛前の茶店では不思議に思つてゐた。昭和六年倉橋藤治郎氏が唐津燒研究に來たので同氏を岸岳に同伴した。其時肥前作陶會理事連も同行したが此時朝鮮北方系の割竹式唐津燒最古の窯址であることが新聞に發表せられ、其後研究家が全國から續々來るやうになつた。

窯は西北より東南に三寸勾配にて登り、總長さ五十四尺餘横の内面七尺餘で八室に區切られ、一番下の小室は焚起しの小窯である。一室ごとに下部の右横に焚口が付ており、器物も此焚口より出し入れし、器物の積座は少し高くて之より天井迄は四尺餘りである。オンザンの穴は四五寸角のもの七ヶ所又は八ヶ所付てゐて、築窯にはトンバイ(耐火質の粘土を角に固めた物)等は使用せず粘土のみを以つて窯の形に築きあげたものであつて、所謂割竹式窯である。普通の登窯は饅頭を續ぎ合せたやうになつてゐるので連房式窯と言ふ。割竹式窯は形狀が竹を二つに割つて伏せた形になり、一室と一室の仕切壁が竹の節に當つて天井は蒲鉾形になつてゐる。目下天井と兩側と仕切壁の一部づゝが殘つてゐるが、むしろ奇蹟と言はねばならない。大體古窯址の形が現存してゐるものは時代の新しき窯ほど殘つてゐない。古い窯に限り窯床など形を殘してゐる。之は時代の古きほど山間に築窯され時代が下るにつれ便利のよき場所を選ばれた結果、便利のよい所が早く開墾されし故であらう。出土する破片により造られし器物の種類を見れば、壺、德利、油壺、摺鉢、ドラ鉢、平鉢、片口、茶碗、皿、中猪口、グイ呑等である。素地は小砂を固めたやうなざらざらの土で釉藥は黑綠色釉、灰白色釉の二種であるが、僅かの天目釉もある。窯の焚方と火廻りの關係で多少釉色の變化した器物もあつて、いづれも小さき强き罅入が釉の一面にあるものである。先づ壺より述べて見よう。壺の製法は轆轤の上で叩き伸べ造りである故、底は板付で、器の内面に青海波の様な形が無數殘つてゐて、緣は二重に折曲つ

てゐて、縁の上面には釉薬が施してない。又耳が付いてゐる破片も出土しないが、傳世品にも耳のある壺はないものである。釉薬は黑綠色だけと言つてよく、非常に薄肉に造られてゐて時代離れのした形狀は古拙味を充分發揮してゐる。徳利も叩伸べで造られ形狀が高さに比し胴が大きく口造りは喇叭形に厚目に出來て普通唐津徳利と稱するものとは大分頸が全體に大形であつて、黑綠色釉のみで轆轤の上で篦で簡單に模樣を肩の所に付けてある。油壺は壺徳利の薄肉に比べ鈍重に厚く、轆轤で造られて黑綠色釉が徳利の如く底の全部迄施してある。摺鉢は轆轤で厚く造られて櫛目の形が大きく荒く引かゝれてゐて、ドラ鉢は叩き造りで縁が二重に返り黑綠色釉が施され、平鉢は轆轤造りで灰白色施釉が多い。此窯の片口は叩き造りで大形のもの多く、淺手に出來てゐて縁の下に穴が開き其の所に手造りの大きい上向いた口が無造作に指で押し付けられてゐて、黑綠色の釉が薄く施されてゐる。茶碗は初期程大形に造られてゐて、縁反りは餘り見受けない。そして作行も上手で薄い黑綠釉である。皿の形狀は丸縁ナブリ縁突立の三種類で縁ナブリが非常に大まかで、釉薬は黑綠色灰白色の二つで中猪口は灰白色の四方よせの形狀である。グイ呑は厚く小形であつて、高臺があり黑綠色釉灰白色釉の二種類となつてゐる。飯洞甕窯の末期に鐵薬で草花や鳥等を極めてぞんざいに描いて灰白色の釉を施した皿中猪口等が出來た。之が繪唐津の創始である。そして後で僅ではあるが型紙を使用し型紙の上から鐵薬を引て草花の模樣を出した繪唐津の縁ナブリ皿が出來て居る。其破片が同じ場所より出土した壺徳利は高臺がなく、皆平である故に貝を目砂の替りに用ひて燒き、又貝を器物の上縁に挾み其上に器物を乘て燒いたので貝の跡が殘つてゐる。茶碗皿等は初期は貝高臺であるが後で目砂を使用するやうになり、最後期には灰白色の釉を三ヶ所四角に剝ぎ土の玉を置き、其上に器物を重ねた重燒も出來てゐる。又窯道具に大小のトチン團子トチンが使用され大物の空間に小物を積みて替し積をしたもので、棚積や又帽子積をしたやうなことは無いものである。高臺の切方は普通丸、三日月、竹の節等であるが古き程高臺の切方も丁寧で器物に對し高さが低いやうに作られてゐて、高臺の中央に篦で取殘しの土があるものと蜷尻とあつて蜷尻は鉋目が大きく製作が粗雜の結果出來たものであるが、此のざんぐりした調子を茶人愛陶家は唐津縮緬皺

と稱して喜んだものである。

帆柱窯　東松浦郡北波多村大字帆柱字帆柱谷

飯洞甕窯で述べた藤川氏方より駒鳴峠道を丸尾溜池の左側十丁餘登れば分岐點がある。こゝで左に帆柱越し山道を三丁餘登れば左手檜林の山腹に窯の松と言れてゐる二本の大老松が立つてゐて、其內の大きい方の十間餘り上手に窯址がある。窯は三寸勾配で六十尺餘り南より北に登つてゐて窯式は朝鮮北方系の割竹式で目下兩壁の一部が殘つてゐる。品種素地窯器は飯洞甕窯と同一であるが、釉藥が黑綠色灰白色は僅少で製品の九割以上は不透明性海鼠釉である。我國でも此の窯が海鼠釉製作の創始窯ではあるまいか器物は一般に斑唐津と稱するものであつて、又朝鮮唐津と稱する器も此の所で始めて生れたものである。系統は朝鮮北方系に相違ないが飯洞甕と異つた別の陶工が渡來せしものである事を想像されるのは器物の形狀の全く異つた點である。壺が李朝壺形に出來てゐること、德利が飯洞甕より頸がずつと小さくなつて一般に古唐津德利形と稱する形に出來て口か小さくなつてゐること、茶碗の緣が外に返つてゐること、緣ナブリ皿に篦を用ひてナブリを付けてゐること等である。茶人に喜ばれる斑唐津、朝鮮唐津のグイ呑は此窯でが一番多く造られてゐて、高臺の內部だけ削り取つたグイ呑、高臺のある碗形のグイ呑、碗形のグイ呑に口を付けた片口グイ呑等も出來てゐる。又繪唐津壺の破片も僅少出土した。

飯洞甕上窯　東松浦郡北波多村大字帆柱字鮎歸

飯洞甕窯より右上手に四十間餘登れば杉林の中に窯の兩壁と窯床が所々殘つた窯址がある。此の窯は明治二十年頃迄飯洞甕窯より完全に殘つてゐたが、其後窯の側に小炭坑の坑口を開いたので、其時大部分破壞されたと當時の炭坑に關係した老人より聞かされた。此所の上手の方が桐ノ木盤と稱して波多家で桐ノ木を植林してゐた場所で、左手岸岳中腹に十丁餘登れば御茶

園原に出て御茶園原には今も茶樹の大株が廣い場面に殘つてゐる。此窯の下部は山道を切取つた土手に出てゐる。そして道の横が溪流であるが、川向ふの岸及山裾から澤山の破片が發掘された。之は元々溪流は山裾の方を流れてゐて道も其の方にあつたのを後で改修された結果である。釉藥陶技窯具等は飯洞甕に大體同じであるが、素地に砂氣が少くなつてゐて粘土分が多くなり、作行が全體に厚目に出來てゐる。そして窯の勾配の關係か焚方に依つてか製品が中性焰になつて黑綠色釉が黃味を持つたもの、灰白色釉が白味を持つたものが多く、器物に軟味が充分ある。嘗て小野賢一郞氏が唐津に來た時又井上吉次郞氏が發掘した時も此窯の出土品を見て之は黃瀨戸に對する黃唐津だと言つて喜んだ。唐津皮鯨と言ふ緣に鐵藥を付け廻したものはこゝで始められてゐる。繪唐津の模樣に染色模樣より取つたと思はれる圖案の破片も出土した。そして特筆する事は此窯の出土品に茶器の破片があることであつて、箆を用ひて鐵藥で模樣を付した耳附水指鐵藥を流した大形茶碗、又は箆を用ひて模樣となし腰をふくらした大茶碗、四方寄の茶碗等がある。此窯の創業は飯洞甕窯の後期に出來たものであらう。

岸岳皿屋窯　東松浦郡北波多村大字稗田字杉谷

稗田八幡宮より左に駒鳴舊道を二丁餘行けば灌漑用水道の石溝があつて、是より雜木林の山を二丁餘登れば大樫林の中に窯址はある。窯は西より東に三寸五分勾配で五十四尺餘登り、岸岳古窯中で最も勾配の强い窯で現在は窯床が僅かに殘つてゐるのみである。品種釉藥陶技窯具等は殆んど帆柱窯と同一で、素地に帆柱窯より粘土分多く、又製品に素地の燒締りが充分でないやうである。釉藥の海鼠釉と鐵藥とを交叉して施釉せしものが多く、派手な色調をなしむしろ凄味のあるやうに釉色の出たものがある。朝鮮唐津の振出しが多く造られ、各種のグイ呑も多く特に斑唐津朝鮮唐津の茶器が此の窯で造られてゐることである。茶入れ水指等の破片大形茶碗の破片が出土し、又傳世品も此の窯のものが多いことで、此の窯の近くに御殿坂と言ふ地名があるが此所には吉志見城の主要な人物の屋敷があつた場所と言ひ傳へられて居り、窯の製品と關係があつたのではないか

とも考へられる。此の窯の末期に耳付の壺又德利に黑綠色釉のものが出土し、繪唐津の破片も僅かに出土する。そして此窯は帆柱窯の分窯と見るのが妥當であらう。江戶末期に小笠原家は薩摩島津家の依賴に依つて此古窯址を發掘し出土品を島津家に多く送つたと言ふことである。

道納屋谷窯　東松浦郡相知町大字上佐里字道納屋谷

筑肥線山本驛と伊万里驛との間に佐里驛がある。同驛より北に帆柱越し道を八丁餘奥に行けば平松の溜池に達する。池の右岸を通つて北一丁餘登れば右手の雜木林の中に窯址がある。窯は南より北に登り上部は完全に近き程殘つて居るが、下の方が判明しないので窯の長さを測ることが出來ないが、岸岳窯の內では最も長く登つてゐる窯と想像が出來る。此窯の製品は三分の二程が黑綠色釉灰白色釉で、三分の一が海鼠釉であつて、品種素地陶技等は飯洞甕と帆柱と二つのものが合體した感がする。故に双方の窯が出來てから後に出來た事は充分伺はれる。そして此の窯に於て繪唐津が完全に完成されたとも言へる。繪唐津傳世品の名器は此の窯のものが多い。中猪口、向付、茶碗等に種々の形狀が生れ特に天目の釉を施した茶入又唐物天目茶碗を模倣した茶碗等茶道具專門に造られし破片が多く出土する。深筒茶碗、半筒茶碗も此の窯で始めたとも言へる。グイ呑は黑綠色灰白色海鼠釉の三種あつて始めの作行は古拙に出來てゐるが末期のグイ呑は灰白色釉が薄く素地も形狀も調子が低くなつてゐるものである。

平松窯　東松浦郡相知町大字上佐里字平松

道納屋谷窯で述べた平松溜池の左岸を廻れば池の南岸草原の丘上に窯の上部の床が少し殘つてゐて、大部分は溜池工事の時破壞されしものである。大體製品の作行は道納屋谷窯に等しいが、素成に鐵分多く含有せる粘土質に富んだ素地だけに窯歪の

製品が多く出來てゐて燒成された素地は赤黑く火肌を見せてゐる。其結果餘り長い期間に渡つて燒成されしものではなく、道納屋谷窯の分窯と見て差支へはないものであらう。

岸岳大谷窯　東松浦郡相知町大字佐里字長原

筑肥線西相知驛より線路を越え大谷長原道に一丁餘入れば丘上に炭坑用水タンクの跡があつて、此の下手が窯が登つてゐた所である。三菱炭坑開坑後今より四十年餘り前窯跡又物原迄全部切取り他に運搬されて、今は跡形も無い。然し大谷窯の口碑は傳へられ、又切取り工事の人夫に出た土地の古老は破片窯道具等澤山有つた事を話した。筆者が發掘した破片は作行が道納屋谷窯風の灰白色釉を施した素地の目細い蛇目積の皿であつた。蛇目積とは釉藥を轆轤で内部を五分幅餘りに削り取つて其の上に重ね積したものを言ふ。岸岳窯には此窯の他に此の手法は見受けない。道納屋谷の分窯と思われる。

小十官者窯　東松浦郡切木村大字梨川内字小十官者

唐津市より切木村に行く縣道を一里餘登つて行けば、竹古場である。是より右に十丁餘谷を下れば山間に十二三戶農家が點在した小十官者部落に着く。其內に庄屋を代々勤めた力石彌市氏宅があり、同氏方より二丁餘手前左の方丘上の竹林中に窯址がある。窯床の所に燒け土が赤く見えてゐて北より南に登つて居り、竹林を發掘すれば陶器の破片と窯器で鍬が入れられない程である。陶技は飯洞甕上窯と等しいが、素地が目細く非常に燒締り古唐津中の最も堅き陶器で灰白色釉の器物は一見半磁器の感があり、又素地中に含まれた小さき鐵分が釉を通して所々に見え、其多きものは胡麻が出たやうである。皿は多く三四ケ所土の玉を置いた重燒であり、灰白色の繪唐津も出來てゐる。元來唐津地方では此窯の製品を小次郎燒と稱し、神功皇后時代に出來たやうに言はれて居たが、其當時とは何等關係の無き全く岸岳飯洞甕上窯に等しき破片が出土するのである。此地は田

某氏方には祖先岸岳より來つて窯を燒いた記録が傳へられて居たと聞いたので、同家を再三訪れ、調査したが遂に其記録を發見することは出來なかつた。又太閤が名護屋城に在陣の折、白鷺山の麓にて、茶器を燒かしめたと言ふことがあるので、隨分探究したが、今だに發見することが出來ない。多分太閤の名護屋城御用窯と言ふのは此の窯を指すのでないかと思はれる。それは名護屋本營より三里餘で、此窯より一里餘の有浦地方迄各大名の陣屋が有つたからである。小十官者窯より山麓を右に四丁餘奥に行けば谷田の中に六尺角餘り盛土をして、其上に朝鮮風の石塔がある。之が古くより地方の人に小次郎冠者の墓と言ひ傳へられてゐる。上部に少し彫刻が有るのみで文字が無いので判明しない。

珍ノ山窯　佐賀市西堀端

佐賀鍋島家の居城榮城の西堀端船木右馬之助氏宅で、昭和の初頃住宅改築工事の土工中、屋敷より德利油壺茶碗皿等が多く發掘された。それより此附近に窯があつた事が判明せしものである。德利、油壺は朝鮮唐津になつてゐて朝鮮唐津德利振出しでは、此窯の製品が茶人に最も喜ばれる。そして德利の朝鮮唐津に綠青の銅を流したものが多くあつた。肥前で銅を使用したのは此所が創りである。又上手の土瓶や水指等茶器も造られてゐて茶碗皿等には繪唐津のものが多く、皮鯨に大部分なつてゐるやうである。茶碗皿の素地は白味をもつた荒目の土であるが、德利、壺等の素地は目の細い赤い軟味のある土で、下部に全く釉藥を施してないが、藤ノ川内の德利には下部に施釉してなき所にも大方灰水を引てあつて、又素地が全く異つてゐるものである。窯の有つた場所を川原小路說と龍泰寺小路說もあるが、元來肥前地方では燒物を造る所と炭坑とを山と言つてゐる。珍ノ山とは燒物を造つたので出た言葉ではないであらうか。筆者は其頃之に對し文獻を書き留めし物を此稿を書く迄に探したが、見出すことが出來なかつたが、多分鍋島直茂公の御夜物語りではなかつたかと思ふ。榮城築城の時陶器製造所より近いので城內が見える故松浦村地方に移窯させしと慶長年頃のように思はれた。時代は龍造寺隆信が女を波多三河守好淸に娶らせ鬼

子嶽に天正五年好清を還住させ、天正七年鶴田因幡守を武雄後藤家に預けし故、多分其頃鬼子嶽の陶工が佐賀に行つて開窯せしもので、慶長年迄に此窯は燒いたものであらうと思ふものである。大阪地下鐵工事の時淀屋橋附近の土中より出土した朝鮮唐津の德利を停留所の陳列に出品してあるのを見た。之はやはり珍ノ山の製品であつた。珍ノ山の天目釉飴釉等は他の古唐津に見ない程軟味があつて美しい。そして茶碗、皿等の高臺中の削りが廻轉がゆるやかで蜷尻の廻轉の數が他の古唐津の箆の數より多く形が付いてゐるものである。

寺澤古唐津

文祿三年秀吉の鬼子嶽吉志見城沒收後寺澤志摩守廣高は、波多三河守に代つて此の領地を領するに至つた。秀吉病歿し世は德川の時代と變り、文祿役で鍋島家松浦家に從ひ渡來した鮮人陶工は肥前の各地に窯を築き、盛んに陶器を造り出した。又諸國の大名も歸陣に際し競ふて陶工を伴ひ歸り、各々藩内にて陶器を燒かしめたので、國を擧げて製陶熱は愈々高まつた。是が我國窯業の劃期的時代とも言へるであらう。志摩守領主となるや、陶器の本場唐津地方で此製陶熱の高き時何ぞ目許して居よう。早速唐津燒の復興を計り先づ陶工を優遇したのである。鬼子嶽の戰亂により鬼子嶽窯を逃れし陶工は大部分唐津地方で農業を營んでゐたので、寺澤家の唐津燒復興奬勵に依り慶長元和寛永の間に幾多の窯は其領内各地に開かれ、所謂唐津燒全盛時代をつくつた。之等の諸窯によつて燒かれたものを寺澤古唐津と言ふ。志摩守は始め居を波多三河守の別館德須惠田中の館に居住し、舞鶴城は慶長七年起工し慶長十三年に竣工移住したものである。廣高寛永十年卒去し、二代寺澤兵庫頭堅高所領天草

の亂に依り、正保四年自刄したので寺澤家の唐津領主は終りをつげたのである。

寺澤家庄屋對遇ノ事

一御廣間ヘ召シ出サレシ節ハ惣庄屋ハ御廣間ヘ着座脇庄屋ハ板敷緣側ヘ入リ込ミ燒物師鯨突鑓ノ柄師ハ末座ニ着席スベキ定ナリ

小松家系譜

小松三位中將資盛五代孫小松安左衞門春盛小松安太郎秀盛武雄後藤家ヘ五百石ニテ被召出小松重之允景盛小松盛之允小松盛右衞門小松源吾右衞門小松彌八郎爲盛小松重太郎晴盛小松勘三郎小松重左衞門小松勘太郎小松李兵衞小松助之允小松主馬之亟祐盛

天正年中後藤家改革ニ付浪人ト相成松浦郡山形邊ニ罷在其砌類燒ニテ系圖並武具燒失仕候其後慶長年中ヨリ武士ヲ止メ川原村ニテ窯燒ニ相成渡世仕候小松源太右衞門小松源之允

元和年中椎峰山ニ移ル小松彌吾右衞門小松助右衞門寶永年中椎峰沒落ニ付住所不定享保年中ヨリ立川村ニ住居相極窯燒仕候小松榮八明和五年マデ窯燒仕候得共其後相止申候小松彌四郎小松勘助小松桂藏

水野和泉守（忠光）樣御代文化十一年戊ノ九月系圖御調御座候節覺書寫シ指上申候

文政改元寅八月十八日寫之

寺澤古唐津窯時代表

桃山	江戸初期	桃山	江戸初期
山瀬窯	同上	阿房谷窯(2)	同上
山瀬上窯	同上	藤ノ川内窯	同上(3)
櫨ノ谷窯		藤ノ川内上窯	同上
泣早山窯	同上	金石原廣谷窯	
平山上窯			牟田ノ原窯
田代窯			金石原東窯
焼山上窯	同上		金石原西窯
焼山下窯	同上		椎ノ峰上窯
	甕屋ノ谷窯		椎ノ峰中窯
大川原窯	同上		椎ノ峰下窯
道園窯	同上	本部小川内窯	
	御坊谷窯(1)		

寺澤古唐津窯址（二十三窯）

山瀨窯　東松浦郡濱崎町大字山瀨字上山瀨

唐津線相知驛より伊岐佐に出で、二十五丁餘來れば松浦地方での勝地見歸りの瀧がある。是より官林道の溪谷をつたつて一里登れば下山瀨に達する。尙十五丁餘登れば十五六戶點在した上山瀨部落に到着する。此部落は佐賀郡小城郡東松浦郡の三郡に跨る分水領に近く、夏尙寒さを覺へ相知町に出るにも二里半、濱崎町に出るにも三里の山を降りるのである。それで郵便はもとより、電報も配達出來ぬ僻地である。窯跡は部落の中央より右に五丁登つた官林防火線の側に窯址はある。品種陶技は岸岳道納屋谷窯に等しけれ共、大體器物の全部の形狀が小さくなつてゐる。素地は目細の白色にて古唐津中最も粘力强く、鉋目の後とには高臺中に無數の龜裂が生じて居り、發掘破片の多方がそのやうである。繪唐津及び黃味をもつた透明釉もあるが、海鼠釉を薄く施せしものが最も多く、それが窯變に依り多種多樣になつて異彩のある美しきものである。此窯では深手のグイ呑は出土しないが、碗形と中間のグイ呑は多く造られしものである。創業は岸岳沒落の陶工が此山奥で開窯せしものであらう。

山瀨上窯　東松浦郡濱崎町大字山瀨字上山瀨

山瀨部落中央より分敎場迄五丁餘登り、同分敎場の右上手一丁の雜木林中に窯址がある。品種素地釉藥陶技窯具は山瀨窯と

同一であつて、山瀬窯の分窯である。山瀬燒の口碑には岸岳より逃げ込んだ陶工の其子の時代迄窯を燒いたと言ひ傳へられてゐる。山瀬燒は創業より廢窯迄ほとんど變化がなく、文祿役後の製品にもかゝわらず文祿前の岸岳古唐津の樣である。之は此地があまりにも山奧の邊避な爲め里との交渉が少なかつた故とも思はれるのである。

櫨ノ谷窯　西松浦郡南波多村大字高瀬字櫨ノ谷

伊万里より唐津縣道を池ノ峠を越し井手野宿を過ぎて、二里餘り來れば高瀬である。此所より右に谷間を縫つて十四五丁行けば、谷の頭に五六戸の櫨ノ谷部落があり、同所の浦田對藏氏宅の境內及裏山一帶が窯址である。品種は鉢茶碗皿等で、白色の素地で、岸岳の素地よりも目細で軟味がある。透明釉を施したものも僅あるが海鼠釉と海鼠釉の器物に椽に鐵藥を廻らせたものが多い。櫨ノ谷は鬼子嶽落城の時三河守好清の夫人が最初に隱遁せし所と言はれ、始めて住した土地を假家ノ谷と呼んでゐる。此部落は正月に餅を煮て食はず、大根牛蒡は削りて食し、歲取りの魚は必ず鰯を用ひ、鰯が無い時は手に入る迄歲を取らない習慣が殘つてゐる。此地古老池田仁左衞門氏は落人として此所に來た。正月に大根牛蒡を切る刄物が無くて、刀で削つて食べた故、又餅を煮る道具がなかつたので、燒いて食べた故に、之が慣例となつてゐると話した。

泣早山窯　東彼杵郡折尾瀨村三河內免前田多々良

佐世保線三河內驛より三河內山に向つて十丁餘行き、三河內山の入口で左に一丁入れば、丘上の畑地に面して福本重治氏宅があり、同宅の右上手畑地が窯址である。品種陶技は岸岳皿屋窯と同じく素地は鐵分の多い目細であつて、海鼠釉を施した朝鮮唐津である。此窯は後で附近に文祿役渡來鮮人陶工の窯が出來、文磁器の窯が有田に出來たので、高臺の中迄施釉するようになつており、其後半磁器の製品と變り、最後には染付の白磁を燒くように變化せしものであつて、草綠色をした三河內青磁

は此所で始められてゐる。そして此窯の陶工は鬼子嶽落城に依り、同族平戸松浦家をたより同領地内に遁れて開窯せしものである。此遠隔の地に岸岳系唐津窯が因をなして後年、椎ノ峰窯の中里茂右衛門が三河山杉林に開窯し、又元祿年間椎ノ峰崩れの陶工は三河内山に多く入つて來たものである。

平山上窯　東松浦郡相知町大字平山上字櫨ノ谷

唐津線相知驛より南方に一里餘行けば、平山下部落である。更に八幡岳船山岳を向ふに見て登れば、二十丁餘にして平山上溜池の所に達する。池の上手嚴木道に出る山道の側が窯址である。製品は叩伸べ造りの透明黒緑色釉を施した古拙味豐な壺が多く、岸岳壺の末期の作行と同一である。

田代窯　西松浦郡大川村大字東田代字甕屋

筑肥線肥前長野驛より伊萬里縣道に出で、此所より八幡岳に向つて田代に行く道を二十丁餘登れば部落の入口に松尾重壽氏邸がある。同家の前方谷川を渡つて、水車小屋の右、上手田地が窯址である。製品は壺片口茶碗皿等で、鐵分多き粘土質の素地に、透明黑緑色釉を施した雜器が多い。然し大壺の傳世品には雅味のある岸岳よりも、長手の高さが伸た見事なものがあつた。創業は記錄にある如く、慶長初年頃で七年間で廢窯となつたものである。

燒山上窯　西松浦郡大川村大字川原字燒山

肥前長野驛より伊萬里縣道を西へ川原に行けば、左の山麓に溜池が三ヶ所ある。いちばん東の溜池より東南に五六十間登つた松林の中に窯址がある。製品は壺片口茶碗皿等で、素地は鐵分を含んだ粘土質で、黑緑色釉が施されてゐる。又繪唐津も多

く造られてゐて、草花の模様には見る可きものがある。

燒山下窯　西松浦郡大川村大字川原字燒山

窯址は上窯に行く溜池の東北岸の畑地にあり、窯の下部は溜池の岸に少し見えてゐる。此窯では繪唐津の草花模様より更に樹木又は天體文様等を描いて、圖案の資料を豐富にし、新らしき繪唐津を開拓しようと努力せし形跡が出土の破片に依つて充分窺はれるもので、傳世品は素地釉藥の調子阿房谷窯によく似しものである。

甕屋ノ谷窯　西松浦郡大川村大字川原字甕屋ノ谷

燒山上窯より東北へ五丁餘、池田正頼氏宅の直ぐ上手竹林中に窯址がある。製品は燒山窯に等しく、特に大鉢は此窯の得意とせるもので、大鉢に勇敢に松を描いたものは、椎ノ峰窯の大鉢に柳を描いた繪唐津と匹敵する見事なものである。創業は燒山窯の分窯であり、時代も一寸下り、燒成の器物が燒山窯より少し低火度で燒締りが弱いやうである。

大川原窯　西松浦郡南波多村大字大川原字樅ノ木谷

伊萬里より唐津縣道を北へ二里弱にして、井手野の宿がある。同宿の端より東へ七八丁、山麓に農家の散在するのが大川原の部落である。部落の上手、山口条六氏、山口甚太郎氏の裏山、雜木林の中に窯址がある。此の窯は櫨ノ谷窯が移窯せしもので、製品は櫨ノ谷と同一である。が素地が砂交りの目が荒く、一見岸岳朝鮮唐津に見ゆれ共器物の高臺が全體に小さく、岸岳よりも劣つてゐるものである。此の窯の陶工が、椎ノ峰に飛んで行つたと傳說がある。

道園窯　西松浦郡松浦村大字提川字道園

肥前長野驛の北方約十丁提川の田代彦三郎氏宅の裏谷に面せる山麓の松林中に窯跡がある。此窯の名は桃山時代の繪唐津の窯では有名である故、大方の茶人愛陶家に知られてゐる。素地が岸岳よりも砂目が細くなつてゐて、全體に作行が薄手に出來てゐる。高臺の中央に、鉋で取り殘しの土が少し高く出てゐるのが多い。そして此窯が繪唐津の爛熟期を代表してゐることも想像される。圖案の多種多様と描いた筆致の强い線實に、驚嘆する程、進歩せしものである。製品は鉢、向付、猪口、茶碗、皿等が多いが、又茶器も多く造られ、水指天目茶碗、天目釉茶入、そして向付には種々の形狀が生れ、特に深向には優秀なものの多く、いづれも道園一流の繪唐津鐵藥のカシケた美しい色を出してゐるものである。此の窯の出土品より考察すれば、岸岳道納屋谷窯にいちばん近く、同窯の陶工に依り慶長年中開窯せられしものであらう。

御坊谷窯　西松浦郡松浦村大字提川字御坊谷

道園窯址の左手一丁餘の所に窯址がある。道園の分窯と見て差支へなく、江戸初期時代迄燒成され、最後に刷毛目唐津の製品迄造つてゐる。繪唐津は道園窯と等しいが、素地が粘土質多く尙薄手に造られてゐて、作行にぶく繪附も鋭さがなくなつてゐる。

阿房ノ谷窯　西松浦郡松浦村大字藤ノ川内字阿房ノ谷

筑肥線松浦驛より北に二十丁餘行けば、藤ノ川内部落である。同部落より南波多村笠椎小麥原に通ずる阿房谷を七八丁登れば、左側丘上の畑地が窯址である。製品は繪唐津の鉢皿茶碗猪口淺向付が多い。此の窯の繪唐津異形淺向付は圖案形狀優秀に

して、下部の肉付厚く、繪唐津の窯でも有名なものである。

藤ノ川内窯　西松浦郡松浦村大字藤ノ川内勝負ヶ谷

藤ノ川内部落より椎ノ峰道を行けば、直ぐ右側が丘上になつてゐて、山口伊助氏、山口音次郎氏宅の裏畑地が窯址である。品種は德利、油壺、片口、茶碗、皿等にて、素地に鐵分多く、目細の粘力強きものにて、透明性の釉藥は下部に流れ付いたもの多く、朝鮮唐津の德利は底部板付で下部の方には施釉してないが、灰水を引てある。又繪唐津も多く出來てゐるが、其模樣は極めて簡單なもので、半筒茶碗が多いようである。そして長石釉の白色の美しい釉色に皮鯨の半筒茶碗は、又格別のものがある。特に此の窯は茶器を多く造つて居る事で、水指、掛花入、茶入等の朝鮮唐津は見事なものである。

藤ノ川内上窯　西松浦郡松浦村大字藤ノ川内字狩家ノ谷

藤ノ川内窯の少し上手畑地が窯址である。此窯も前後に出來た窯であつて、製品は同一である。そして茶器に優秀な物が特に多い。此の窯の方が燒成の期間長く殘つてゐて、後で刷毛唐津も少し燒いて廢窯となつてゐる。

金石原廣谷窯　西松浦郡松浦村大字中野原字廣谷

筑肥線金石原驛より西北へ五丁餘、窯觀音山を越して西方の段々畑地が窯址である。製品は藤ノ川内窯に等しく、朝鮮唐津の德利が主として造られてゐる。素地、耐火度低き爲め窯歪多く出でてゐて、餘り長く燒成する事なく廢窯となつて、他に移窯せしものであらう。

牟田ノ原窯　西松浦郡松浦村大字中ノ原字牟田ノ原

金石原驛より東南へ十二三丁行けば、熊野權現社がある。其裏谷池の左丘上野原の中に窯址がある。此窯は藤ノ川内窯か、廣谷窯かより分窯せしものであらう。斑唐津の德利油壺茶碗皿が造られてゐて、朝鮮唐津になつたものも僅かある。素地、餘り白色になつて藤ノ川内窯よりも雅味に乏しく味が少ない。そして斑唐津は透明釉を下掛けして、其上に失透性釉を施して出來てゐるが、此の窯になつて双方の釉を混合して斑唐津を造つたようである。

金石原東窯　西松浦郡松浦村大字中ノ原字金石原

金石原驛より北二丁、川本忠吉氏宅の東方丘上の畑地が窯址である。製品は油壺茶碗皿等であつて、始めは不透明性の朝鮮唐津式に施釉してゐるが、間も無く銅釉を全面に施した器を多く造つてゐて、金石原青藥と云ふのは此所の二ヶ所の製品を言ふものである。そして、神佛用の祭器が、此の窯で多くつくられてゐることが特に目に付く。此の窯は刷毛目唐津まで燒いてゐる。

金石原西窯　西松浦郡松浦村大字中ノ原字金石原

東窯より谷を經て西の丘上、段々畑の所が窯址である。此所の製品も東窯と同じく青藥が特色であつて、始め天目釉の蓋付小壺を多く造つて居る。そして刷毛目唐津迄窯は續いてゐるものである。

椎ノ峰上窯　西松浦郡南波多村大字府招字椎ノ峰

伊萬里より唐津縣道を北へ一里、池ノ峠である峠を越して間も無く右手の山間に椎ノ峰部落がある。同部落の上手二丁、上

多々良の山麓畑地が窯址である。此の窯は元和二年、大川原窯、此の所に移窯せしに始まり、原料に惠まれし結果、松浦村大川村．又は武內村方面の陶工此地に集り盛大になつたものである。繪唐津柳繪の大鉢、又は茶器に秀れし作品を造つてゐて、今迄述べし古唐津古窯中最も多量製産されし窯である。

椎ノ峰中窯　西松浦郡南波多村大字府招字椎ノ峰

上多々良窯の下手一丁、中多々良山の雜木林の山腹が窯址である。此の窯は始め黑綠色釉の茶碗皿の雜物を造つたが、後で甕壺摺鉢を造るやうになつた。

椎ノ峰下窯　西松浦郡南波多村大字府招椎字ノ峰

中多々良窯址の更に下手、俗に高麗神と呼ぶ山麓が窯址である。此の窯では上窯同樣に繪唐津等種々の形狀のものが造られたが、特に三島象嵌手の水指や茶碗等は上手の物が多く、變形の花瓶、朝鮮唐津に出來たもの、其他茶器が多く造られてゐる。肥前地方の茶人が古椎と言ふ器物は上窯下窯の作品を言ふものである。

本部小川內窯　杵島郡若木村大字本部字山崎

小川內筑肥線松浦驛より南に桃川宿を通つて十四五丁行けば、本部の宿に達する。嚴敎寺の附近より武內村馬渡に通ずる村道を行くこと二丁、道路の左側大古場貞吉氏宅の裏山畑地が窯址である。製品は透明性黑綠色をした茶碗皿、グイ呑が多く、繪唐津も多く出來てゐて、特に李朝壺形の繪唐津壺に見る可きものがある。此の地は元波多家の領地にて、分城の有りし所にて、製品の作行、武內地方のものとは全く異り、岸岳の製品に近く、突立のグイ呑等は武內の窯にはなきものである。

武雄古唐津

征韓役の際鍋島藩の國老後藤家信に從ひ、渡來せる鮮人陶工宗傳一黨によりて創業せられ、武雄を中心に諸窯の製品を言ふ源賴義が勇將七騎の一人、元河內國坂戶莊の人後藤內章明は檢非違使判官代舍人となり、肥前塚崎（武雄）の莊を領有した。之が武雄後藤家の初代である。其子政明に至つて地頭職となり、元永年間（九百餘年前）塚崎に御船城を築きしが次の助明、又黑髮山下に住吉城を築造した。天正年間の後藤家の領地は東は小城、南は塩田嬉野、西は有田早岐日宇、北は伊萬里、そして筑前早良郡の一部を合せて十二萬石であつた。後藤家信、天正の末年秀吉に龍造寺附屬を願ひ出で、秀吉は願の通り許可した。此時迄は領地は其儘であつた。家信朝鮮歸陣後より次の茂綱の時代に渡り、順次領地を上地したが、最も上地の多かつたのは島原亂後寛永の末頃鍋島御三家創設の時であつた。陶磁器に關係の深い有田伊萬里鄉の上地は家信の晩年で、慶長年間の事であつて、元和八年に家信は卒去せしものである。慶長四年住吉城より武雄御船城に移轉して、今迄二ヶ所に城があつたが一ヶ所となし、慶長五年後藤姓を鍋島姓に改めるに至つた。扨て後藤伯耆守家信は鍋島直茂に從ひて文祿元年征韓の途に上り、轉戰雄名を擧げて歸陣し、其際韓土の陶工宗傳を始め相當の人數を帶同せしものである。始め東川登村內田に住居を與へ、陶工は此居所で三ヶ所の窯場を造つて陶器を造り、間も無く武內村に良土を求めて、多くの陶工は內田山黑牟田山に移動せしもので、武內村では多數の窯が出來た。そして元和二年に有田に白磁製出されるや宗傳の未亡人は九百餘人を引連れて有田の稗古場へ移轉せしものである。

百婆仙の碑文　萬了妙泰道婆之墖

曾妣不知姓名高麗深海人文祿初本朝攻高麗歸河後藤家信頗命曾大考妣諗廣福別宗從來仍在門前蓋有年矣信公命々已能之幸得蒙恩賜內田楸開陶器地自作茗盌香爐乃捧信公並別宗和尙到今寺僧謂之新太郎燒元和四年十月二十九日歿法號天室宗傳曾妣訓子得母道而後捨內田來稗場黑髮山秀白土玉堆以爲天賜陶地由是家居高麗人等悉賴忝以明曆二年三月十日卒壽九十六呵淑容巍狀揭且顏耳垂眉有充瑞迹茲孫尊德常稱百婆仙惟曾公婆實是皿山始祖也祖父平左衞門法名宗海以業大振家聲生二男七女伯父宗光生男投廣福薙落先考湛丘三男許仙與飯佛中子力家事外曾孫三人爲僧不是先祖善因所致乎仙攣緇素來裔立石浮屠一基之次迺記口實伏願障雲忽盡心月圓明遠垂蔭孫葉繁榮

寶永二巳酉三月十日茲五十年

祐德嗣法比立絕芥實仙　敬白

武雄古唐津窯時代表

桃山	內田天神窯
江戸初期	
桃山	
江戸初期	李祥古場窯

内田皿屋窯	同上	山崎御立目窯	
袴野甕屋窯			黒牟田高麗窯
大草野窯		七曲窯	
内野山下窯	同上	錆谷窯	
	内野山上窯	猪ノ古場窯	
永尾窯			姥ケ原窯
一位ノ樹山窯			宇土ノ谷窯
葦ノ谷窯		長吉谷窯	
	古屋敷窯		安田原窯
	金山谷窯		山中窯ノ谷下窯
	小峠前窯		戸別當窯
	小峠奥窯		後家田窯
古那甲ノ辻窯	同上		鞍壺窯
	杉ノ元窯		明尊寺裏窯
	祥古谷窯		阿房ノ谷下窯
	市若屋敷窯		梅ノ坂窯

武雄古唐津窯址（三十四窯）

內田天神窯　杵島郡東川登村大字永野字內田

武雄溫泉町より長崎街道を南へ一里行けば永野部落あり、舊街道に入つて二丁餘の所に內田天神社があつて、社の少し手前右谷に溜池がある。溜池の堤防の右に窯床が殘つてゐる。此窯は武雄古唐津の創業の窯であつて、宗傳一黨が武雄領內で先づ此の地方に集團せしものである。土地に傳說として數百人の高麗人が住居し、又西光寺と言ふ寺もあつたと言ひ傳へられ、西光寺の地名も殘つてゐる。製品は茶碗皿等で黑綠色釉を施した素地に鐵分の多い赤黑い火肌をしたもので、此の窯は武內村に良土を發見して移窯せしものである。

內田皿屋窯　杵島郡東川登村大字永野字內田

內田天神窯より西に天神社を過ぎ三丁餘行けば、大山路部落に行く道がある。此道を二丁餘行けば皿屋であり、溜池の直ぐ下手畑地が窯址である。此窯は天神窯の次に出來たものであつて、此地方に住居してゐた鮮人陶工の大方は武內地方に移窯せしが、此窯は殘りて製作を續けしものである。製品は片口茶碗、皿、向付等を造つて居り、特に繪唐津の製品では武雄古唐津中の最優秀の窯と言つて過言ではない。現在茶人に用ひられてゐる向付は、此所の作品が一番多いやうに見受ける。そして累座の附いた繪唐津火入れは大方こゝで出たものであり、香爐等にも種々の形狀、繪模樣を描いたものも出來た。此所の高麗神

と言ふ韓人墓は街道より三丁許り山奥の山腹に三尺餘りの長方形自然石が建てられてあり、その頭部が烏帽子形に斜に成つてゐて、碑面の右方に寛永元年と記され、左方には十月二十日施主敬白と記されてある。そして中央の奉の字の下に建立ス池春石升己禪定尼伏詐若祖也とある。

袴野甕屋窯　杵島郡東川登村大字袴野字甕屋

武雄より嬉野街道を一里半行けば袴野で、田の中に貴船神社がある。社の少し先より右に入つた所が甕屋で、同所の中尾卯之助氏宅の裏山が窯址である。内田地方に來た陶工の甕師は先づこゝに窯を築いて甕製作を創業した。そして折重ねの縁の重き叩き造りに黑綠色釉を施して古拙な壺を多く造つてゐる。此窯より小田志方面に多くの甕窯が出來、次に肥前各地に分窯されしものである。

大草野窯　藤津郡塩田町大字南大草野字山ノ神

袴野貴船社の前より更に日出城長谷を過ぎて一里餘行けば市原があり、之より左に入りて大草野川を渡り南大草野の山腹に一軒屋がある。同家の前畑地が窯址である。内田の陶工が武内に行つたのも多いが、南方に良土を求めて行つたものもあらう。此の窯は其内の一つである。製品は片口茶碗、皿等で、繪唐津の皮鯨になつたものが多い。そして白土象嵌は古唐津中の最も秀れた窯であらう。水指茶碗等に三島手風に出來たものは古拙味深く、ことに高臺の味は何とも言へぬよい調子を持つてゐて、種々の茶器が多く造られしものである。此所にも寛永九年頃の墓碑が殘つてゐた。

內野山下窯　藤津郡嬉野町大字內野字內野山

嬉野溫泉町の西北十丁餘、佐世保行省營バス道路を行けば內野山部落があり、右側の丘上に高麗神の窯の松が目に付く、窯の松は二本よりなつてゐて見事な老松である。直ぐ上手が古窯址であつて、茶碗皿が透明釉を施して多く造られて居り皿は重燒が多い。

內野山上窯　藤津郡嬉野町大字內野字內野山

下窯の西方道路を越して山麓の方に登つて行けば、一丁餘にして畑地の窯址に行く。製品は下窯と同一である。元來內野窯は天正十六年開窯と言はれて高麗神の石祠に刻み、之を建立せしは明治九年とある。然し筆者は之を信じない。慶長三年鍋島直茂征韓役より歸陣の頃、我國に渡來せる陶工にて相源金源及外一名の者、內野に來て開窯せしと言ふ。出土の破片より見ても之を信ずるものである。相源の墓碑は此所の高尾山半腹の墓地に高さ八尺、巾二尺一寸の平面なる大墓碑があり、表に淸譽妙讀と心月妙讀とが並記され、右に寛永十七庚辰八月十三日として、下に相原宗左衛門尉とある。之が相源夫婦の墓碑である。筆者は內田居住の陶工が此の地で開窯せるものと思ふ。

永尾窯　杵島郡中通り村大字犬走字永尾

武雄より西に十五六丁、西谷峠を登れば中通り村である。峠より二丁餘行つて右の山麓に二丁行けば高麗人と呼ぶ丘上に窯址がある。製品には片口、茶碗、皿、鉢、グイ呑等があり、繪唐津もあるが鐵繪が少し薄いやうである。大體に黑綠色釉灰白色釉が多く、下手物が多く造られてゐる。而して此永尾の陶工は神六山を越え、大村領に陶器窯を築き、永尾山を起せしものである。

一位ノ樹山窯　杵島郡中通リ村大字東眞手野字内田山

佐世保線三間坂驛より唐津に通ずる縣道を北へ一里、眞手野の宿より更に東へ十丁、山間の谷間に内田の部落がある。同部落の入口、千人ヶ原溜池の直ぐ上手、内田山村道の左側、小高き傾斜面の畑地が窯址である。製品は茶碗、皿等が多く、天目釉、黑綠釉、繪唐津等で雜器が多い。東川登村内田より移窯せしものである。

葦ノ谷窯　杵島郡武內村大字東眞手野字內田山

一位ノ樹山窯より東方約半丁、內田村道の左側、山口和吉氏の屋敷が窯址である。製品は一位ノ樹山窯に等しきものである。

古屋敷窯　杵島郡武內村大字東眞手野字內田山

葦ノ谷窯より更に五丁、村道の左側丘地が窯址である。茶碗、皿等の雜器であるが、繪唐津の圖案に大分異色ある進歩を見せて居り、種々の珍らしき模樣を描いてゐる。

金山谷窯　杵島郡武內村大字東眞手野字內田山

古屋敷窯の直ぐ前方、內田谷の南側谷間が窯址である。製品は古屋敷窯と同じである。

小峠前窯　杵島郡武內村大字東眞手野字內田山

古屋敷窯の東方約二十間、村道の左側丘地が窯址である。此窯の名は數度の大發掘に依り、發掘品が全國に散つた結果、世間で充分承知せられてゐる。繪唐津の茶碗、皿が最も多く、素地粘土質で作行薄く、釉藥灰白色の黑味强くして又鐵の繪藥が

黒々としてゐるものである。

小峠奥窯　杵島郡武内村大字眞手野字内田山

小峠前窯の東方十五間、村道の左側丘地が窯址である。此窯は刷毛目象嵌の窯であつて、古唐津刷毛目では此所を筆頭とする。古拙にして優秀な物である。又象嵌も大草窯と劣ることはないが、素地高臺の味が少し劣つてゐる。象嵌刷毛目大鉢の見事なものが多く造られてゐる。

古那甲ノ辻窯　杵島郡武内村大字東眞手野字平古場

內田村道と黒牟田村道との分岐點、丘上の畑地が窯址である。茶碗、皿等が多いが、天目釉の天目形茶碗も造られ、又碗形のグイ呑に天目釉を施した破片が多く出土する。普通は灰白色又は黒綠色釉が多いが、簡單な草花繪の繪唐津も造られてゐる。

杉ノ元窯　杵島郡武內村大字東眞手野字平古場

古那甲ノ辻の丘續き直ぐ東方黒牟田道に面する丘上が窯址である。製品は皮鯨になつた茶碗、皿等が最も多いやうである。

祥古谷窯　杵島郡武內村大字東眞手野字平古場

杉ノ元窯の直ぐ東方の谷間が窯址である。始め此窯で造られた長石分の多い釉藥を施した繪唐津向付、皿等は古拙にして優秀なものであつて、繪唐津の繪も種々多樣に出來てゐる。皮鯨の片口等の出來は申分がなく、此窯は沓茶碗が多く出來てゐることで世間に知られており、沓茶碗には二重掛けの天目釉と、無釉の面を多く顯して銹釉を振り掛けた物とがある。茶碗の高

臺外に王士の替りに土の足を付けて重燒せし物多く、此手の傳世品は皆此足を取る時素地迄取れてゐるので足跡が少しくぼんでゐるものである。

山崎御立目窯　、杵島郡武内村大字東眞手野字黑牟田山

平古場より黑牟田山の入口道路の右側山麓が窯址である。製品は皮鯨に刷毛で模樣を付けた繪唐津の大鉢が多いが、小物も少しは出來てゐる。

黑牟田高麗窯　杵島郡武内村大字東眞手野字黑牟田山

内田谷と背合せの北の谷が、黑牟田山の陶器山である。同山の中心地點村道の右側に野田香次郎氏、野口卯吉氏、松尾某氏共有の登窯が直ぐ目につく。此登窯の位置が昔の窯址であつて、西側の小高き丘が物原になつてゐる。此窯で最も多く造られは茶碗である。そして其茶碗は天目釉を施し、長石で白い模樣を描いてある。此技法の製品は古唐津では此窯丈けの製品と言つてよい。

七曲窯　杵島郡武内村大字西眞手野字廣古良

黑牟田の陶器部落より若木村に通ずる村道を縫うて行く事四五丁、道路の左側畑地が窯址である。製品は茶碗、皿で皿には緣ナブリが有り、作行古拙にして皮鯨になりしもの多く、黑牟田山では最も雅味に富んだものである。

錆谷窯　杵島郡武内村大字西眞手野字廣古良

七曲窯址より二三丁上手、鋳谷の南側山腹が窯址である。鉢、茶碗、皿の雜器多く、繪唐津の皿又鋳釉を施せし皿がありいづれも重ね燒である。

猪ノ古場窯　杵島郡武內村西眞手野字猪ノ古場

眞手野宿の北方約七丁、猪ノ古場溜池の北側崖上の伊勢馬場園三氏の宅地及び裏山が窯址である。製品は繪唐津も僅かにあるが、黑綠色釉の茶碗、皿等が多い。

姥ガ原窯　杵島郡武內村大字東眞手野字上古賀

眞手野宿より東南十四五丁の所に姥ガ原の部落がある。同部落の山手、山口十吉氏宅の裏山が窯址である。製品は皮鯨の茶碗、皿の小物多く、素地薄作で又比較的に輕い感がするものである。

宇土ノ谷窯　杵島郡武內村大字東眞手野字宇土ノ谷

姥ガ原の東方約五丁、宇土ノ谷の登り口に溜池がある。其溜池の直ぐ下手松林の山麓が窯址である。製品は茶碗、皿の雜器が多い。

長吉谷窯　杵島郡武內村大字東眞手野字長吉谷

宇土ノ谷溜池より內田谷に通ずる谷間傳ひの山道を縫うて登る事五六丁、山道の左手谷頭の原野が窯址である。製品は宇土ノ谷と等しいが少し厚味に出來て釉藥の調子がよい。

安田原窯 杵島郡武内村大字眞手野字多々良

眞手野宿より北に縣道を越して六七丁の所に安田原部落がある。部落の古川治兵衞氏の家の前畑地が窯址である。製品は天目形に天目釉を施した小形の茶碗が多いのである。

山中窯ノ谷下窯 杵島郡若木村大字川古字山中

武雄驛より北に朝日村川上繁昌を通つて一里行けば朝日村と若木村との境界をなす戸坂峠があつて、峠の一軒茶屋より縣道を更に北に行けば料理屋があり、料理屋の前より武内村黒牟田へ通ずる山道を傳つて行く事五六丁、左手雜木林の緩やかな山麓が窯址である。製品は壺、片口に、鉢、茶碗、皿、グイ呑であつて、作行は武内村の窯と同様のものであるが、轆轤が非常に良くて器物の土の伸べ揚りが氣持ちよいものである。繪唐津の鉢、刷毛書きの繪唐津大鉢もよく造られてゐる。武内村より山を越して開窯せし黒牟田山系統である。

戸別當窯 杵島郡若木村大字川古字山中

戸坂峠の料理屋より縣道を北に五丁、道路の左側岩谷助作氏の一軒家より更に左に山道を行くこと二三丁、右手の山裾、左手の畑地が窯址である。製品は茶碗、皿、擂鉢等の雜器が多い。

鞍壺窯 西松浦郡松浦村大字中野原字寺ノ谷

寺澤古唐津で述べた金石原の東部落山形の宿より右へ西本願寺派西念寺の前を通り行く事約八丁、此の附近一帶を寺ノ谷と

言ふ。寺ノ谷の東側山麓が窯址である。製品は灰白色釉天目釉の茶碗、皿の雑器が多い。

後家田窯　西松浦郡松浦村大字中ノ原字寺ノ谷

鞍壺窯の西一丁、西側山麓が窯址である。製品は鞍壺窯と同じく雑器の窯であり、武内系が山を越して此の地方に開窯せしものである。

明尊寺裏窯　西松浦郡松浦村大字提川字村分

松浦驛より北五六丁の所が村分の部落である。此所に明尊寺と言ふ古刹がある。寺の裏山に窯址があり、天目釉を施した小形の天目茶碗である。

阿房谷下窯　西松浦郡松村浦大字藤ノ川内字阿房ノ谷

藤ノ川内より南波多村の笠椎小麥原に通ずる山道を登ること七八丁、阿房の溜池より二三丁上手、國見岳の山麓が窯址である。製品は茶碗、皿等にて粗雜な繪を描いた繪唐津も僅かあるが、上窯とは全く別系統の窯である。朝鮮人アボウなる者此所に窯を開きし故阿房ノ谷の地名となつたと言ふ傳說があり雜器の窯である。

市若屋敷窯　西松浦郡大川村大字川原字甕屋谷

寺澤古唐津甕屋谷窯の直ぐ南向ふ雜木林の山麓が窯址である。土地の古老は此の窯の製品を阿蘭陀燒と言ひ、又窯址の西南山裾の上に阿蘭陀墓と稱して天然石を三つ四つ集めし所が二三ヶ所あるが何等文字もないので判明しない。窯址より破片を見

れば武内系統とは異なつた朝鮮系の壺徳利等で、叩伸べ造り、そして無釉の様に見える薄き黒綠色釉を施してあり、燒締りが弱いやうであつて壺等は呂宋系ではないかと思ふ程である。器物の縁等にも指で押し付けた繩目の文様があり、釉の薄き繪唐津の皿等も少し出來て居る。朝鮮系ではあるが系統の異つた陶業地の者が渡來して創業せしものであらう。

梅ノ坂窯　西松浦郡大川村大字大川野字梅ノ坂

甕屋谷窯址より東方に眉山を登れば、十二三丁來た所が山の中腹である。其杉林の中に窯址がある。此の所の製品はやはり壺徳利は全く一若屋敷窯と同じものである。然し此の窯の製品には和蘭陀燒とは言つて居ない破片より見れば一若屋敷の分窯と見る可きものであつて、黒綠色釉を薄く施せし茶碗、皿等も出來てゐる。和蘭陀と言ふことが何より生れしか、一若の製品が他の窯と異り無釉に近くそして薄手で其上燒締りが充分でない爲め全く異つて見えた結果で、其言葉があるのではないかと思はれ、之に對し何等文獻も發見することも出來ないのである。

多久古唐津

建久二年多久平太郎宗盛は此地に來りて梶峰城を築き、其後代には十二萬石を領有するに至つた。然るに永祿七年、多久上野介宗利は龍造寺隆信と戰ひ敗れて遂に舊多久氏は滅亡せしものである。而して隆信の弟和泉守長信、此地を領し一萬餘石を與へられ、後年龍造寺姓を多久氏に改めしものである。慶長三年の末、鍋島直茂歸陣の際、鮮人李參平を佐嘉榮城に帶同し

た。李參平は征韓の役鍋島軍勢の道案內役となり、尙糧秣運搬に至るまで我軍の爲に少なからず便宜を計りし者故、此儘彼に賞與をやつて韓土に殘し置かば如何なる危害を加へられんも計り難く、直茂の恩命により李參平は多久安順の軍勢と共に同船して我國に渡來せしものである。佐嘉に來た參平は姓を金ヶ江三兵衞と日本人の姓に改め、多久安順に預けらるゝ事となつて多久に送られたのである。安順は彼が韓土にて燒物を造つて居たことを聞き、早速其製作を試む可く命じたので、城の西方、岡の一角に窯を築いて陶器を燒いた。それより西多久村に又窯を築いた。之等を多久古唐津と言ひ、尙大川內村地方の古唐津の作品が系統が判明しないが多久系とする事にした。

金ヶ江三兵衞由緒之事

金ヶ江三兵衞ト申者元來朝鮮人ニテ往昔日峰樣朝鮮御陣之節三兵衞儀於彼國御道案內申上於御陣中身命ヲ擲抽忠節候歸朝之節被□□御聞候者彼ノ國之御導等仕候朱□付テ者高麗人共ヨリ害ニ逢候モ難斗依之御供被□召具由被□仰出共節長門守安順同勢內々召連渡海仕候右之者李氏ニテ御座候得共金江島ノ者ニ付在名字相唱ヘ金江三兵衞ト被召出候處言語ヲモ不通萬事御國風ニ不移合一同勢內召連候由緣有之長門守ヘ被相預於此方モ同然之振合ニ付彼國ニ於テ何ノ產業ヲ仕罷在候哉相尋候處燒物相營罷在候由申述候ニ付先以テ私領女山ト申所ニテ燒方試サセ候處成程相應ノ燒物致來候付テ所々ニテ燒方相整候ヘ共十分ノ土其外辨利無之候ニ付テ長門守ヨリ請御意燒物試之蒙御免許候故御國中燒物土見巡リ於所々燒方相整候內於有田鄕最上ノ土見出候ニ付同鄕上白川ト申所ヘ致住居燒物仕立段々繁昌仕唯今ニハ所々皿山ト相成御國產之隨一ト相成候儀金ヶ江三兵衞勳功ニ御座候右釜燒開基之由緒ヲ以テ車御運上被差免置境目土代々干今子孫之者持來罷在候扨又三兵衞子供孫共代々□□繁昌數人ニ罷成候ニ付美作守茂矩代々ニ至リ小扶持著申由緒之者共ニ付テ共節兩人ヨリ判物等ヲモ相渡シ置キ持傳罷在候右之通以前ヨリ格別ノ筋目ニ付三兵衞子孫之者共今以テ厚ク申附置キ候　右之通御座候　以上　（文化二年多久家古文書）

多久古唐津窯時代表

桃山時代	江戸初期時代	桃山時代	江戸初期時代
唐人古場窯		正力坊裏窯	
高麗谷窯			權現谷窯
市ノ瀬高麗窯	同上		小樽窯
擧谷窯			

多久古唐津窯址（七窯）

唐人古場窯　小城郡多久村大字西ノ原字梅野

唐津線筋原驛より南へ縣道を一里下れば多久家代々の舊城下であつた多久の町が今は寂しく存在する。同町の南方約五六丁の所に西ノ原の共同墓地がある。同墓地の西側雜木林の丘上が窯址である。此窯は李參平が多久安順の命により最所に窯を築いて試みしものであり、素地に鐵分多く赤色を呈してゐて、靑黄色の釉を施せし茶碗、皿のみと言つてよい。

高麗谷窯　小城郡西多久村大字板屋字山口

多久町より杵島郡若木村に通ずる縣道を西へ約一里餘行けば山口と呼ぶ山村に出る。同村の溪流に架せる檀ノ木橋西側一帶の畑地及宅地が窯址である。此窯は唐人古場より更に良土を發見して移窯せしものであつて、此所では種々の作品が本格的に造られてゐる。特に前に餘り造らなかつた繪唐津の繪付が大方の作品に行はれ、向付皿等には特に灰白色の釉を用ひし優秀な繪唐津があり、又多久唐津の沓茶碗は此所で始められてゐて、刷毛で胴の外部に模樣を入れてある軟味のあるもので、其他に茶器も出來てゐる。

市ノ瀨高麗窯　西松浦郡大川內村大字市ノ瀨字谷馬米

伊萬里町より三間坂に通ずる縣道を約一里、更に右手村道を二丁行けば市ノ瀨山の陶器部落に出る部落の西南約四丁、溜池の直ぐ上手、俗に高麗神と呼ぶ丘上が窯址である。製品は繪唐津多く、草花の模樣秀れてゐて、特に大鉢には見事な作品がある。素地釉藥も初め頃のものには雅味深きもの多く、後期には釉面平になりて雅味が少なくなつてゐる。

櫸谷窯　西松浦郡大川內村大字吉田字牧

伊萬里町より三間坂に通ずる縣道を東南へ平尾に行き、同所より右に大川內山に達する里道を進んで一里餘來れば大川內山の登り口正力坊に着く。之より右に十丁餘登れば牧山の部落で、牧山の北麓、欅谷の入口、林梅次郎氏の裏山が窯址である。製品は片口、大鉢等の古拙な繪唐津が多く、茶碗、皿等も僅か出來しものである。

正力坊裏窯　西松浦郡大川內村大字大川內字正力坊裏

大川內山入口より北西約三丁、俗に正力坊の裏と呼ぶ丘上の畑地が窯址である。製品は欅谷窯と大體同じものである。

權現谷窯　西松浦郡大川內村大字大川內山權現谷

大川內山の人家の集つてゐる入口より左に俗に權現谷と言ふ山腹の畑地に窯址はある。此窯では繪唐津の圖案に新らしきもの多く、又向付、中猪口等に形狀の異なりしものあり、繪唐津として進歩せし作品が多い。そして韓人墓と稱するものが一基あつて、屋根冠りの五尺許りなる平面碑であつて慈父道秋靈位寛文九年九月十九日玆母妙任尼萬治三年八月十五日と記されてゐる。

小樽窯　西松浦郡有田町小樽

上有田驛より南へ窯業試驗場の裏一丁、道路の右畑地が窯址である。製品は靑黃色釉を施せし茶碗、皿の小物のみと言つてよく、古唐津では末期の作品に屬するものである。

平戸古唐津

平戸松浦氏は鬼子嶽の波多氏と同じ松浦黨である。文祿元年四月松浦鎮信は兵三千を率ゐて釜山に上陸した。そして彼地で苦戰奮闘して慶長三年十二月鎮信歸陣の際連れ歸りし韓人、平戸に上陸せしもの百二十五人と稱せられてゐる。住居を平戸城下、今の高麗町に定めさせ其内の陶工で金久永、巨關、引等が主なる陶工であつたと思はれる。鎮信は城下より三里餘を離れし安満嶽の山麓にて窯を築かせ、製陶せしが良土に惠まれず、多くの陶工は伊萬里地方より有田地方に土を求めて又三川内山地方にも窯を築いて製陶した。之を平戸古唐津と言ふ。

平戸古唐津窯時代表

桃山	江戸初期	桃山	江戸初期
平戸御茶碗窯		清六ノ辻一ノ窯	同上
原明窯	同上		清六ノ辻二ノ窯

平戸古唐津窯址（二十五窯）

	天神ノ森窯	下向原窯	
小物成窯		小溝上窯	同上
南川原天目窯		小溝中窯	同上
外尾山窯		葭ノ元窯	
山邊田一ノ窯			地藏ノ平窯
	山邊田二ノ窯	牛石窯	同上
小森谷窯			永尾山高麗窯
	權現山窯		弓田鳥越窯
	廣瀬向窯		村木不動佐上窯
柳ノ元窯	同上		村木山仁田窯
		土師ノ尾窯	同上

平戶御茶碗窯　北松浦郡中野村大字山中免字紙漉

平戶城下より南西三里、高曾根川の上流、紙漉部落の谷村喜太郎氏所有の雜木林の山麓が窯址である。此窯は巨關が渡來後始めて創業せしと言はれ、白色の素地に白色の釉を施してあり、普通の製品は罅入があるが火度強く燒締りしものは一見磁器と變りがない。平戶松浦家賣立の時白色の大平鉢が出た。其の箱には慶長の年代が記してあつた。之は確に中野燒であり、磁器と言つた方が當然のやうなものである。此中野燒の磁器が巨關に依つて確に慶長年代に燒いた事が判明すれば、李參平の元和二年磁石發見より古くなり、我國の窯業史にも異變が生ずるのである。大體始めに玆で造られしものは金海風の厚手の抹茶碗が最も多く、又飴釉を施した茶入も多い。茶器を目的に燒かれしものと言つてよい。

原明窯　西松浦郡曲川村大字原明字本谷

佐世保鐵道線路に沿ふて、佐賀縣と長崎縣との境界地點に原明と言ふ部落がある。同所より線路を踏切つて更に畔道を東南へ二三丁行けば尨大な草原の丘に出る。此處が窯址である。片口、茶碗、皿等が多く、古拙な鐵繪の繪唐津は片口に見る可きものがある。特に高臺の無い糸切まゝの碗形グイ呑は此窯でが最も多く造られしものである。

天神ノ森窯　西松浦郡曲川村大字南川原字南川原

佐世保線と伊万里線との分岐點より南方一丁、南川原道に入りて右に天滿宮がある。社の裏山が窯址である。製品は茶碗皿の雜器が作られてゐる。

小物成窯　西松浦郡曲川村大字南川原字小物成

南川原道の左手畑及杉林の丘上が窯址である。製品は小物の茶碗、皿で、簡單な繪を描いた繪唐津の破片も出土する。

南川原天目窯　西松浦郡曲川村大字南川原字上南川原

天滿宮の前を更に南へ南川原道を五六丁行けば柿右衞門の窯のある部落があつて、同所の西南丘上竹林中に窯址がある。製品は天目釉を施せし茶碗、皿及高臺付のグイ呑等である。

淸六ノ辻一ノ窯　西松浦郡曲川村字淸六ノ辻

鐵道佐世保線と伊萬里線との分岐點より伊萬里線に沿ふて縣道を北へ約十丁餘、農家の點在する邊りを淸六ノ辻と言ふ。線路の東側島田淸八氏の裏山が窯址である。鉢、茶碗、皿、向付等を作つてゐて繪唐津も多いが特に此窯にて鐵釉を半面施し、灰白色釉を半面施した片身變りの鉢皿が多くあることが目に付く。此窯で片身變りは創始されたと言つてもよいであらう。

淸六ノ辻二ノ窯　西松浦郡曲川村字淸六ノ辻

一ノ窯直ぐ西南鐵道線路西側の雜木林及畑地が窯址である。一ノ窯の分窯にして、製品は一ノ窯と同一である。

下向原窯　西松浦郡曲川村大字向原字下向原

黑牟田山の西方約十丁、鐵道伊萬里線藏宿驛の東方八丁、下向原大溜池の直ぐ下手に當る丘上の原野が窯址である。製品は茶碗皿の雜器が多く、餘り長く燒れた窯でなく奥の方に移窯せしものであらう。

小溝上窯　西松浦郡曲川村大字向原字上向原

伊萬里線の分岐點より北方約六丁、山麓の村を小溝と言ふ。小溜池の上手山麓が窯址である。製品は繪唐津、天目釉、黑綠色釉の片口、茶碗、皿が多い。此窯の素地雅味深く、又作行の調子、此の地方古唐津窯中での優秀な窯と言つてよいであらう。

小溝中窯　西松浦郡曲川村大字向原字上向原

上窯の直ぐ下手小溜池と大溜池とに挾まれたる丘上が窯址である。作品は上窯より劣りし雜器のみと言つてよい。小溝の丘の上に二反歩餘りの平面地の山畑がある。こゝをビク屋敷と呼んでゐる。そして麓に古堂ありて、引さんを祀つてあると言ふが、何等確定する文獻も無く、又御本體は上部の細くなりし立體石にて何等文献も無い。傳說には小溝窯の鮮人陶工の頭領であつたと言はれてゐる。

外尾山窯　西松浦郡有田村大字外尾字丸尾

有田驛より北に三丁餘、丸尾部落の北裏山丘上に窯址はあり、製品は雜器のみと言つてよい。

山邊田一ノ窯　西松浦郡有田村大字黑牟田字黑牟田山

有田黑牟田部落內梶原貞一氏陶器工場の直ぐ西北、山邊田と稱する丘の西方傾斜面の畑地が窯址である。製品は黑綠色釉、灰白色釉を施せし茶碗皿、高臺の有る碗形のグイ呑等である。

山邊田二ノ窯　西松浦郡有田村大字黒牟田字黒牟田山

一ノ窯の右手南面せる傾斜面の原野並に畑地が窯址である。製品は一ノ窯と等しい。黒牟田の丘の上に頓六さんと稱して高麗神を祀つた所がある。此地方鮮人陶工中の頭領格であつた者らしく、小字の地名にも頓六と言ふ所があり、此丘の頂に登れば屋根形の冠にて三尺餘の石塔が祀られてある。表面に金山大人と刻んである。

小森谷窯　西松浦郡大山村大字大木字廣瀨山

廣瀨山部落の西方約三四丁、俗に小森谷と呼ぶ谷間の山麓が窯址である。製品は黒綠色釉、飴色釉等の小物が多く雜器のやうである。

權現山窯　西松浦郡大山村大字大木字廣瀨山

廣瀨山の花輪權現社の裏手小松の密生せる山裾が窯址である。製品は小森谷に等しい。

廣瀨向窯　西松浦郡大山村大字大木字廣瀨山

廣瀨山の入口共同墓地一帶が窯址である。製品は權現山と同じものである。

柳ノ元窯　東彼杵郡折尾瀨村大字木原免字柳ノ元

佐賀縣と長崎縣との境にある古里部落の一軒家、尾崎利康氏宅の前面畑地及び雜木林の傾斜面が窯址である。製品は繪唐津黒綠色釉、灰白色釉の無地で鉢、片口、茶碗、皿等である。此の窯は金久永が燒いたと言はれてゐる。そして此所より北東二

三丁に前ノ平と稱する墓地に一基の碑があり、高さ四尺五寸位巾二尺五寸位の平たき自然石にて上部に梵字が大きく刻まれ、其下に宗金及妙永と並んで記されてゐる。金久永夫婦の碑と土地では言ひ傳へてゐる。

葭ノ元窯　柳ノ元の東南四丁餘の山麓が窯址である。製品は柳ノ元と同一であるが、此窯の製品全體が粗雜のやうに見へるのである。

地藏ノ平窯　東彼杵郡折尾瀨村大字木原免字木原山

木原山の横石臥牛氏宅の裏畑地が窯址である。製品は繪唐津多く皿は薄造りにて三方に蘭の花を描きしものが多い。木原山では此窯だけが古唐津であつて最初の窯である。

牛石窯　西彼杵郡折尾瀨村大字牛石免字下牛石

三河內驛の南方約十丁、稗古場皿山に通ずる新道路の直ぐ左手、岡崎忠雄氏宅の前方丘上の原野が窯址である。三河內地方で泣早山に次ぐ古い窯であつて、繪唐津の大鉢、皿等に古拙な雅味豐な作品多く、特に天目釉を施せし沓形の茶碗は茶人が最も喜ぶ上作のものがある。

永尾山高麗窯　東彼杵郡波佐見町大字永尾鄕字永尾山

永尾山本登窯の直ぐ東側、陶山神社下、岩永善藏氏宅の裏山が窯址である。此窯は杵島郡永尾窯より移窯せしと言はれ、小物の雜器が作られてゐる。

弓田鳥越窯　東彼杵郡波佐見町大字弓田字鳥越

有田より波佐見街道を行けば村界に岩峠があり、同所岩下茶屋より東へ小道を辿れば弓田部落に出る。部落の入口、山口久太郎氏宅の裏山が窯址である。製品は繪唐津も多少あるが雜器が多い。

村木不動佐上窯　東彼杵郡波佐見町大字村木鄕字不動佐

村木國民學校より西北五丁、左手丘上に下窯があり、直ぐ下窯の右手雜木林の山腹が窯址である。製品は高臺の高い小形の茶碗皿が多い。

村木山仁田窯　東彼杵郡波佐見町大字村木鄕字不動佐

木原道の右手、俗に山の谷堤と呼ぶ池の左手雜木林の山麓が窯址である。製品は上窯と同じ。

土師ノ尾窯　北高來郡諫早市大字小栗面字土師ノ尾

諫早市より江ノ浦縣道を約一里行けば土師ノ尾部落に達する。更に十丁餘行けば山口峠になり、峠の登り口に中道橋がある之より右に約一丁入れば山麓の雜木林中に窯址がある。此の窯は諫早家に付いて渡來せし鮮人陶工の開窯であるが窯數が少い故平戶古唐津の部に入れしものである。壺片口鉢茶碗皿等にて黑綠色釉又は飴色の釉で作行は厚味で素地に鐵分多く、土地の人に道珍燒と言ふ傳說があるので鮮人が道珍と言ふ者であつたと思はれる。

唐津燒陶技の考察

加藤土師萌

一、陶技上より觀たる史的考察

凡そ我國の文化は古來直接或は間接に外邦諸國の影響により發達し、その最も大なるものは支那及朝鮮の隣邦であり、殊に我陶藝の分野に於てはその顯著なものがある。淳化力に富める我國民性は、いつしか模倣より脫脚して而もその水準から遙かに超越し全く日本化された幾多の貴い傳統が殘されてゐる。

唐津燒に於ても又同樣に、直接朝鮮の影響に據つて創業し國燒中殊に茶陶として冠絕せる地位を占むるに至つた。特にこの唐津燒のもつ雅致掬すべきその風格は、對外的の影響に據つたものとは謂へ、深奥にその源流のよさを把握しつゝも日本的個有の香の高い優れたものであり、このよさが何によつて如斯淳化され生長せしめられたかは、必竟此地方に於ける天惠の豐富な原料と、我國のみが世界に誇り得る茶道の恩澤であり、又過速度的に發展を遂げたことも天與の動機と善導のよろしきを得たからで、いはゞ順風に帆を擧げた形とでも謂ふべきであらう。

唐津は古來朝鮮との交涉が頻りで、遠くは神功皇后の三韓の征擧に始り、現在此地方に於ける幾多の遺跡とその傳說は、何邊まで眞實かは別として全く荒唐無稽なものばかりでもあるまい。乍然斯かる往古の事柄は本編に於ける唐津燒とは何等の關聯もなく問題にする要もない。夫以降平安、鎌倉、室町、桃山へと次第にその交涉の度合も活發化されたことは當然の歸結といはねばならぬが、扨この唐津燒が果して何時の時代に何の動機によつて其の陶技が齎らされ、此所に創業せしかについては案外的確な資料に乏しく、傳說は勿論諸記錄の示すところのものも、多くは我田引水的に都合よく中途で改編されたものが多

く全面的に信頼すべきものがない。

鬼子嶽の豪族松浦黨は。既に鎌倉時代に於て通商貿易を開き、又倭冦は足利初期に於て小船乍らも陸地沿ひに勇猛に其の勢力を海外に遠く侵略の手を伸したと傳へられる。唐津と朝鮮とは散在する島々を足場として海路の安全性からも通商、且侵略上にも地の利を占めたことに相違あるまい。従つて彼我の交渉が頻りにあつたものとして何の不審もないが唐津焼の陶技が果して何時此所に移入されたかについては未だ確たる定説が樹立してゐない。

大體是迄の研究諸家の發表に據れば、

金原陶片氏の元亨年間説、水町和三郎氏の弘和、元中説、佐藤進三氏の文祿、慶長説の三説がありこれを要約すれば

	日本	朝鮮	支那	去今年	西暦
一、	元亨年間 鎌倉時代 北條高時時代	高麗中期 忠肅王時代	（元）	約六二〇年前	一三二一―一三二四
二、	弘和、元中年間 室町初期 足利義満	高麗末期 恭愍王 辛禍王時代	（明）初	約五六〇年前	一三八一―一三九二
三、	文祿、慶長年間 桃山末期 豐臣秀吉	李朝中期 宣祖時代	（末明）	約三五〇年前	一五九二―一五九七

以上の諸説は夫々因るべき見解によつて其の主張を明にされてはゐるが、猶幾多検討の餘地があり輕卒に断定すべきではない。

筆者の本編に於ける擔當面は主として唐津燒の製作技法に就てゞあり、斯かる史的考證に對しては餘り觸れることを避けたい。偶々敢て若干言及するの要はその擔當面を詳述するに當り陶技の系統、樣式、窯の形式、作振り等に於ても夫々その時代の相(スガタ)が反映するものであり觀察上自らその必要性を生ずるからである。

唐津燒の起源並に變遷の時代を的確に知る上に於て最も遺憾な點は、其の古窯跡が肥前一圓から長崎にかけ頗る廣範圍に亘り、無數の窯跡が古くから發見され又、長期に亘つて屢々多くの人々が相當量の發掘をなし來つたにも拘らず唯の一片も、年代在銘のものが出土してゐないことである。史實の究明に方つては古記錄の示すところのものも勿論重要であり且手がゝりの道には相違ないが要は物の實體、實相を正しく見極めることが何よりも肝要であり、又的確であり得る、假へ年代在銘のものが出土しないにしても、自ら出土陶には各時代の相が表現されてゐる筈であり、此問題の闡明は、秩序ある而も徹底した古窯跡の發掘こそ解決上唯一の鍵であると信ずる。

況んや猶未發見のものがないとも斷定出來ない。唐津燒最古の窯といはれる鬼子嶽飯洞甕並に帆柱窯以外猶時代を遡る程のものが假にありとすれば根底からその起源について再檢討を要することゝならう。

乍然現在のところ一應さうしたものゝないものとしての假定の下に愼重なる檢討をなすより他方途がない。扨前記の三說中金原氏は過去十數年に亘つてなされた多くの古窯跡の發掘についての功績は實に偉大なものであり、實際の物についても觀察が最も廣いので從つて同氏の說には十分傾倒して然るべきではあるが、實際の出土陶の實相から受ける感覺は倒底我鎌倉、彼の高麗といふものを感受し得ない。

佐藤進三氏の近年唐津諸古窯跡の發掘によつて從來出土のもの以外に新に茶陶としての所謂本格的な多數の優れたものを發見され、之等のものより受けた稗益は之亦大なるものがあり史實並に物への觀察も新しい視野を以て新說を發表されつゝあつて、斯界のため欣快に堪へぬ。同氏は從來餘り顧みられなかつた唐津に於ける織部の作風に着目され、殊に小山路の如きその

代表的の窯跡に力を注がれ、索ひては其の視野を他陶にも及ぼされ物の實相を以て說述されてゐることは何よりも雄辯であり誤りがない。

筆者は最近頗る不備ながら織部燒に對する一考察を「待問編」として發表し世の識者に問ふところあり、（古美術二十一年一月號織部燒考參照）織部燒が世間周知の分野に止らずして、從來志野と呼ばれ、黄瀨戶といはれ來つたものも織部であり且唐津燒に於ても又文祿慶長の頃に於て古田織部の基範の下に作られたものと思はしき一見して織部の共通的な風格をもつた唐津燒も廣義に解釋して當然織部燒に包含さるべきものであることを指摘した。

此點に於て筆者の織部燒考と、佐藤氏の唐津燒起源考とは一派通ずるものがあつて意を强ふするが、佐藤氏の唐津燒の起源が全面的に文祿以降に時代を切り下げる說については猶檢討の餘地がありはせぬかと思はれる。

金原氏は鬼子嶽古窯が、文祿三年波多家の沒落と伴にそれ以降廢絕に歸したと述べられてゐるが、この說に對しては鬼子嶽諸窯から出土するものゝ實相より見て、餘りにも文祿以後に於ける古織の香の高いものゝ優品が多い點から見て信じかねる。寧ろ、水町氏說の如く、一旦廢絕したものが再び慶長初年に復興したものと觀るべきが妥當ではなからうか。

唐津燒が文祿の役を一契機として大轉換をなしてゐることは慥かにその出土陶の面から觀て爭はれぬ事實であり又、此契機こそ唐津燒が一大飛躍の基をなしたものである。顧みれば實に天與の好機とも謂ふべきで、唐津燒の此機に築かれた健實な基礎は、軈て豐富な磁土の發見と伴に、伊萬里磁器として、染付に、又赤繪にまで著しい發展を遂げるに至り、九州陶磁が今日在ることは畢竟かゝる惠まれたこの千歲一遇の好機あつてのお蔭だと謂へよう。

乍然、古田織部がこの文祿役を逆る天正十五年既に秀吉に從つて九州へ出陣してゐることは同年卯月九日附で秀吉が諸將に與へた朱印狀の中に「古田織部頭」とあるところより推察され（松下家古文書）同年十月朔日に開かれた。秀吉が滿天下に號令した盛事、北野の大茶會には無論この織部も驅せ參じたものであらうと思はれる。又宗滿日記天正十五年十月十二日の條に、利

休、幽齋と共に織部は聚樂第內の數寄屋で、博多の豪商神谷宗湛を客として茶會を催してゐることよりも推察される。

當時古田織部の茶人としての地位は既に第一流であり、この宗湛との親交は軈て彼の好尙の上に具現せられた多くの異國情趣は海外事情に精通せる宗湛を通じて彼の旺溢せるその才氣を以てこれを十二分に攝取するところがあつたものであり、この影響が如何に大であつたかは織部燒の全貌から受ける異國趣味によつて十分理解されるところである。

扨織部が最初九州入りをしたのは、この天正十五年の卯月から九月に亘る候であつたとすれば、長く見て約半歲間である。この間に於て彼がこの唐津燒に何程の關聯を生じたかを知る何の手がゝりもないし、又當時の唐津燒の狀態がどんなものであつたか、鬼子嶽の諸窯が波多家の沒落と伴に一旦癈絕したものとすれば、この天正末年に近い頃に於ける唐津燒も鬼子嶽に於て朝鮮の陶技そのまゝに燒造しつゝあつたとも想像されるが、此時に於ける織部としては自らの好尙によつて燒造せしむるほどの餘裕もなかつたであらうし、又出土陶の面より觀ても此頃既に織部が實際に關與したとも思はれない點が多い。

唯玆に唐津燒に對する概念と異國の風趣に接して何物かの構想を得たであらうことは容易に想像し得られる。

矢張り實際に唐津燒が一大轉換の動機となつたものは文祿の役であらう。此機會に於て從來の朝鮮陶技そのまゝの唐津燒を茶道に立脚してよくこれを日本化して、發展を具現したものは正に古田織部の功績であり、當時利休既に逝き、利休なきあとは茶の湯の第一人者として又一面大工藝家として一世を風靡したこの古田織部が、豐太閤に從つて肥前名護屋にまで出陣し來つたことが實質上大きい素因をなしてをり、此古田織部が、初度の文祿役に於ては、後備衆の一人として同城東二の丸にその部下百五十人を指揮し、在番衆として此地に止り朝鮮へは渡らなかつた、此時の肥前在勤は約一ヶ年半といはれる。

此間に於ける彼の動靜についても詳かでないが、朝鮮に於ける戰況は頗る有利で破竹の進擊による相次ぐ戰捷の朗報に士氣軒昂たるものがあり。又其反面には、出征の將士に引かえて名護屋在陣衆は無聊を慰むるに汲汲たる有樣で、能、假裝行列其他樣々な催が行はれ、彼の山里の庵は勿論茶の湯の盛大だつたことも察するに餘りあり、從つて古田織部が當時茶と陶藝の得

意の分野に存分の手腕を振つたことが容易に想像され、唐津燒が漸く發展の途上に乘出したのも凡そ此頃のことであらう。

筆者は今度古窯趾の調査から歩を此所名護屋城趾に進め、天主臺に立ちて海洋を大觀すれば、脚下は丘陵起伏する二里餘に亘る陣營趾、馬渡島加唐島を隔てゝ壹岐、對島が遠望され、朝鮮半島が幻影の中に浮ぶ、其昔五十萬の大軍を叱咤した英傑秀吉の偉業が偲ばれると同時に、今度の大平洋戰の慘さを想ひ合はせ坐ろ感慨無量のものを禁じ得なかつた。

次期慶長の役に至つては、戰況必ずしも我に利あらず、その一部は可なりの苦戰を舐め、殊に太閤の薨去といふ大きい衝撃をうけて、前役の如き戰捷の法悦に醉ひ遊興に耽ることも恐らく不可能だつたかも知れないがとに角、茶道と陶藝の發展には却つて前役に於て拓いた堅實な端緒に實を結び、完全な軌道に乘じたことゝ思はれる。前後七ケ年に亘る比間の古織の動靜につき識る由もないが、出土陶が最もこれを雄辯に物語つてゐる。

織部燒は美濃に於て創作され著しい發展を遂げたが、この唐津に於ても又其の分家同樣に繪唐津、彫唐津は志野に通じ、黄唐津は黄瀨戸に、黑唐津は黑織部に餘りにも共通してゐる。

美濃と唐津とは活眼を以てすれば餘りにもその共通點の多いのに驚く、陶藝は其の地方、地方の原材料の相違と、古來の傳統的習慣の結果、容易に拂拭することの出來ぬ地方的特色があり、玆に於て美濃は美濃、唐津は唐津の特色があり、生命がある譯であつて、一貫した一つの風格はその時代の趨勢と優れた好尚の然らしむるところである。

繪唐津は李朝鐵砂に酷似し、鐵砂の技法が一旦唐津で咀嚼され、繪唐津となつたものが美濃の志野に及ぼしたものとの見解も理論上一應成り立たないではないが、それにしては當時既に美濃では旺んに志野を燒いてをり、いはゞ志野全盛時代とでもいふべき時代であり、これを證據だてるものとして大萱窯で窯出土の「あやめ手黄瀨戸」の破片に「文祿二年八月刻銘」「文祿年刻銘」のものがあり、この「あやめ手黄瀨戸が志野と併行して燒造されてゐることからしてその年代は志野に在ると同樣の解釋が出來る。又假に既に文祿以前に唐津の飯洞甕窯や、道納屋谷窯の繪唐津中最も上作で而も古い手と思はれるものが燒

造されてゐたとするならば、現在その古窯趾から出土するものに餘りにも織部好みの優品が多いことが不審である。殊に志野に近似の繪唐津や彫唐津の如き一目して明瞭なこの織部好みの作風が、文祿以前の唐津燒の情勢から見て出土するのは不合理である。

故に斯かる織部好みの作風は、蓋し美濃の志野が一歩先行し、文祿の役を契機として唐津に及び、東西兩窯に始めて類似のものが生れるやうになつたものと思はれる。彼の有名な御所丸茶碗にしても、當然、古田織部の好尙に據つて生れたものであることは論を俟たない。のみならずこの御所丸は、朝鮮產を以て敢て本歌としたものでもなく、古織の創案をして、朝鮮にも、美濃にも又唐津にも夫々其地に適する地方特有の陶技上に考慮が拂はれて、白無地もあり黑もあり黑刷毛もあり、樣々な御所丸を發註したものに相違ない。

文祿、慶長の頃に於ける瀨戶燒はその勢力が大部分美濃に傾いてをり、前記の如く、黃瀨戶、瀨戶黑、志野などの大部分の茶陶全盛期であつた。しかし當時靑織部系のものはまだ生れてゐなかつたと想像される。この靑織部が軈て創作されたその窯こそ、唐津から其の構造を取入れたものであり、現在久尻、元屋敷窯として殘る古窯趾は其昔唐津竈を始めて築造した景延の窯所である。

此元屋敷窯の築造年代については明かでないが此窯趾出土のもの及略同時代と推定される久尻窯所產と思はれるものに年代在銘のものがある。

一、慶長十年六月五日　　鐵描銘　扇形向付

名古屋市　森川勘一郎氏藏

一、慶長十七年熱田大神宮九月吉日加藤左右衞門寄進仕候

刻銘　總靑釉獅子香爐

御物　帝室博物館藏

以上の二點は青織部盛期のものであり猶、

一、元和八年五月　鐵描銘　燭臺破片　多治見工業學校藏

右は盛期を稍降る手のものであり、之等を綜合的に推察するならば、美濃に於ける最初の唐津竈築造は、慶長初乃至中年に至る間に於てなされたものゝ如くであると謂ふことが出來よう。

現在泉町岡田家に遺る古文書に

「瀨戶大竈燒物並唐津竈取立之來由書」

なるものがあり、その要點を揭ぐるならば

前略　或時唐津より森善右衞門ト云フ牢人當時先住一閑和尙ニ內緣有テ被參折節筑後之被竈燒物見物シテ惜哉大分火ガ損ルト云フ時ニ筑後是ヲ聞テ何ソト唐津竈樣躰燒樣如何問彼ノ仁答ヘテ用躰ヲ能々見分シテ燒樣委細相傳被ヨト云フ　依是ニ彼仁歸國節同道ニテ僕一人連レ彼ノ地ヘ行竈ノ用躰燒樣ヲ念比ロニ相傳シテ歸リ先ツ屋敷之內チニ竈場ヲ定メ四方高壁ヲ掛其ノ內チニ竈打ツ也是ハ餘竈之者ニ爲秘密之ナリ　云々

とあつて此窯の築造によつて生產の經濟を意圖したばかりでなく、純酸化焰による銅呈色の靑綠色釉卽ち靑織部が創作されたことは實にこの唐津竈の恩惠と謂はねばならぬ。又この唐津竈の築造が瀨戶地方に於ける登窯の嚆矢である。

唐津地方と瀨戶地方との陶技上の交涉は前記の記錄の示すところの牢人森某によつて始めて開拓されたものか猶其以前より して交涉があつたものか、全く不明であるが、昔時の交通關係よりして差程頻繁であつたとも考へられないが、とにかく窯だ

けは慶長年間に於て漸く始めて美濃、否瀬戸地方に其の構造が傳へられたものであり、唐津に於ては一體其當時を逆ること何時の頃からして此窯が存在したのであらうか、唐津燒では創業以來この形式の窯に據つたものであることは疑ふ餘地なきところであり、慶長より過去何十年間と燒き續けてゐたとしたならば、遠隔の地とは云へ風の便りにでも專門の陶工の耳に入りそうなものとも思はれる。獨り瀨戸地方のみに止らず今少し他地方へも早く傳播しそうにも思はれてならない。斯かる問題も唐津燒の起源を檢討する上に於ける一面ではなからうか、窯については後章に於て詳述するが、唐津燒中最も特異な存在は、帆柱系の斑唐津と、帆柱窯及飯洞甕系の叩き手唐津とである、(因にこの二種に屬するものは他窯にもあるが概ね低調でこの二窯がその源流を爲してゐる)

此の二つの陶技は、全々別個な系統のものであることが直感されると同時に決して此事を見逃してはならぬ。

斑唐津は朝鮮北方の陶技であり、且其の創業が、他の唐津燒中壓倒的多數を占むる織部系の茶陶とは僅かに時代が一歩古いといふことは、この陶技が即ちその窯と伴に移入され、最初から唐津燒はこの形式の窯によつて燒かれてゐるといふ事である。

玆に便宜上唐津燒の陶技を極めて大まかに分けて見るならば、この斑唐津の手と、叩き手唐津と、他は茶陶中心のものと大體この三種に分類することが出來やう。そこで最初、鬼子嶽に齎らされたものは何であつたかといへば私は卒直にこの斑唐津であるといひ得る。叩き手唐津は、朝鮮の甕造りの叩き手專門の工人によつて作られたもので餘り多產的ではなく主流を爲したものは斑唐津であり、稍時代を隔てゝ出發したが非常に過速度を以て進展し唐津燒の全域に亘つて旺んに燒造されたのが、織部唐津である。斑唐津の窯は北鮮の形式である割竹式で隔室があり、叩き手唐津の甕專門の窯は隔室のない隧道式である、(窯第一圖參照)隧道式の形式は割竹式よりも古いもので、窯の形式から觀れば叩き手の方が古くも感ぜられやう、しかし乍ら現在この隧道式窯が唐津に見當らないばかりでなく、燒造の規模より見ても叩き手は極めて僅少であるからこのものが先驅となつたとは思はれない。斯樣にして考察を進めて行くと、結局斑唐津の技法がその窯の形式と伴に唐津に於て燒造の火蓋を

切り、入混つた陶技も各々別個な窯を築造するの煩を敢てしないで、便宜上皆この割竹式の窯を利用して燒いたもので、既設のこの窯の形式に據つて委く成功したことによつて強いて別個な形式の窯を築造する必要が起らなかつたからである。

織部好みの茶陶を中心としたものも恐らく逑上の意味で、唐津燒の窯の形式は專らこの割竹式に據つたものであり、征韓の役に於て連行した陶工には各地方のものが混用し從つて窯に於ても本國で用ゐたものとは多少の相違がありもするが、この唐津竈の構造に於ては、鐵砂は勿論のこと、染付、辰砂などを假に燒くとしても決して不可能ではない。必ず燒き得るのである。が然し、技術は識つてゐても適當な原料の發見されなかつたことなどに支配され燒き得なかつたものであらう、染付や辰砂を燒く窯は僅かに天井の構造が異るのみで些して變りはない。（第二圖參照）

假にこれを逆に考へて見るならば、最初、若しも南鮮系の陶工がその技法を傳へたとすれば或は北方の陶工達もその窯によつて斑唐津を燒いたかも知れない。かうした考へ方は決して不自然ではあるまい。

とに角、唐津燒の窯の形式が最初からこの割竹式に據つたことに於て、何よりも先にこの斑唐津を燒いたことはこの窯の形式が實證してゐる。

扨、先驅したこの帆柱窯の作品が北鮮會寧燒に似てをり、會寧燒の陶技がこの帆柱に移入したものとの說は既に一般の常識であり、一應定說の如くになつてゐる。乍然會寧燒が果して何時時代から燒造されてゐたものか、又その初期の作品がどんな調子のものであり、時代と伴にどう變遷したかなどの事柄については不幸にして同地方に於ける古窯趾の調査も不十分で現在詳かでない、筆者の識る範圍では、この會寧燒なるものは初期の帆柱窯の作品どころか、同系の唐津燒中稍時代の下つた手のもの程のものであつて、決して初期帆柱窯の源流として合點のゆくほどのものを曾て見たことがない。

帆柱窯卽ち唐津燒創業期の作品の系統が北鮮系のものたることに於ては異論の餘地なきところであるが、會寧所產の此手のものが帆柱窯初期のものに比し極めて低調であり、殊に帆柱窯初期の作品が決して酸化焰燒成の白海鼠ではなく、均、汝窯に

も西敵する鮮かな天青乃至月白に通じ、而も其の作振りに於ても雅致に富んだ調子の高いもので而も壺類などは多く紐造りで、之等の作風から見て北鮮の何邊かに、この源流となつた窯所がなくてはならない猶。此手の所謂均窯風の作品が決して偶發的なものではなく、此窯の初期のものは還元焰でこの呈色を目標として造られたことが明かであることをつけ加へておきたい。

扨かうした帆柱窯初期の作品を靜かに觀察するにつけて想起されるのは、熱河に於ける金代（南宋）遺跡出土の類品である此手は舊滿州國立博物館に汝窯として多くの列品があり、宋均窯と呼ばれる手のものと比べて其の素地が粗面で作振りは概ね無雜作で青味月白の地釉に紫乃至紫紅色の斑文があるものが多い、この斑文は釉裏に銅が着彩された結果に據ることは勿論である。帆柱初期の作品にはかうした銅呈色の斑文は全々見受けられないが、其の素地や作振り釉調に於て頗る共通點がある。

熱河出土の此手のものが果して汝舊窯所産のものであるか、或は滿蒙の地域内で燒造されたものかについては檢討を要するが、滿蒙地方に於ける古窯趾には意外なものが存在し近來その研究の歩が進められつゝ新しい發見もあり、現在此手のものについては猶調査不十分で明かにされてゐないが、或はかうしたものもその窯所が存在したのではあるまいか、均、汝の陶技が朝鮮に傳はるとすれば何の理由があつて南部及中部に傳はらずして北鮮の而も東岸に此技が傳はつたものか不審である。唐津燒初期の陶技の源流を探るには先以て北鮮地方の古窯趾につき十分な調査が必要であり其結果に據らざれば明白でないが、玆に參考資料として筆者所持の一片の陶片を紹介しておきたい、これは曾て筆者が支那、滿鮮の陶業視察の途次（昭和十年六月）京城舊朝鮮總督府中央試驗所に於て割愛を受けたもので、此陶片は同所に於て原料調査の目的の下に鮮内各地に派した技師の或一人が採集せられたもので、同技師の語るところに據れば明かにその採集箇所は古窯趾であることが推定される。

所は咸境北道鏡城朱南面三郷洞で朱南炭抗より四里の奥地で、更にこの陶片がどんな調子のものかを若干玆に説明しておきたい。

器物は單純な稍深目の徑四寸三分、高サ一寸二分五厘の皿で、稍鐵分の含有した砂目土で其作振りは厚目作りで高臺際だけが丸カンナ（ヘラ）で削られ、竹の節高臺で高臺内は丸味に削り中高（臍）で、釉調は優れた還元焔の均窯風の鮮かな月日青色を呈した乳濁釉で、外面は下半身高臺共土見せでその土味、作振り、釉調の凡てが實に帆柱窯初期のものによく似てゐる。舊滿博の列品熱河出土の汝窯ものに比し、銅の着彩による紫紅斑がない。而もこの朱南面の作品が三ヶの目によつて積重ねの朝鮮式匣詰法に據り匣鉢を用ゐてゐない點に於て特異性がある。

筆者は當時官職に在つての出張旅行で、日數にも限りがありこの朱南面に心索かれつゝも遂現地の調査を爲し得なかつたことは實に殘念である。これは單に一個の陶片に過ぎないし、而も他人の手によつて採集されたもので、これ以上現地の狀況について語る資料を持ち合せないのは遺憾であるが、この朱南面の作品が餘りにも帆柱窯初期の作品に酷似してゐるのに驚く、これこそ唐津燒の本歌として十分に首肯し得らるゝもので到底會寧燒の比ではない。

朱南面は、鏡城、清津の港に近く通商貿易の關聯性からも案外かゝる東海岸の奥地にまで或は倭冦などの手が伸びてをり、陶業國産を意圖してその工人を引連れて帆柱に創業したものかも知れない。

幾度も繰返すやうであるが、帆柱窯の初期は決して酸化焔燒成の帆帶黄白色の海鼠釉ではなくて、優れた還元焔の均窯風のものであつたことを十分に識つておく必要がある。元來この還元焔は其の焚方が至極困難であり、初めの中は還元焔で目的を貫徹しやうとしたものゝとかく酸化焔になり勝の結果、その釉調は白色の乳濁失透釉となり軈てはこれに甘んじて遂に酸化焔に移行したその經緯がよく窺はれる。

酸化焔に墮した結果白海鼠の斑唐津が創作されたのである。

斯うしたことは瀬戸燒の初期に於ても同樣に支那の青磁を目標としたものゝ窯の形式にもよること乍ら、優れた還元焔が意の如くならず焔はとかく酸化焔に傾き、素地及釉中の鐵分はその酸化作用を受けて自然黄色調を呈し、軈てはこれに甘んずる

の結果遂に「黄瀨戶」なる一手が創作されるに至つたのと全く東西好一對の實例である。

釉の性狀については別項に於て詳述するが、この乳白釉(白海鼠)は、唐津燒が我國に於ける最古のものであるが、其時代が文祿を逆る凡そ何時時代に當て嵌るかは盲斷を許さず重要且難問題であり、愼重に檢討を要する、猶帆柱窯初期に次て古い手と思はしきものに叩き手唐津がある。この叩き手は帆柱窯及飯洞甕初期の作品に優れたものがあり、道納屋谷、皿屋谷の諸窯にも及ぼしてゐるが概して低調であり、素地も釉も若干相違してゐる。帆柱窯の初期の一部のものを除いては凡て巧な轆轤作りばかりであるのに此手のみがどうしてかかる非能率的な操作を敢てしたものであらうか、現今の鑑賞家はその作振りの特異性を尊び陶藝作家に於ても又轆轤はそれとして別個なその作技に興味を感じ其の作技が試みられつゝあるも、當時の自然の狀態から考察するならば、恐らく轆轤の出來る工人が何んのために敢てこんな仕事をする必要があらうか、この叩き手の作品を拵らへた陶工はその系統が全々異つたものであると私は信ずる。この技法は現在猶朝鮮にも支那にも昔のまゝに傳へてをり、叩き作りしか出來ない甕や鉢や壺類などを專門に作つてゐる陶工達で、此技法は全く特殊なもので之等の陶工は勿論轆轤を廻して作ることを心得てはゐない。飽くまでこの仕事に慣れ切つてゐるから叩き作りに限つては實に巧みである。叩き手に慣れた工人に轆轤が出來ないと同樣に、轆轤に慣れた工人には又此の叩き手は難かしい。叩き手は半ば紐造りの技巧が加味されるが、製陶の初期に於て轆轤の發達してゐない頃に於ては立體の大物を引伸すに困難なために行はれた紐造りの技法とは別である乍然最初は全く別個な夫々の分野をのみ護つた工人達も同じ場所で朝夕業を倶にする關係から互の長所の交流は或程度爲されるやうになつたかも知れない。叩き手に用ふる土は特に粘力が必要であり、自らその原土の性質に於ても出發點を異にしてゐることがよく判る。飯洞甕窯には此手の優品が多く若し此手の方が帆柱窯より一歩先行したとすれば、それは窯の形式が當然甕專門に燒く隧道式の隔壁のないのがなくてはならないが、現在此種の窯が遺存してゐないので明かでない。

次に飯洞甕窯に壓倒的に多い青唐津(焰の性質で黃唐津ともなる)は一見して美濃窯に於ける「ぐひ吞手」黃瀨戶に近似し

た釉調である。青い色合から黄色調に靡て鉦鉢風の黄瀨戸風の作振りに移つて行く狀態は美濃瀨戸の瓷器手から「あやめ手」に移行する狀態にも似てゐる此種のものゝ中でもその最も初期に屬すると思はしきものは、案外時代も古く帆柱初期と伯仲の間に在るかに感ずるものもあるが、此手の釉が可なり長期に亘り利用され新古に跨つてをり釉としては所謂並釉とでもいふべきもので多く利用されてゐる。

唐津燒か茶道の上に立脚して燒造されるやうになつたのは決して足利時代に於ける我國初期茶道の上ではなく、畢竟文祿、に其の端緖を拓き、慶長、元和の頃に於て最高潮に達したものと思はれる。我國の茶道の初期に於ては茶器として用ゐられたものは支那產か若しくは國燒の唐物寫しで自ら一定の制約された嚴正な姿のものであり、第一茶碗に於ては主として天目茶碗が用ゐられてゐる。

此點に於て唐津燒にして眞に唐物寫しとして肯定の出來る天目茶碗を造つたかどうかを檢討せねばならぬ。

唐津諸窯に於ける天目茶碗中最も上作と思はれるものは、道納屋谷窯のものであらう、形態も端正で唐津燒の個有の技癖も尠い、乍然高臺の作振りに於て第一、高臺內の削り込み深く、台先端薄く、釉のかけ方重厚ならず規律に乏しく、天目茶碗そのものからしては、唐物眺ひの意圖は汲み得るも、これを瀨戸椿系及美濃窯初期のものと對比しても遙かに唐物との懸隔が甚しく、又燒造の時代から見てもこの道納屋谷窯がその時代にまで溯り得るとも思はれない、しかし唐津に於ける天目茶碗中では最上位に置かれるものであり、其他道園、明尊寺、金石原、安田原に至つては問題にならぬ。下手で、織部末期に近い美濃大平のそれに似て、天目茶碗としての用に供せられたものよりは、寧ろ日常雜器の分野に入るべきもので、その形態の上に僅かに天目の名殘を止むるに過ぎない。

要するに唐津燒を斯うした陶技の上から解剖して見ると、其の地方的歷史や記錄とは必ずしも一致するものではなく大體繰返してこれを要約すれば次の結論に達すると思はれる。

一、唐津燒は朝鮮北方の陶技の直輸入であり窯の形式と共に帆柱窯に創業したこと

一、初期帆柱窯の作品は還元焰の、汝、宋均風の天靑、月白瓷であること

一、窯の焚き方が還元焰から次第に酸化焰に移行した結果遂に、帶黃白色の海鼠釉の斑唐津が創作され、此の系統の釉の我國に於ける先驅をなしたこと

一、叩き手唐津は最初朝鮮の叩き作り專門の工人によつて造られ、轆轤の出來る工人とは別個な存在であること

一、灰釉の靑唐津も酸化焰に伴れて黃色調となり黃唐津と呼ばれる黃瀨戶に通ずるものとなつたこと

一、唐津天目は道納屋谷窯を最上とし、之を唐物に比すべくもなく、瀨戶の唐物寫しにも劣り所詮足利の初期茶道の用に供せられたとは思はれないこと

一、繪唐津を中心とした日本的作風の茶器は文祿役を契機として端緖を拓き所謂、織部唐津がその樞軸を爲してゐること

一、織部の好尙に基いたものと推察される所謂織部好みの風格をもつ作風は美濃窯を基點としてこゝ唐津にも及んだこと

一、繪唐津は、李朝の鐵砂、美濃の志野の陶技が交々唐津に於て風土化され彼我の交流が濃かなこと

一、茶器としての意圖の下に於て燒造されたものは文祿以降のことで、文祿前期に於ける諸作は槪ね日常品であつたこと

一、文祿以前に於ける古窯は鬼子嶽に限られ、その燒造の規模は些して大なるものではなかつたこと

一、此地方の對外交涉が歷史の示すところによれば可なり古いにも不拘出土陶の實體には餘り古い時代相を感受し難いこと

一、創業年代は輕卒に之を斷定すべきではないが彼の高麗我が鎌倉に通ずるものは毫も認められないこと

一、朱南面の陶技が必ずしも直ちに南宋に通ぜず、又帆柱初期の作品がその燒造の規模が僅少であることから推察して均窯風のものゝ燒造期間は案外短期間であり畢竟李朝、我室町も中期を下るものと推定されること

而して唐津燒の全體に潜んだ朝鮮的技法は渡來工人の傳統的習慣性の顯はれであり、最も特異性の著しいものは帆柱初期の

均窯風の手と叩き手で、他は全く日本的の香の高いものばかりである、奥高麗や熊川風の茶碗は朝鮮風ではあるが之等のものが朝鮮に於ける自然的な而も生産的なものでなく、御所丸同様に或は我國に於ける茶人の好みが彼地に注入された結果によつて生産されたものに類すると見ることも出來やう。

茶陶の樞軸を爲したものは織部唐津であり、陶窯の地方的特異性を發揮せしむることは寧ろ好尙の力であり之を好尙の基本として十分に把握し、而も藝術としての根幹を爲すものは決して末稍的の陶技ではなく、一目して織部といふ强い風格に感動されるその力こそ偉大な藝の力であり、古織のもつ斯うした工藝的才能は、美濃に於ても、唐津に於ても、又丹波、信樂、備前等の諸窯にも及び實に新しい感覺を示してをり、慥かに當時の新興工藝ともいふべきであらう。

二、土質と其の特徴について

凡そ陶土としての條件は、粘力、耐火度、色調、收縮率などである。乍然形が出來て燒締ればよいといふ程度のものならば地球上凡そ土のないところはなく、唯燃料があつて燃燒裝置さえあれば製作技法の如何によつて可能である。

成形に適當な粘力があり、耐火度もあり收縮作用も餘り極端でなく、而も其の色が白いものとなると何處にも產出するとは限らない、故に古來製陶の發達した地方はこの諸條件に叶つた陶土が產出されることに因る。

近代は坏土（成形の出來るやうに調製した土を云ふ）の調製が丁寧になり幾種類かの原料を水簸して用ゐられてゐるが初期のものは大方單味の而も自然のまゝのものを、乾燥させて碎き水を混和するのみで若干の砂粒や石粒が入つてゐても平氣で直ちに成形に供したものである。（磁器は別である）土物（陶胎）は餘り土の處理が丁寧だと、本來の土味のよさが却て失はれて面白味がなくなるものである。

元來粘土類は永年の間に岩石が風化作用を受けて雨水によつて注積したもので、第三紀層中層部をなし、古生層の邊緣には木節粘土、白粘土を產し、花崗岩地帶には蛙目、高陵土を產するのが常である。上層部は砂礫を混へ又鐵分を多く含有する。

唐津燒に用ゐられた粘土中最も其の特徵の顯著なものは鬼子嶽帆柱窯を中心として多く斑唐津に用ゐられた手のもので、極めて荒い恰も砂を固めたやうな感じの粗面の土で、一寸他窯には類例を見ない特殊な持味のものである。岸岳古窯趾附近には花崗岩を產出し、其の花崗岩が瀨戶地方に於ける如く大粒の珪砂を介在してをらず、雲母も餘りない、この花崗岩が風化作用

をうけて分解し、蓄積したものがこの粘土で、現地に至れば原石から粘土化するその過程がよく窺はれる。從つて瀬戸地方の蛙目粘土の如き大粒の珪砂がなく、大體その粒子が平均してをり砂目であり乍ら微分子をも多く含有してゐるので、相當粘力もあり、坌々水簸することなくして成形に好適のものである。其の粘土層によりて酸化鐵の混入の多少があり、燒成結果に於ける土色は燒成焰の性質によりても左右されこれを一概に決し難いが、概ね淡黄白色、乃至茶褐色を呈し、此種の粘土が古窯趾附近の山野には所々露出してをり採掘には比較的容易である。

乍然同系の粘土にしても其の場所によつて若干づゝその質に良否の差があり、又其の粘土層にも厚薄があり、注積される四圍の狀態によつて、鐵分の多少、粒子の荒細、粘力の差異等があるが概ねその上層部及下層部は鐵分の含有量多く一層砂目で粘力乏しく中層部は粘力に富み鐵分も尠い。

帆柱系のこの砂目土は大體好適の燒成範圍は SK 8—10 (1250°C～1300°C) と思推され、燒締りよく收縮率も餘り過大でなく、重さに於ても砂目だけに比較的輕い、帆柱、皿屋谷の斑唐津のよさは實に此粘土あつてのことで、この粘土の特質が自然その轆轤の作振りに釉調に凡て特殊な味と感覺を表現させてゐる。

同じ斑唐津でも山瀬の土は質が頗る緻密で兎角釉調も、落着きを缺き、轆轤の作振りも固く餘情に乏しい。

斑唐津の陶技と此の砂目の岸岳粘土とは切り離すことの出來ない絶好の調和である。

繪唐津に用ゐられてゐる粘土は飯洞甕、道納屋谷の如く可なり白い手のものもあるが、概して鐵分が多く、含有されてゐてその色調は赤褐色乃至鼠色で、質も密で燒締りも堅い。

叩き手唐津の土は帆柱初期のものを除いては大低一層緻密で頗る粘力に富み、恰も飴交趾に匹敵するもので、從つて厚手に作ると切れ易く、素地中に氣孔があると兎角米煎餅の如くふくれ（ブク）が出來るので叩き手の技法が兩面から叩いて素地を締めるのは整形以外斯うした役割をも果す譯である。

國燒中瀨戶の祖母懐とか志戶呂などの土も、ふくれの出來る點に於てもよく似たもので、このふくれは、熱の急昇した場合に於て最も多く出來るもので、釉なり素地の表面が早く熔け、素地中の氣孔から空氣が逃げ得られず粘力過多の粘土に限つて起る現象である。

輸送に不便な昔の窯所では大抵その素地土や釉藥の原料も附近の山野に於て之を求め決して遠隔の地より取寄せるなどのことはしてゐない。そこでその地方、地方に於ける地質の相違から特有の土質に異つた特長があり、瀨戶は瀨戶、唐津は唐津、伊賀、信樂、丹波など夫々の持味と地方色が遺憾なく發揮される陶器の味は實にこの土味が根本であり、從つて陶器を作ることは先以てその土の吟味こそ最も肝要であらねばならぬ。

繪唐津の土は概ね鐵分が多いので、素地の呈色は褐色系のものが多いが、小山路の如く還元性の窯では鼠色となり、又飯洞甕下、窯道納屋谷窯の如く相當白い手のものもある。小山路の繪唐津は美濃の高根山の唐津織部によく似てをり、飯洞甕のものは、志野織部、繪織部に近似してゐるが矢張り美濃は美濃、唐津は唐津の何處か爭はれぬ特長が潜んでゐる。

唐津燒の土が總體に粘力に富んでゐて、作り易いことはその轆轤の作振を見てもよく窺はれる。飯洞甕の白土での繪唐津は鐵繪の調子が釉上に浸み出て、鐵砂の色と素地の白さの鮮さもさること乍ら、總體に鐵分の多い繪唐津の有色素地の靜かな沈默の中に落着いたその地味な風格には捌愛すべき味がある。

又自然に含有する鐵分にも珪酸質、酸化質、硫化質種々異つた性分があつて、夫々その釉を透して作用せられ、灰釉、青磁其他の透明釉は勿論のこと、支那産の天目茶碗の如きものにしても單にその釉のみでなく素地中に含まれる。鐵及鐵以外の例へば滿俺、チタン等によつて支配されることも識らねばならぬ。

帆柱窯初期の均窯風の色調にしても此の素地中の鐵分が其の呈色の上に重要な役割をもつものであり、古染付や、古赤繪や古九谷などの磁器にしてもその華麗な裡にも落着いたあの枯淡な味は一面その素地に含有する若干の鐵分が然らしめてゐると

も謂へよう。呉州赤繪の如きにしても、眞白い素地に化粧かけもなく、單に赤繪の繪付だけだつたとしたら頗る妙味のないものとならう。

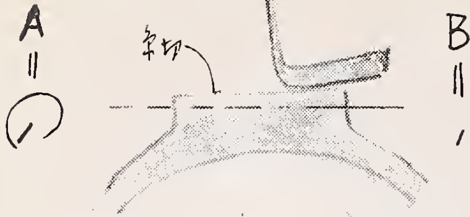
この鐵分の含有量と更に其の土質の耐火度の如何によつて燒締り、色調にも變化があり、道園、內田、南川原邊りのものは頗る堅緻に燒締り赤味が多いが同じ窯のものでも窯內の場所によつて火度の强弱と燒成焰の性質が異ることによつて、樣々な變化が起り一槪には決し難い。

靑唐津と黃唐津は素地も釉も同じものであり乍ら火度の强弱と焰の性質でその釉調は勿論素地の色調、締り、重さなどに相違が出來、靑唐津は堅く、黃唐津は軟かい。

唐津燒は總てを通してこの土味に魅力を感ずる。又その釉のかけ方が特殊な朝鮮唐津や叩き手を除いては大部分のものが總釉（ずぶかけ）（ザンブリガケ）でなく、土見せであるだけに猶其の土味を觀賞するに絕好の作振りである。古く本土に渡來した朝鮮の陶工達も、初めは北鮮、後には主として南鮮と地域的にも異り從つて其の陶技の上にも夫々の異色があり、原土の發見にも從來使ひ慣れた土に匹敵するものを山野に求めたもので、北鮮の陶工は砂目の粘土を、南鮮の陶工達は鐵砂を中心としての目標に合致するものを又甕作りの陶工は、粘力過多の叩きに都合のよいものを夫々專門的に多年の間に訓練された眼を以て、異國の而も限られた地域內に於て好適のものを發見したことは大きい功績といふべきである。

削りの順序

A法．B法いずれにても可



糸底の厚味過剰の分を削り下げる

糸底の厚味適当ならば糸切のついたまま③若くは⑤に移る





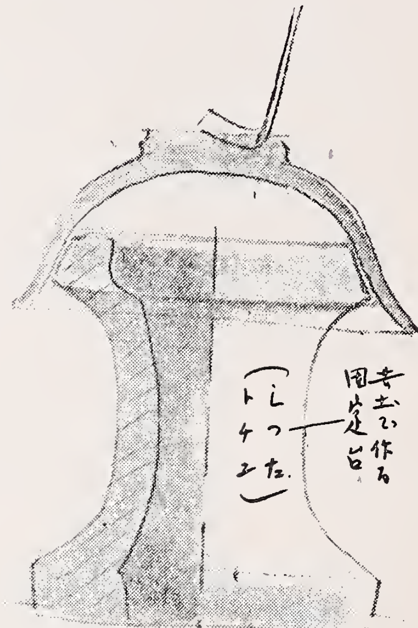
外側傾斜に削る



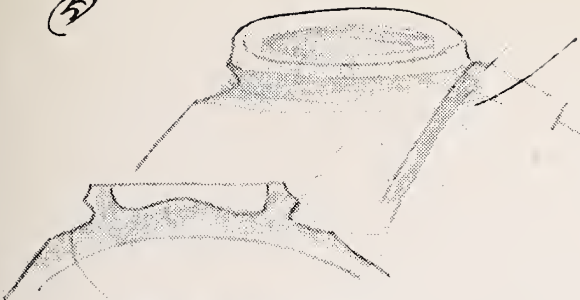
高台際から腰にかけて削る

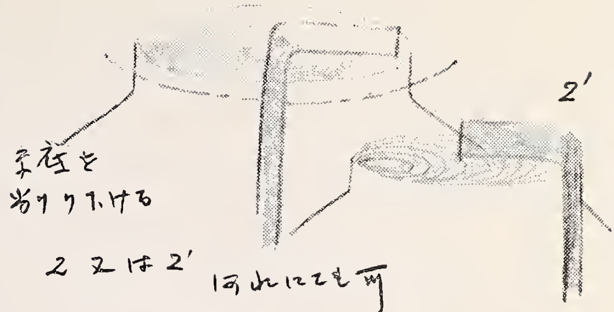


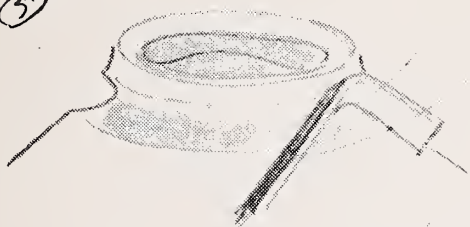
高台内をえぐる
これは③の前に行なも可



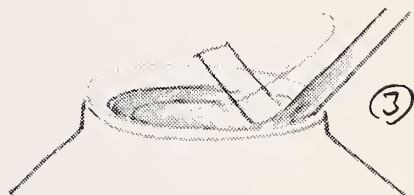
轆轤の中心に固定す


腰高台際を削る


②
2'
削りわける
2 又は 2' 何れにても可

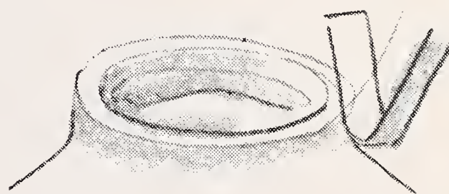

⑤




③

高台の中をえぐる




④

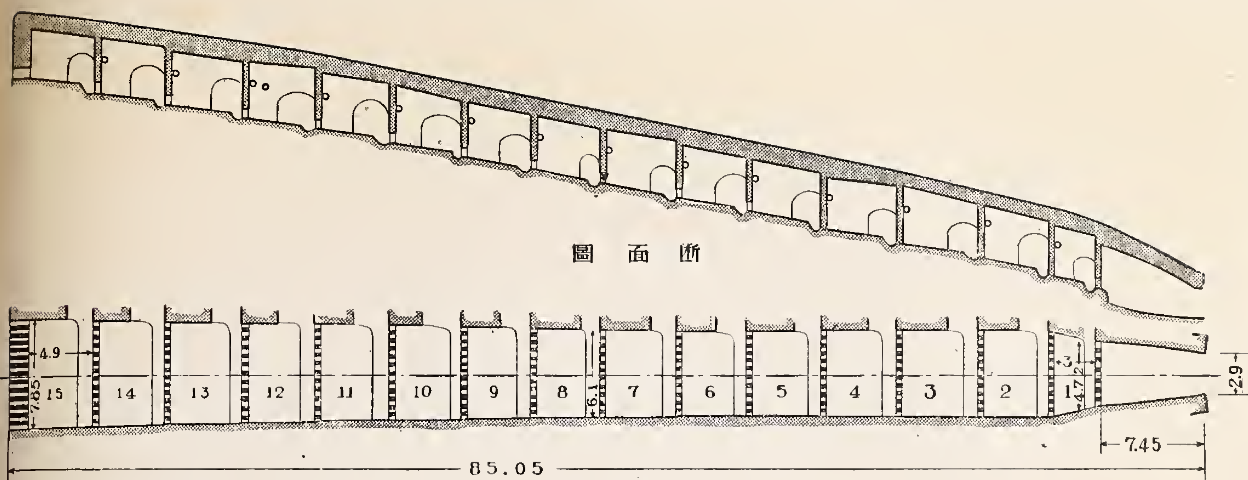

⑥
高台中をえぐるは最后にても又
③にても可


高台先外側を削る

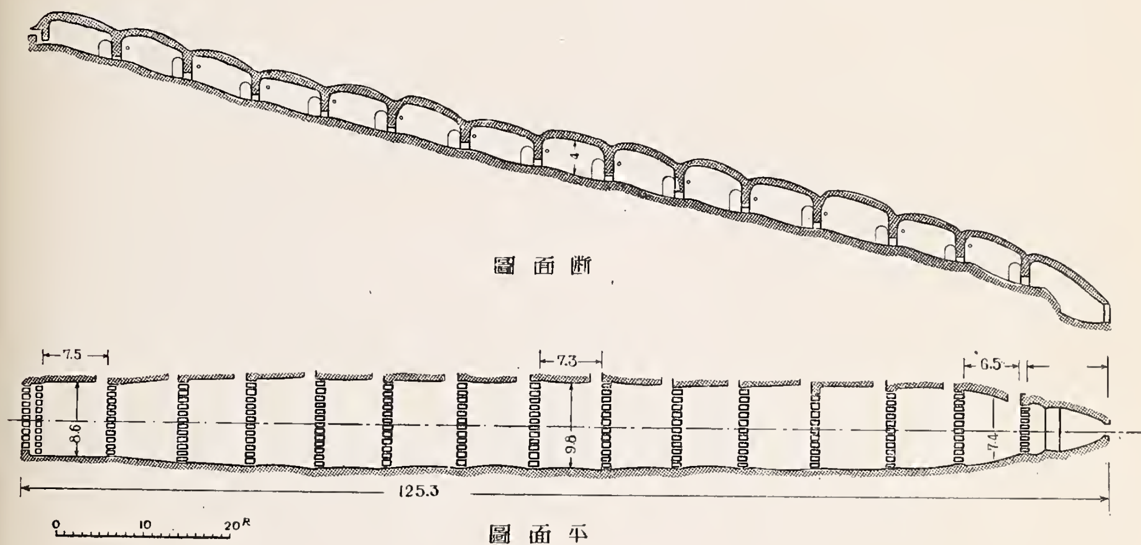


朱南面窯出土片

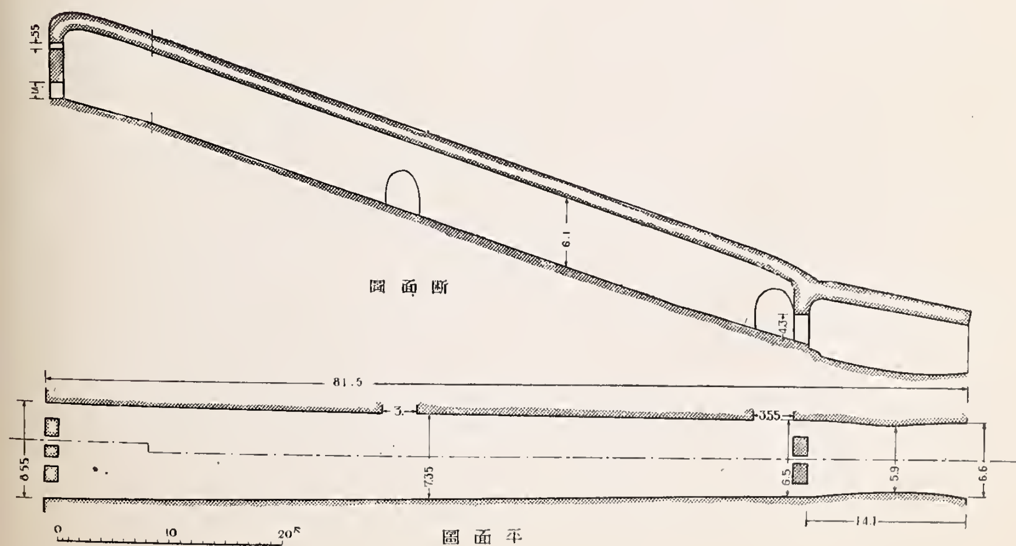




會寧面五洞陶窯見取圖



廣州郡南終面分院里陶窯實測圖



驪州郡北內面五鶴里陶窯實測圖

三、轆轤と其の作振りについて

唐津燒の轆轤は、朝鮮系の蹴轆轤で其の回轉は水引（水ビキ）は右廻り、削りは左廻である。瀬戸、美濃地方に多い手轆轤は、水びき、削り共右廻りで、手轆轤は圓盤の周邊にある穴に短いステッキ樣の棒先を押込んで手で廻し、廻轉が停止すれば又これを絶えず反復して作る、蹴轆轤はその構造が作品を作る上盤と足で廻すための下盤との二段の圓盤で組立てられた構造で、廻轉は專ら足でするので、手轆轤の如く回轉のために作る手を取られることなく、又可なり大形のものを作るにも足の力こそ要るが、便利である手廻轆轤では大物の場合ほど力がかゝり回轉が直ぐ停止するので、作る轆轤から挽臼樣の綱引ロクロに綱をかけて挽き手助手を使はねばならない作るものとこの挽き手との呼吸が合はないとうまく出來ないもので、近來は回轉を動力化すやうにもなつたが、蹴轆轤はその點に於て頗る便利である。然し手廻轆轤に慣れると蹴轆轤へは容易に轉向し難く、蹴轆轤に慣れたものは又同樣に手轆轤が出來ないものである。

蹴轆轤に熟練すれば神經の命ずるがまゝに手足は緩急よろしきを得て無意識に働く、不慣なうちは、作る方の手と、廻す役目の足とがなかなか一致しないもので、足に氣をとられないで自然に、無意識の裡に足の活動が伴ふやうになればしめたものである。

唐津燒の轆轤は總體にのびのびとしてゐて實に巧い、土の關係にもよるが初めの水びきの際に於て腰の邊りから決して必要以上の厚味をもたせないで、削り仕上の際に高臺が辛うじて出來る範圍に、糸切し（糸目シッピキ）（心藁で作る細い撚糸）糸底の土

も多くつけない過剰な肉取（厚味）をつけないために削りでは、ホンノ高臺際だけを僅かに削りとるだけであとは、泥目（のた目）のまゝの作り放しである。厚手に作つて削りで厚味を適當に減ずる作振りに比べると、實に轆轤に味があり冴えがあり器物の內外共に、手指と轆轤の運動作用がよく窺はれ、殊に古唐津の如き土物は多く削つて仕上たのでは全でその轆轤の妙味は消失してしまふ。泥目の味が唐津燒の轆轤の高臺削の冴えと相俟つて生き生きとした感じを與へてゐる。斯うした轆轤の持味や風格は朝鮮ものと全く共通したもので、唐津以外でも朝鮮の轆轤の影響をうけた土地のものは略同樣で殊に古萩には實に唐津によく似た作振りのものが多い。

李朝の作振りは土物は勿論のこと、堅手にしても（磁器質）土物轆轤の習慣から、其の作振りは土物と變りがない。堅手はその素地が堅緻であり餘り厚手になると重味が加はるのと切れ易い等の關係から次第に薄手に削るやうになつたのであらう。

轆轤によつて其作振りが相違するばかりでなく、轆轤に附隨した其の製作用具が異ることによつて自然作品の趣に變化が出來るもので、例へば水びきの際土を伸すのには元來手先のみを以ても十分可能ではあるが、又單に手先たけよりも手先より以上に便利な用具として「鏝（コテ）」及篦が用ゐられてゐる、篦（のばしへら　ヌベベラ）（多く棗の木で目的の形のカーヴに作る）は正確な形のものを作る場合多くは磁器に用ゐられてゐるが、土物は概ね篦を用ゐないでコテのみで作る。このコテの形が瀬戸地方の手轆轤では角コテ（厚板を適當な形に切つて作る）を用ゐ蹴轆轤を用ゐる地方では恰度手の平の如き形の平コテ（挿圖第三面參照）を使用する。このコテの形からして器物の內面のコテアト（茶溜等ニ見タテル）は勿論總體の形の作振が約束されるのである。井戸茶碗や根津の長崎堅手の如く一氣に伸びたあの轆轤目の妙味は平コテによつて始めて可能であり又セト黑や、志野の作振りには、角コテに據らねば出來ない、各地共古來の傳統を現在に繼承して作られてをり、地方地方によつてその轆轤の形式と伴に製作用具が異ることによつて同じ織部好みの瀨戸と唐津とはその風格に於て一聯のものであり乍ら何處か作技の面に於て唐津は唐津、瀨戸は瀨戸の特長が自ら顯はれてゐるのである。

斯うした作技の説明は到底筆舌にては了解し得られず一見に如くはなく、殊に筆者の如き拙文を以てしては表現し難い、（圖解參照）

高臺の削りにはとかく土物には素地土が無雜作なために砂粒が混入してをり、刄のついた切れ味のよいものでは引つかゝつてうまく行かない。そこで松の木の皮肌で作る木小刀（ハガタナ）や竹篦を使用する向もあるが、唐津燒では、古來金篦（細長い板金で作る）を曲げただけの刄のつかない丸カンナ（かみそりカンナ）が竹篦を用ゐてゐるやうである。

この「丸カンナ」に刄をつけることは禁物である。（挿圖第一面參照）鈍刀であることが必要で、刄がついてゐると切れ込み過ぎて趣きが出ないのみか、素地中の小石や砂粒に引かゝつて思はしく行かない、一體土物の削りは、磁器質のものとは異り可なり軟かい裡に處理せねば乾くと頗る硬くなつて刀が潜らなくなり、始末に困るもので、削る高臺が手指で歪曲する位の時分にすれば容易に任意の操作が出來る。硬くなつてから削ると自然作行も硬くなる。

削り加減のよさと、この削る用具の緩かに曲げられた鈍刀とが相俟つて、唐津燒の特徴を遺憾なく發揮させ縮緬皺も、竹の節も蟾尻、三日月臍等も樣々な特異の表現が自由自在である。この緩かに彎曲したその曲りの局部と同時に廻轉に伴れて器物に當てるこの丸カンナの角度との關係、一寸した手の添へ方如何によつても高臺の形が樣々な風趣に作り出される。

削るには先づ器物を轆轤の中心に固定せねばならぬ、固定させるには、共土で作つた削り臺（しつたトチン）の半乾きのものを用ゐ糸底の過剩な土を削りとり順次に高臺を削り出す多少その順序に於て相前後するとしても、丸カンナを以てすれば自然竹の節高臺にならざるを得ない。

高臺內の臍も、蟾尻も、丸抉も、高臺先の三日月も、屈澤なき無雜作な操作を繰返す中に一寸した運動作用で樣々な變化が生れ無意識の裡に現れた、かうした各樣の變化は然ら躍動してをり、意識的にしたのは何處か硬直した姿となつて妙味が缺ける。

三日月高臺にしても故意にしようとすれば削り臺に固定したものをはずして中心から若干ずらせることによつて出來得るが、自然にずれた結果のものや、敢てずらせずとも高臺の中心點からホレの一廻轉で削りとられた、削り工合を見ると概ね三ケ月形に近いものとなり、之等に於ても決して故意にしたのでは、その趣きが異る。囚はれた心を以てすれば必ずその結果は囚はれた姿としかなり得ない、操作を十分に呑み込んだ上で何んの屈托もなくする仕事から始めて妙味の溢れたものが生れる。

削り加減の素地の硬軟はその素地の素質によつて決せられ、磁器は硬目に土物は凡て軟目に處理することが肝要である。同じ磁器質でも、初期のものは大體土物の習慣から相當軟かい時分に處理されてをり、李朝の磁器ものや、有田磁器の初期のものは矢張り削りの要領が土物の隋勢で、其の名殘りが認められる。

縮緬皺は粗面なあの岸岳粘土にこの鈍刀を以てすれば、必ず現はれる自然の現象である。極めて緻密な土にこの鈍刀を以てすれば、吸付き易いので、小ヒヾが出來る、山瀬の如きそれである。

美濃ものには、つけ高臺や、足付きのものが頗る多いが唐津には殊んど見受けられない、これは美濃燒には型物が發達したが唐津には型物がないからである。全くこの型物の有無に基因してゐるといへる美濃の志野や織部には唐津以上に異風の形狀が多く、その異形は大部分のものが型に據つたもので、一旦轆轤で水びきしたものを樣々な型（共土で作り溫度の低い場所で締燒したもの）に嵌めて叩き任意の形を作るが此場合、水びきのまゝでは底面がとかく厚手であり型に打ち込んでも密着しないので大體平均した適當な厚さに削つてから型に嵌めるために、糸底は厚味僅少となり從つて、高臺を削りつける餘地がないので、丸底のものなどはそのまゝでは形も不安定であり、遂足をつけたり、更に土を紐狀にして高臺をつけ足したりする。斯樣に型を利用して作る打込法が盛んに行はれたことによつて必然的に生れた技法であるが、織部ものには型もの以外にもこのつけ高臺や、足付のものゝ多いことは、初めに必要上餘儀なく工夫して行つたこの技法が軈て習慣ともなり又、作意にも興味が生れ必要以上に之を應用

したものである。

唐津燒中、特に織部好みの作品には美濃の織部と共通した異風の形狀が可なり多いが、殆んど型によらないで、轆轤で作り大部分のものが軟かい時分に指先で曲げ込んだり開かせたりして造り、稀には指先だけではうまく行かない部分には箆を使つて變形させたものがある。(ナブリブチ)

總體的の感覺の上では極めて通ずるものがあり乍ら、其の作技の面に於ては矢張り地方、地方の固有の傳統的習僻があつて異色を發揮してゐる點も興味が深い。

唐津と美濃とは最も織部との關聯性に富んでゐるのでこの作技についても多く彼我の差や、交流について屢々述べ來つたが今一つ顯著な作振りの相違點を擧げるならば、美濃の織部茶碗の高臺作りが大部分のものが、御所丸に似た手造り風のソギ出しで、御所丸は一見して多角形、織部茶碗は大體圓形に作り出されてはゐるが、矢張り緩やかな多角形をなしてをりその高臺作りの技法から見れば變りがない。唐津にも御所丸風のもの及沓形があるが、一つとしてこのソキ出しの技法は行はれてゐない。沓形も美濃ものほど極端に曲げたものが尠なく大抵は單純な隋圓形で、高臺は悉く轆轤削りである。

美濃の沓形茶碗の高臺が斯樣に轆轤にかけないで手造り風に何が故にソキ出し作りを旺んにやつたものかについても何等かの理由がなくてはならない、圓形ならぬ沓形がとかく轆轤削りの上には固定(しつた トチン)が不十分で削り難いので遂にこの手造風のソキ出しの技法に據つたものであらう。

又美濃の織部系の茶碗の多くのものがその緣先が大抵、呑口は內方に、兩側は外方に向つて箆の切込があるが、唐津ものには餘り斯うした技巧が加へられてゐない。緣先は皆摘み皮で丸く摘まれてゐて素直な緣作りのものばかりである。

緣先を摘み皮で外側へ折り曲げたひねり返しの作風も唐津ものには極めて多い。尙唐津ものといへば倣作の石ハゼを連想させるがこの石ハゼも自然に土の中に混つて出たものと故意に嵌め込んだものとは直ちに判斷の出來るもので、凡そ後世の倣造

で故意に石を嵌め込んだり、強いて三日月高臺にしたり、殊更に縮緬皺を出したりしたものほど嫌味なものはない。

因に括弧内の右平假名は瀬戸地方、左片假名は唐津地方に於ける製陶用語である。

四、釉の種類と其の性狀について

一、乳濁性失透釉（斑唐津）

此釉は、支那に於ける均、汝、我國に於ける白海鼠即ち白萩、卯の斑、上野、小杉、高取、相馬、松代等のものと同種のもので、その乳濁した失透作用は釉中に多量に含有される珪酸分の然らしむる現象である。その珪酸分は珪石藁灰、籾灰等の使用により此種の釉が得られるが、斑唐津の釉がその珪酸分を何によつたか確言し難いが、調合法の傳說から見て恐らく藁灰によつたものであらう。

この珪酸の作用によつて乳濁失透性を生ずるが單に藁灰其他の珪酸は單獨にては頗る耐火度が强く到底熔融し難いが他の調合物との共融點によつて始めて釉として成り立つのであり、土灰及長石、粘土質の原料との調合比のよろしきを得て出來るが、扨その長石が古い時代に於て今日の如く純粹の長石を用ゐたか否かが疑問である。長石にも種々其性分の異るものがあり正長石、加里長石、曹達長石、珪酸質長石等により其の釉の調合法にも考慮を拂はねばならぬ。

筆者は古い釉の中にはこの純粹の長石を使用せず、素地に用ゐた粘土類や、岩石の風化物などが意外に多く利用されてをりはせぬかと、その釉調を觀察してよく考へさせられ、曩に拙稿織部考に於ても同樣の私見を述べたが、この唐津燒の初期に於ける釉にもさうしたものが可なりある樣に思はれる。この斑唐津の釉にしても必ずしも、長石を用ゐ、これに藁灰及土灰を配合したものとは限らないと思はれる。現今では釉と謂へば長石が基本であるといふのが一般の通念であり常識でもあるが古い

手の釉に限つては斯うした常識を以てしてはその釉調を得るに不可能なものが相當に多いのではなからうかと思はれるものがあることを寧ろ識らねばならない。一應酷似した釉と思はれても、眞のその味ひがホンの紙一重の差であるが、眞にその釉調を味ひ得る面から觀察するならば、大きな差であり似て非なるものにしかならない。

斑唐津の釉も斯うした根本の問題から大いに檢討せねばならない。

扨此釉はその施釉が重厚でないと味ひが乏しく薄くかければ、透明釉となり乳濁性も失透狀態も得られない。此種の釉を白素地に用ゐても還元焰を以てすれば其釉中に自然に含まれる微量の鐵分によつて微かに青色を帶びた釉調を呈するが、素地中に鐵分が含有された場合に於ては其の鐵分は珪酸に富んだこの釉の性分を通して珪酸鐵化し、呈色は顯著となり帶紫乃至美麗な天青色を呈し、宋均、月白、舊汝凮の釉調が得られる。又こうした還元焰に於て素地中に濃厚な鐵粉が含まれてゐたとすれば、其の鐵粉の色調は恰もコバルトでも混入してゐるかの如き藍青色を呈する、宋均窯などの天青釉を仔細に觀るとよく斯うしたものが釉中に散在するを發見されるであらう。宋胡錄の畫付を見ても恰度吳須ででも描かれてゐるかの如き色調のものがよく見受けられるが、同樣の結果で釉中に珪酸分が多いことに基因してゐる。

均窯の天青色はその釉中に銅が混入するために發色するとの見解もあるやうだが、時に銅を混入せずとも天青色は此の失透釉の性質によつて、必然的に發色し又銅が混入すれば還元焰によれば當然紅乃至紫紅色を呈するものである。

乍然其の燒成焰の性質が一とたび酸化焰となれば決して素地に鐵分が含有されてゐても天青色は得られぬ、帶黃乃至白色の乳濁失透釉卽ち白海鼠釉としかならない。

既に稿初に於て唐津燒の陶技上より見たる史的考察に述べた如く帆柱の斑唐津は、最初は還元焰による均、汝凮のものを目的としてゐたものゝ、燒成上の困難から遂に酸化焰に墮した結果遂にこの白海鼠の斑唐津が此所帆柱窯に創作されたのである。

美しい天青色も、乳の如く白いこの斑唐津の釉も毫も其の性分に變りはない。唯その焰の作用一つである。窯、窯、焰、焰、實に陶藝の神祕的な面白さはこの焰の運動作用である。この釉は流動性に富んでをり、この流動性を巧に應用したものに皮鯨や朝鮮唐津がある。前者は器物の緣先に天目釉を二重かけすることによつて緣先から器體の內面に向つて流動して、簡素な裝飾技法だが氣持のよいものとなり、朝鮮唐津は二重かけの面を更に大きく廣くして、乳白釉の泡和作用をして天目釉を海鼠狀に變化せしめてゐる。若しも天目釉を下かけして乳白釉を上かけとするならば、海鼠狀は一層顯著となるが色調は沈み勝となり、黑味に乏しい色調となる。

この斑唐津の乳濁性失透釉が用ゐられたのはこの鬼子嶽帆柱窯が我國に於ける最古のものであらう、瀨戶窯に於ては此種の釉の發見の動機が既に無釉時代に於て與へられてゐながら應用に至らなかつた、それは例の山抔小抔を燒くに器物の底面には籾殼を敷き目砂の役目をも果してゐる（籾灰は珪酸が主成分で强いから）が一とたび自然釉が流れ込めば籾灰は却つて其の共融度を助成することになり、玆に乳濁した釉が出來る。又器面に藁灰が附着したり素地中の珪酸と化合したりした場合に於て一部に此種の釉調を呈する屢々かうしたものを散見するが、此種の釉を意圖し調製して應用するに至らず、瀨戶窯ではずつと時代も降つて漸く春宇、春丹などが北島で白海鼠（卯の斑）や更に之に銅を混ぜた帶白青色釉（上野釉）を交々旺んに用ゐてゐるが之等は唐津、上野などの他技の刺戟に據つたものであらう。

織部燒に於ても初期には（美濃窯）全々此種の釉は用ゐてゐない、此釉中に銅を混和した所謂上野風の釉も古い青織部には全々見受けられない。春古山、春丹などが多く用ゐてゐるに過ぎない。美濃の織部には窯と伴に唐津の陶技も傳へてゐるが、その技法は殆んど繪唐津に限られてをり斑唐津は全然影響してゐない。古織部時代にはこの斑唐津の窯が廢絕してゐたか或は不振であつたものか、又織部の好尙に不向たつたのか、

此釉の性狀についても、述上の如く我國古來の傳統からしてその性狀の中核を爲す珪酸を藁、籾等の灰類を以てしたものと

一應觀察されるが、然し乍ら支那に於ける、或は朝鮮に於ける此種の釉に果してさうしたものが用ゐられたか或は珪砂、珪石、其他灰によらぬ珪酸質の原料を以てしたものかは不明で確言し得ない。

二、流動性透明土灰（青唐津、黄唐津）

飯洞甕窯に最も多い此手の釉は、他の岸岳の諸窯にもある。長石に土灰を加へれば相似た釉が得られるが、この初期の灰釉に限つて恰度、瀬戸、美濃窯の瓷器手、ぐひ呑手の黄瀬戸にも似た調子の高いもので、前記の釉と同様に長石以外の自然物を以てしてはゐないだらうか。純粹の長石を以てしては斯うした感じの釉調は得難いとも考へられる。

瀬戸窯（美濃）では此灰釉が躶て（あやめ手黄瀬戸）にまで發展し黄瀬戸といふ又新しい分野を拓いてゐるが、唐津では單に窯内の位置の相違から青くなるものが酸化して黄色調となつた程度に止つてゐる。青唐津も、黄唐津もとろりとよく熔けて釉は可なり厚くかゝり、黄瀬戸の「あふらげ手」の如き澁味のものは見受けられない。

三、飴色灰釉（叩き手唐津）

この飴色釉は大抵その釉の基礎は前記「二、」と同様に灰分の多いもので、呈色劑として少量の鐵分が配合されてゐる、長石に灰、酸化鐵といふ普通の調合法による飴釉とは其性狀を異にしてをり、釉がとかく紐狀にむらむらと寄溜する狀態から觀察しても矢張り粘土質が、鐵分を含んだ、サバ石（風化中途にある岩石）などから案外斯うした釉調の効果が得られ、恐らく初期の釉もさうした手近の原料が使用されたものではなからうか、釉の飴色の呈色も釉中の鐵分と其の素地中に含有する鐵分との双方から發色してをり又それだけに深味がある。

この叩き手唐津は製作技法といひ、その釉調といひ、飴交趾に實によく似てゐる。飴交趾や、宜興丁山窯の甕類、朝鮮の水甕類などの窯は其の燒成溫度が低いが唐津燒のこの手は同時に燒く他のものとの關係上相當高火度に燒成されてゐる點が異るが、製作技法は勿論、見掛けに於ても餘程よく似たものである。

叩きの作技の上から自然に內面に現はれる打型の筋文や內面の千階波風の文様が、この透明性の飴色釉を通して表現された狀態も又調和のよいものである。

四、長石質白色釉（繪唐津、瀨戸唐津）

瀨戸唐津や飯洞甕、道納屋谷の繪唐津などに用ゐられた釉は可なり白い。釉に鐵分のないと同時に素地中にも鐵分がないからで、素地中の微量の鐵分はその釉の性質によつて全々表面化さない、純粹の火度の弱い長石を使用すれば透明の白色釉となるが、磁土質の原料を基本にしてこれに媒熔劑として若干の灰を添加すれば半透明の白色釉が得られ、又珪酸分の多い長石を用ゐれば稍乳色を帶んだ半透明となる。瀨戸唐津や、繪唐津のこの白色釉は美濃の志野の如く、長石單味ではないやうに思はれる強い長石質に富んだものに若干土灰が混入されてゐるだらう。素地の鐵分と、焰の酸化作用で釉は枇杷色ともなる、これは井戸茶碗も同樣である。高臺や高臺際の削つた部分に釉のチヂレ（カヒラギ）を生ずるのは素地が粗面で氣孔があり、釉が密着しないのと、釉そのものゝ收縮作用が大であるために生ずる製陶技術上から觀れば缺點に違ひないが、今では井戸茶碗の觀賞の要點の一つであり、又約束でもある。古唐津の作品にも斯うしたカヒラギ風のものを見受けるがこれは釉が完全に熔け切らぬ裡に火が止つた場合に於て、特に多いが要するに釉の密着不完全と收縮作用によるもので從つて收縮率の多いものをして釉の基本たらしむれば容易に得られるものである。

五、透明土灰釉（繪唐津）

同じ繪唐津でも其の窯所によつて、釉の性狀が若干づゝ異り、釉の性質必ずしも相違せずとも其の素地燒成溫度などからも結果に於て相違が出來るが、大體に於て繪唐津に用ゐられてゐる釉には、飯洞甕の如き白い手のものと、少量の土灰を混ぜることによつて安定した土灰釉、（A）と、稍多量に土灰を混ぜた同じく土灰釉、（B）とがあり、例へば阿房谷邊りのものが土灰釉Aに屬し、道園などのものはそのBに相當する下繪の鐵の文樣が、黑色となつたり、茶褐色となつたり、釉上に浸み出たりな

ど種々の變化を生じ様々な繪唐津があるが、鐵を以て呈色劑としたものは概ね、急冷すれば黒く、徐冷すれば褐色となるし又、釉の性質が若干珪酸分の混入した釉の場合は鐵砂の發色が鮮かであり、又釉が十二分に熔融することも鐵砂の發色を慥かに鮮かにする。道園窯の土灰釉（B）は釉の調合や素地が弱いのか、窯の溫度が強いためか、相當燒過ぎで歪曲したものが多く又、鐵砂の發色が、褐色調で鮮かである。土灰釉（A）は鐵の文樣が黒く釉の濃厚な部分はとかく沈み勝となる。

小山路の繪唐津は、特異性があり上作で還元焔によるために素地も鼠色（淡墨色）を呈したものが多く文樣も概して黒味調で釉は土灰釉（A）に屬する。

五、天　目　釉

天目釉の中で釉調の上から又其の作振りから見ても最も古い手と思しきものに帆柱窯の德利がある。厚手の稚拙な紐造りに胴部には叩きが施され偶々錐彫の文樣があり一見古瀨戸にも稍似た調子のものがある。此手の釉調はなかなか調子が高く、大萱窯下窯邊りの壺に近似してをり釉は大抵（づぶかけ・ザンブリカケ）總釉で（貝高臺）これは恐らく飯洞甕初期の灰釉と同樣な釉中に多量の鬼板（黒シャビ）を加へたものであらう。飯洞甕窯之に次ぎ、道納屋谷、道園、明尊寺安田原など次第に調子が落ちる。而して帆柱窯、飯洞甕窯には天目茶碗は發見されてゐないが道納屋谷窯の天目茶碗は、他窯のものに比すれば、格調が高いが、稿初に述べた如く唐物寫しとしては作振りに倘開きがあり、釉調も餘り重厚でなく兎毫も勿論ない。

鐵の黒色釉（天目釉）はその基礎釉の性質及鬼板の良否によつて甚しく調子が異るものであり、又焰の性質は勿論、燒成後に於ける冷却作用によつても著しく變化するもので、急冷すれば黒く、徐冷すれば褐色となる、黒樂、瀨戸黒、黒織部はこの急冷による色の變化を巧に攫へたもので、燒工合を見計つて器物を挾み出すといふ極端な方法に據つてゐる。唐津燒にはこの引出黒の技法は全然傳つてゐない。

祥古谷窯の御所丸黒は、天目釉の一重かけのものと、下かけに鐵鑛（鬼板）のみか若干の釉を加へたかと思はれる强釉を施

し、更に白釉（白灰釉(A)）を二重かけしたものとがある。引出を行はずして黒釉を得ようとしてか斯様に色々な方法を試みてゐる。

一重かけの天目釉は黒くもなつたり、褐色乃至飴色になつたり、窯の焔と冷却作用で一樣には行かない。

彫唐津に配した、鐵色は鬼板によらないで天目釉が應用され又その他のものにも天目釉を文樣的に應用した作品も見受けられる。

六、釉下彩料と化粧

唐津燒に應用された釉の種類は餘り多種ではなく概して單純であり、寧ろ尠い範圍に止り釉下彩料としても大部分繪唐津の鐵繪に用ゐられた鬼板で、この天然鑛物の繪具以外には極めて稀に銅が用ゐられてゐる。

李朝の辰砂、瀨戸の黃瀨戸には、銅が既に巧みな應用の軌道に乘じてゐるのに此所では一向に應用されてゐない。

一體銅なるものは鐵の如く安定的なものでないところに容易に使ひこなし得ないところがあり、純酸化焔ならば青綠色に、優れた還元焔ならば赤く辰砂になる譯で赤、青の何れにしても鮮明に發色すれば大いに興味も沸かうが、中途半端な焔を以てすれば矢張り發色を當然の結果として赤くもならず、青くもならずで、汚ならしい色調としかならないし、揮發する性質も伴つて描いた文樣も、鐵の如くはつきり表現されないので遂に試作程度に終つてしまつたのであらう、又唐津燒の如く總體に鐵分を含んだ素地では畢竟鮮麗な色調は得られないのと、化粧かけの方法が、古唐津には一向行はれてをらないためにも因るであらう。

朝鮮では古來化粧かけの釉法が相當發達してゐるにも不拘この唐津に其の技法を傳へてゐないのは、鷄龍山其他の繪三島や彫三島、刷毛目などの系統の陶工でない。化粧かけをしない鐵砂などの陶技が主流となつたからであらう。唐津燒し九州陶器に化粧の技法が旺んに用ゐられるやうになつたのは後期のことで、小田志、黑牟田、川古谷、內野山などの諸窯では化粧かけ

した下地に鐵の文様と更に陶の靑綠釉の應用が巧に行はれ、窯も純酸化焰に慣れて銅の發色も鮮かである。然し之等のものは支那の釉裏紅や李朝辰砂の如く銅を繪具として文様を描寫するのではなく、釉中に銅を混した、所謂色釉として感覺的に所々にあしらつたもので、稀にあるこの古唐津は銅が下繪彩料として試みられた意圖が十分汲みとられるが鮮かな色調のものは殆んど見受けられず、これは憾かに不成功に終つてゐる。

而して釉のかけ方は概ね突込がけ（づぶかけ ザンブリカケ）若くは柄杓のかけ塗りであり、叩き手唐津、朝鮮唐津の如き高臺のない平底のものは多く總釉であり、總釉のものは大抵貝高臺である。柄杓でのかけ釉は皿類などその中かけの釉が外面に流れ出てゐてぞんざいな施釉振りが却つて妙味を添へてゐる。元來この釉のかけ方は文様の効果以上に裝飾化の上で大切な役割をもつものであり施釉の方法が近世のものはとかく神經質になり筆や刷毛で塗つたものもあるが凡そ妙味のないものである。施釉は飽くまで無雜作に、操作も極自然に行はねば味に乏しいものとなるものである。

織部燒に多い釉の塗り分けのものですら決して筆や刷毛で塗り分けるやうなことをせず、杓のかけ塗か、釉甕に突込んでかけられてをり、この操作の上から見ても近世の倣作には誤りが多く自然の妙趣に於ての遜色が著しい、釉の優劣は勿論その作を支配するが又斯うした施釉上の操作についても十分な吟味が肝要である。

五、形狀と文樣について

唐津燒もその初期のものに於ては、文樣に對しては些して關心がもたれてゐないこれはその釉の性質からも自然制約され、敢て、文樣的技法を求むるならばそれは彫刻的技法に據るの外はなく、偶々線刻文の施されたものも見受けるが、古瀨戸に於けるが如く決して文樣的には見るべきものがない。只管にその單純な形態に對し、重厚な斑唐津や、灰釉、天目釉、飴釉など專ら單色釉の應用を以てしてゐる。

文祿年間に於て端を發した織部好みの作風から漸く形狀に文樣に力が籠り、一方陶技の發達も伴つて其の作風の上に全く面目を一新するに至つた。

文祿以前に於ける初期の作品は、其作風から觀て茶器としての意圖の下に作られたものではなく、日常の食器であることは否定出來ないが、朝鮮陶を始め支那及南方近東、和蘭陀等の雜器が茶器として今日、高い地位を占めてゐると同樣に、かうした最初から變な茶入の息のかゝらぬものゝ方が却つて優れた美點を持つたものが多く、要はその作品の力を正しく認識すればよいので、唐津初期の作品も斯かる意味で、其のよさを十分認めて然るべきであると同時に又立派に茶陶としても役立つ譯である。

初期の作品の形狀は總體にふつくらとした丸味をもち素直で單純なものばかりである。

德利にしても、茶碗にしても皿鉢類にしても凡そ直線的な角張つた形狀のものは皆無である。强て直線的といへばぐひ呑位

のもので、これすらも多くは端反であり穏かな形態である。飯洞甕窯から多く出土する黄瀬戸風の鉦鉢形は、黄瀬戸に比べて大體に背が低くて胴紐がない、立上りから更に開いたあの兜形、輪花緣、反緣になつたものなどは全然見受けられない、總て淺い切立形である。

繪付に好適の白釉が出來るやうになると、俄然、意匠力が著しく働きかけ、形狀に種々異風の變化が顯はれ又文樣に力を注がれるやうになり、唐津燒も全面的に所謂、織部唐津によつて風靡され、玆に全く新生面を拓いた。

織部の好尙は實に創作的であり而も廣く其の視野を異國にも向けて大いに之を攝取するところあつて、巧みな咀嚼應用力は止まるところを知らず、美濃にも、唐津にも次から次へと淸新な氣持の旺溢したものを限りなく生んだ唐津燒のもつ色感は總體に沈み勝ちで地味であるが、美濃ものは色感が多彩なことゝ、形狀に於ても一層變化に富んでゐるために新興的な感覺が猶更强い。

異風な樣々な形狀は其の意匠が何から出發したものか的確にその資料を摑み難いものも多いが、到底凡人の構想し得ぬ奇想を以てしてゐる、織部燒の形狀の變化が美濃、唐津を通したら恐らく何百種にも上るであらう、若しもこれに一々名稱を附するとしたならばこのことすら我々には一寸難事である。

形狀の總體から受ける感じが、唐津ものは總て曲線的であり、美濃ものには直線的なものも可なり多い。

これはその作技に東西の異りがあることより必然的に起る結果であり、その最大の原因は唐津燒に型が使用されてゐないことである。

此事は既に前項の作振りに於て述べたが型を利用すると利用しないとでは、自らその變形の上には一定の限度があつて殊に角張つた直線的の形狀を得るには困難である。型ものゝ發達した美濃の織部には、足付、つけ高臺のものが併行して旺んに作られたことは前項の說明の通りであり極めて自然の結果といはねばならぬ。

繪唐津の文樣は山野に自生する草花類をその資料として描かれたものか壓倒的に多い。而も、花といふよりは草が多い、大體に於て繪唐津の持つ至極愼しまやかなその風格には派手な花よりもかうしたものへ牽かれる心がよく推察出來る。

繪唐津の繪付は一見稚拙な如くで、實は頗る括達であり而も枯淡で、情趣に富んでをり、筆先の技巧ではなく全く心で、描かれてをり毫も屈託がない、意匠資料に拘泥したところもない、從つて何の花だか、草だか見極めのつかないものも多い。自然の寫生ではあるが、心に掴んだ寫生で頗る表現が端的である。それだけに忠實な細緻な寫生よりも見るもの、心に迫るものがある、文樣の力とその空間が又頗る有効に働いてゐる。

李朝鐵砂に一脈通ずるものがあるが、文樣は全く日本的である、志野はその釉の性狀から下繪が見え隱れとなり、又火色の發色など樣々な關係から又別趣なよさがあり、繪唐津ほど文樣を主體とした觀賞と若干その觀點を異にする。又、志野織部や繪織部は、文樣が纖細であり、文樣的力量に於てこの繪唐津は實に冠絶したものといへよう。美濃の織部殊に慶長盛期に於ける諸作に於ては自然の風物に據らざる蛇鱗、市松、其他種々な幾何的文樣が旺んに應用されてゐるが唐津燒には斯うした風趣の意匠が餘り扱はれてゐない。畢竟色釉の掛分や形狀への調和上、案配されたものと思はれる。織部の構想は何んといつても美濃窯に於てその總てが實現され、あらん限りの力が傾倒され、多技を極め所謂織部燒原流としての內容を掌握してゐる。

繪唐津に表現された文樣中、略その資料が何であるかを窺知得るものを擧げて見るならば

矢散し、矢襖、松葉、松樹、松山、遠山、菫、芦、檜垣、鳥、渦卷、渦唐草、藤、かや、釣鐘草、蓼、葛、蔦、兎草、蔓草、燕子花、慈菰花、柿、水引草、笹、枯木、わらび、蘭、萩、菊、十字花、梅鉢、波、小禽、鶴、千鳥、點々、筋、黑刷毛、輪、放射線、桁子、山葡萄、柳、鴈、蝶、點、繼ぎ、籠目、三ツ葉、尾花、海老、三星、等ので、芦か、萱か、粱かは判らぬが

禾草類や單な草の線描のものなどが多い。意匠資料の何であるかを敢て追究する要もない、かうした自然の風物の示す可憐な

姿を心のまゝに感覺的に美の要素としての適切な限度に最も有効適切に表現したのである。

繪唐津はかうした筆致に妙趣旺溢したもの、優品に富んでゐるが又一方、美濃久尻邊で旺んに扱はれた染織の低型に據る刷繪ものもある。

東西に於ける陶技の傳統的相違から裝飾技法の上から夫々の特異性はあれど、何處か共通した風格を仔細に之を解剖すれば形狀に文樣に彼我の共通性と交流の濃かさが窺はれる。

六、唐津竈について

唐津燒は總て、朝鮮北方系の登窯で俗に、割竹式と呼ばれてゐる形式のものを用ゐてゐる。(附圖參照)

この窯の構造は恰も竹を眞二つに割つて伏せたやうな形のもので、その竹の節が隔壁(間仕切)に當り天井も各地に多い丸多、古窯等の登窯の如く一室毎に饅頭型にならないで、下から上まで一樣の蒲鉾形をなし、この蒲鉾形の隧道に間仕切の隔壁を設けただけのものである。

この形式の窯の築造は、山の傾斜面を利用して最初長い隧道を造り適當な位置に數ケの通煙孔(さま穴 オンザン)のついた壁を設けて區切るか、或はこれと反對に先に隔壁を構築しておいてから後に天井を總體にかけるか、この二つの方法はその何れを以てしても結果に於ては變りがない。しかし、築造の便から見れば天井のアーチを先に構築すると、元來背の低いかうした窯内での作業が困難であり、後者の方法に據ることが好都合である。

乍然、この形式の前期に於て既に隔壁のない隧道式の形式が存在したその傳統の上から觀察するならば恐らく前者の方法、即ち隧道式窯を築いて置いて、これに隔壁を設けることが工夫されたものと思はれる。

隔壁のない隧道式窯は今猶、支那及朝鮮に昔の形式をそのまゝに傳へてゐるが、窯詰、焚方、熱の上昇、溫度の均一性、等凡ての見地から見て、隔壁を設けて數室に分割した方が好結果が得られる。下から上まで通り拔けの隧道式では、下の焚口のみでは熱の上昇が下方は強く上方は弱性となり、不均一となるのが當然であり、平均化するにはその燃料の投入方法にも困難

である、宜興窯に於ける如く、天井の火噴穴からでも投入するより途はないが、窯内の器物を損傷させる虞れもあり、宜興窯の如く枝松位しか用を爲さずこれでは又決して高火度には熱が上昇しない。

矢張り適當な寸法に據つて隔壁を以て區切り、室を設けるに如くはない。斯くの如くにして數室に分割された、隧道式窯の進化によつて各室毎に焚き上げては順次上方に焚き移ることが工夫されたのが卽ちこの割竹式で、玆に於て始めて火力も平均され又單室窯とは異り數室なるが故に餘熱利用に効果があり燃料經濟の上にも頗る有利なものとなつたのである、圖面に示す、如く背の背も極めて低い、元來朝鮮では作品を窯内に詰めるに全々匣鉢（圓五郎ボシ）を用ゐず、目（ぼっち猫足）によつて器物を數個づつ積重ね、窯内の床（地盤トコ）が大體天井と併行した勾配（傾斜）をもつてゐるので、鏡餅樣の敷土によつて傾斜を調節しつゝ（瀬戸の窖竈及大竈では勾配が更に急でこの敷土は馬蹄形をなす）順次に窯内に詰め作品の大小、高、低は別に又細長い棒狀のツクを利用して空間の調節を圖る、如斯にして窯詰を行ふが匣鉢を用ゐないために餘り多くの作品を高く積み上げることは危險であり、總體に詰めた作品の背は極めて低い、從つて窯内の高さを些して高くする必要もないので、朝鮮に於ける窯もこの唐津の窯も極めてその背が低い、積重ねの目は多く粘土を用ゐるがこの粘土の目の外、貝殼（主として千貝を用ゆ）を用ゐてゐる、朝鮮の海岸線に沿つた窯所にもこの貝高臺のものを見受けるが、貝の性質を巧妙に利用したこの貝目の技法は實に面白いものである。又匣鉢を用ゐないために自然、焔は器物に直接觸れる譯で、斯うした場合その素地の燒締、色澤、及釉調の上にも匣鉢を使用した間接焔のものとは著しい相違を生ずるものである。

燃料の灰も飛散して附着すれば又焔の性質冷却作用に於ても直接と間接とに於ては差異を生ずるからである。登窯は凡て其の窯數が多い程餘熱利用の上から燃料が經濟であることはいふまでもないが、匣鉢を使用しないことは又その利が遙かに大きいのである。

元來窯を焚き作品を燒き上げるには、第一その窯そのものが燒け、匣鉢や、棚板や、支柱（ツク）など所謂窯道具の類まで

が焼けなければ作品は焼上らない。從つて之等のものに吸收される熱量は實に大きなもので、瀨戸地方の窖窯や半地上式の大竈などは、窯の全身が地下に埋れてゐるので窯そのものに吸收される熱量は又更に大きく、而も匣鉢を使用してをり、實際の作品に要する熱量は三分の一にも相當しないであらう。

斯かる意味からしてこの唐津竈が燃料經濟上頗る有利なものたることが實證され、織部燒の盛期に於て此樣式を傳へたことによつて爾來登窯が發達した所以は玆に存するのである。

唐津窯はその築造に當り一切、煉瓦樣の土塊(くれ)(トンバイ)を使用せずして壁の中心は悉く花崗岩の切石を用ゐ、目地に粘土を用ゐて構築し、其の上から更に一面に粘土を打ちつけてゐる。花崗岩のもつ耐火度は決して高くはないが表面が粘土によつて覆はれてゐるので案外熔融してゐない。

美濃の久尻に殘存する元屋敷竈は殆んど地盤のみで隔壁すらも失はれてゐるが、附近に切石が散在し、筆者も恐らく若干は築窯にも利用されたものとの推定はしてゐたものゝ、今回唐津の窯を調査して始めて斯くも大部分に利用されてゐることを知つた。古瀨戸の諸窯及大竈に於てもその窯の主として焚口附近に多くの切石が散在するのに對し一縷の疑念をもつてゐたが築窯術の未熟な古い時代に於ては手近な斯うしたものを高度に利用したことに何の不審もない筈である。

軈て築窯術が發達するに伴れて築窯材料の上にも樣々な工夫が生れ、近世に至つては歐州の築窯法に倣つて耐火煉瓦を多く用ゐるやうになつたが、登窯は勿論、石炭窯にしても複雜で而も正確を要する箇所以外は却つて耐火煉瓦でなく土塊の不規則な形態のものゝ方が頑丈であり、締りもよく體裁よりもその實質上からは遙かに有効であると思はれる。この割竹式の窯なども茶陶は勿論、實用品の上に現代に於てももつと利用されてもよいものと考へられる。

登窯は次第に一室毎に築造するやうになり從つて天井の形は一室毎に饅頭形のアーチが架けられ、窯詰法も匣鉢使用や、天秤詰めによつて相當高く積上げられる工夫が生れてから、窯の背も高く、窯內の面積も廣く次第に大型のものとなつた。舊朝

鮮總督府の野守健氏は朝鮮反浦面鶴峰里（鷄龍山）に於ける古窯趾の調査報告書中この鶴峰里の窯の形式が現今の會寧燒の形式に通ずるものがあり複原の參考資料となつたと述べられてをり、會寧燒窯の測量圖と次の如き說明を發表されてゐる。

所在地　咸境北道會寧面五洞

土を地上に積重ねて細長き斜面の高臺を作り其の所に長サ約八十五尺、廣サ下の方で四尺七寸二分、先端で七尺八寸五分、平均一寸九分勾配の淺き溝を造り、此溝の左右の兩壁から粘土を以て穹窿の天井を架け後方なる最高所の後壁に十四ケの煙出孔前方の最低所に長サ約七尺四寸五分、廣サ約二尺九寸の焚口を設け、更に此窯の內部を隔壁を以て十五室に區劃しその形狀が竹筒を二ツに割つてこれを傾斜面に伏せた形で、隔壁は恰も竹の節に當る、而して其の隔壁の脚部に各七箇乃至十數箇の通焰孔を設け、更に各窯前部に一箇の出入口兼焚口、後部には底より約二尺四寸の高所に色見孔があり、窯床には砂を敷いてある、勾配緩く通焰にぶきため更に最高所の後壁に稍高き煙突を設けてある

作品は海鼠風のものを燒き

溫度はSK10（攝氏一三〇〇）

右の說明によつて明かな如く現今の會寧燒窯は割竹式の形式ではあるが、唐津古窯に比し相違する主な點は第一、勾配が頗る緩かなこと、第二、窯の廣さが上方程廣いことで、これでは煙の引き工合が惡く燒成困難である。初期の割竹式の形式から遙かに遠ざかつてゐることが明瞭に判る。

唐津燒の割竹式登窯が現在飯洞甕下窯及、道納屋谷窯に辛じてその形式を察知するに足る程度に殘存してをり、曾て古館氏が測量せられたる由にて其の測量圖を同氏に依賴したが戰爭中疎開荷物に紛れ込んだものか行方不明で再三再四探索されたが遂に發見されなかつたので、筆者は遂に猛暑八月中旬現地に至り、地元諸賢の絕大な御援助を得て實地調査の結果、不備乍ら別圖の如く其の實測を行ふことが出來た。矢張り自身の手によつて調査を行ふことによつて始めてその實際がよく判り古館氏

の圖面が見出されなかつたことが寧ろ倖であつたと思つてゐる。

窯趾の現場に至れば何分羊歯と共に繁茂する樹立の中に在つて、單に陶片の發掘にのみ心ひかれて窯の原型は發掘の人々によつてその都度破壞されて、筆者が曾て十數年前に見たものとは甚しく原型を失つてゐるのに驚いた。

先づ飯洞甕下窯から着手し、僅か乍ら三ヶ所に殘る天井の一部によつて其の構造が割竹式に據つたものであることが確認される。この極めて僅かに殘存する天井は今にも失はれそうである。この天井がすつかり無くなれば割竹式の最大の特徴が失はれる譯で、この風前の燈火とも云ふべき貴重なこの天井の一部の保存の重要性を愼重に考へねばならない。

圖面に示す如く此窯では天井、隔壁、通焔孔（さま孔 オンザン）出入口、地盤、火床、傾斜、胴木間、最上端部の火吹、窯詰法、等は大體に於て明瞭となつたが、構造、焚口、色見孔（各室の火吹）等がはつきりしない。

詳細は圖面によつて明瞭と思はれるが、窯の全長は約六十尺、胴木間を除き七室に分割され、東南面してその勾配は天井約三寸二分乃至三寸三分、地盤約二寸八分乃至三寸一分、隔壁は一の間後壁、三の間後壁、五の間後壁の大體この三箇所は略その原型を保ち、脚部に在る通焔孔は八乃至十箇で、横式で次室の火床に通じ（横さま）火床は水平で、器物を詰める地盤は勾配のまゝで、一段高く（六寸乃至六寸七八分）通焔孔下端より地盤までは約八寸乃至八寸八分窯內の高さ天井蒲鉾形の中心まで約三尺五寸乃至三尺七寸五分、窯巾は下より上まで均一し、奥行は一の間は狹く五尺五寸、他の六室は約七尺五寸乃至八尺一寸である。胴木間には五本の柱が設けられてゐたものと推定される座が殘り、これによつて胴木の焔が分れて一の間に昇り通焔孔と隔壁の用を兼ねて天井を支へてゐる。出入口には各室共向つて右側に限られこの出入口は窯を詰め終れば戸詰（窯戸蓋詰 カマフタ）され、各室の差木用焚口が此所に當然設けられる譯である。

次に道納屋谷窯で、この窯は近年まで前記飯洞甕窯以上殆んど原型を止めてゐたものだが、現在では飯洞甕窯以上に破壞されて天井は少しも殘つてゐない、のみならず、隔壁にしても一室も完全なものはなく通焔孔以下さえ失はれた室が多い。

この窯もその構造に於ては飯洞甕窯と異るところがない。室數が十四室に分たれ長さ約百三十尺の頗る長い窯である。窯巾は内徑奥行共各室大體約七尺で高サは全く不明である。出入口は飯洞甕とは反對で向つて左側に在る。胴木間が頗る不明瞭であるが一方飯洞窯で不明だつた最後の火噴の構造が略明瞭となつたことは非常な收獲である。この最後の噴出口は隔壁の通焔孔から直接外部に火煙が噴出することは一面外部からの風の侵入によつて焔の引きを防害されるために噴出孔の正面に大きな切石を置きこれによつて火煙が別れて間接に噴出するやうに工夫されてゐる。窯の方向は僅か西に振つた南向である。勾配は地盤、(天井不明)及通煙孔から通焔孔へ約二寸九分乃至三寸一分で天井こそないが他の構造から見て飯洞甕窯と對比しその構造に於て大差がないと思はれる。

皿屋谷窯は跡型もなく全々その構造を知ることが出來ないが若干勾配が急であるかに見える。猶茲に知りたいのは帆柱窯初期の窯で、その構造が割竹式であることは何等疑ひの餘地なきところだが、勾配に於て若干の差がありはせぬかと思はれるがこの飯洞窯、道納屋谷の二基の勾配とその作品を照合して見ると焚方一つで必ずしも酸化焔に限らず還元焔も焚き得られるものと思はれるので大體帆柱窯初期の窯も大差なきものと判斷される。

今回の唐津窯測量に當り炎天下連日絶大な御協力を賜つた中里氏父子、古館氏、坂巻氏、並に毎夜深更まで多數の名品及陶片につき貴重な資料を供與せられた古館老、史蹟につき御案内の勞を煩はした松代氏等に對し深甚の謝意を表したい。

からつ展望

前田幾千代

まへがき

唐津窯は東の瀬戸窯と共に支那、朝鮮陶技の中繼地であり、この二基地を中心としてわが國の窯藝は扇の如く各地へ傳播派生していつた。從つて唐津窯と日本諸國窯とは深淺厚薄の差こそあれ、どの國燒をとりあげても交渉があり、寧しろないのが不思議なくらゐである。瀬戸窯にしても京窯にしても又薩摩にしろ九谷にしろ直接間接に影響してゐる。さればと言つて唐津窯とわが國諸國窯が具體的にどの程度の交渉を持つかを考察することは、國燒の研究が極めて幼稚な現狀に於いては、謂ふべくして洵とに至難の業であり、一つに今後の研究に俟たねばならぬ。編者は「唐津陶と他窯との關係」といふ題を私に割當てられたが、このやうなどの道判然しない事柄を今こゝで檢討するなど、私は餘りにも氣乘りがしませぬ。そこで、編者の註文に反してお氣の毒だが、私の氣附いた卑近な二三の問題に觸れて責めを塞せぎたいと考へる。昨今、家にあつては闇物價、食糧難に追はれ、買出しにも矢張り大きなリックを擔いで行かなければならぬし、外にあつては國際戰爭裁判だ、議會の開會だと報道陣は戰時以上に活氣を呈し、身邊雜務に忙殺されてゐる。本稿はこれらの餘暇になつたもの、纒まつたものが書けやう筈もなく、こは私の端なる管見であつて、切つに先輩知人の垂敎を乞ふ次第である。

一、米量卽ち茶碗

唐津燒といへば誰しも米量、根拔、奥高麗を擧げるのが定石となつてゐるが、果してさう言つた意味の茶碗が唐津で燒けたものであらうか。私の結論から先に言つた方が便宜である。かゝる不得要領な名稱は江戸末期の數奇者が古唐津に洒落て名付けた迄のことで、唐津燒にこんな一種獨特の規格のある茶碗はない、と。

まづ米量とはどんなものか、比較的穩當と考へられる文献を左に摘記しよう。

〇古唐津古キヲ云米計、小眼、繪唐津、辻平戸等品々アリ（茶家醉古襍）

〇米量トイフハ元享年間ニ製セシ所ノモノナリ、陶膚ニ薄釉ヲ施ス而シテ潤澤ナシ、古ヘコレヲ以テ斗量トスト云フ說ハ非ナリ、其ノ故ハ其狀一ナラザルヲ以テ其ノ然ラザルヲ知ル、唯米ヲ斟スルヲ以テ名トナスノミ（工藝志料）

觀古圖說、日本陶磁器史論、日本陶磁史其他の文献も又この說を踏襲してゐる。又金原京一さんは斯う推定して居られる。「飯洞甕窯小十官者窯より出土する燒損じの歪みある青黄色釉を施した茶碗皿を米を酌取る桝の代用にしたものであらふ」と。どの說も代用桝として作られた茶碗である點は一致するが、具體的に米計とはこんなものだと指示し、或は判然と言ひ切る人はないやうだ。

誰も知る如く琉球では茶碗をマカイと言ひ、鹿兒島の苗代川陶村では今でもマツカイと茶碗を呼でゐる。これは恐らく朝鮮で濁酒用茶碗を「マツカリ」と稱するのが轉訛して、かく呼ばれるに至つたものと考へる。肥前諸窯でも歸化鮮人陶工達は茶碗をマツカリと呼んでゐたものと想像されるが、數奇者がこれを聞いて米計の字を當てた。そこまでは無難だつたが、これを明治時代に降つて「ヨネハカリ」と訓讀したからたまらぬ。米計が一轉して米量、米斗と置換へられては愈出でて愈不思議、知らない人には一寸見當さへつかぬも道理である。幕末の寫本「鑑識錄」に曰く

○古唐津は少し端そり也、土こまか成、香臺同様、俗に米かいの手といふ

して見ると、唐津で米計といふ一種獨特の茶碗が燒造されたなどと、まことしやかに言ふのはナンセンスものであらう。

要するに米量などと持つて廻つた名稱を眞ともに解釋すると、上揭のやうな牽強附會說が飛び出して來ることになる。鮮語で父をアメヤと言ふ。樂長次郎の父を阿米爺とか、甚しいのは飴屋と呼稱するのは、恐らくこの類ぐひではあるまいか。又薩摩では土瓶を茶家と稱してゐるのは明らかに鮮語の酒煎子の轉訛である。西日本の燒物の大部分は朝鮮陶磁の傳統であり、朝鮮人陶工によつて朝鮮征伐以來燒造が續けれらて來た。從つて陶技、器皿などの名稱に鮮語が多數日本語化してゐることを吾々は忘れてはならない。

二、根拔卽ち古品

根拔についてもお可笑なことがお可笑がられもせず、今日も通用してゐる。卽ち、品物の根が拔けるほど尠ないための名だとか或は値段が圖拔けで高い故の名稱だと言ひ、或は又高臺が低くて根が拔けて見えるからの命名だ、などと數寄者によつて面白お可笑く說かれてゐる。總じて根拔の文字にこだわつた說で、このまゝ吾々には首肯し難いものがある。

根拔は唐津燒のみではなく瀨戶茶入の一種にもある。茶器辨玉集の根拔茶入の條に、

一、根拔ト云ハ古キ事、根ノヌケタルト云事也

一、根拔ト古瀨戶替ル樣ニ云事ナレトモ同作也

と見へ、瀨戶の根拔茶入は古瀨戶茶入と同作であり、根拔とは古い意だと說明してゐる。又今泉雄作の「高麗茶碗と瀨戶の茶入」には根拔茶入を根拔古瀨戶と呼んでゐる。

更に名物裂でも極上代物、卽ち古渡り裂を根拔と稱してゐる。ここでも根拔を古品の義に解してゐることは注目に値する。名物裂の根拔の語は燒物の根拔の語から、來たものであるか、それとも裂地の方が先きか、その邊の事情は今審らかにし得ないが、ともあれ根拔は唐津燒のみを限定指示したものでないことは確しかである。

又唐津燒では茶碗だけを根拔けと稱してゐるやうである。工藝志料に「台輪ノ皺紋アルヲ良トス」と見え、金原さんは「飯洞甕窯で出來た綠色釉を施した土質のざらざらせぬ茶碗であつたらう」と判つたやうな判らぬやうなことを述べて居られる。しかし茶碗のみを指した稱呼でないことは、私が說明する迄もなく唐津松山茶入（小松輝久侯爵家藏）の記事が雄辯に讀者の眼に提供してゐる。

○松山　古唐津根拔と見ゆる、惣體靑し。土至極かたし、古瀨戶と同じやうに見ゆる（名物記）

では根拔の語源は如何。渡邊良氏は雜誌德雲三卷二號に「古金襴の色彩美」といふ論稿を寄せて、根拔は「年拔け」の簡約であらうと考證して居られるのは傾聽に値する。根拔と言ふぎごちない名稱もこれであらかた判るやうに思ふ。要するに根拔は「古」の好事的冠稱と見るべく、唐津燒の、或る特殊な茶碗などと限定指稱するが如き當らないも甚しい。又この頗る曖昧な字句に囚はれて作品の年代とか、窯とか陶技などを詮議するのは、愚かな話と謂はなければならぬ。

三、奥高麗卽ち古唐津

奥高麗に就ても又漠然とした呼稱を眞正面から理詰めに解釋して色々に說いてゐるやうだ。或は年代から或は窯から或は又作行から、各人各說と言つてよい。奥高麗の名は要するに江戶時代の數寄者が彷間古唐津と稱されてゐる小振りな茶碗よりも一手古い大振りな茶碗を洒落てかく呼んだ迄のことであつて、奥高麗卽ち古唐津と見てよい。これに關しては別項にも解說される豫定であり、又滿岡忠成さんの硏究もある（美術史學十九年三月號）から玆には特に觸れないでおく。

ただこれに關聯して思出されるのは片口をも奥高麗と呼んだことである。井上侯爵家傳來の離駒茶碗は片口であつて、その外箱に奥高麗片口とあり、蓋裏に「此奥高麗片口茶碗者」と明和六己丑春の書付があり、且つその大外箱にも「此奥高麗片口の茶碗は」と天保七年の四醉老人の極書がある。されば奥高麗は所謂端反りの大振りな茶碗の一手を限定指呼したものとは言ひ難く、椀形、半筒、呉器、片口など種々樣々の作行の茶碗をも引くるめた廣義の古唐津を指稱したものであることを吾々は知るのである。

さて、奥高麗の名稱は何時頃から初まつたか、江戶末期に降ると遠州藏帖を創め諸家の藏帖や其他の記文に往々散見するところであるが、古いところでは餘り見當らないやうだ。知見の範圍で言へば築地の八百善主栗山善四郎氏藏の茶碗が最も古いと考へる。

○奥高麗　桑山左近大夫重長筆　茶碗箱蓋書付　奥高麗　右眞蹟也、戊辰一月　古筆了任印

とあり、桑山左近は寛永九年に歿して居り、寛永頃即ち江戸初期より奥高麗の名は既に一部識者の間に行はれてゐたことゞ判かる。

畢竟、米計といひ根拔といひ又奥高麗といひ、多分に曖昧味を持つ骨董的な名であり、なんら科學的に區分された稱呼でもなく、古來數寄者に愛玩襲用された古唐津の珍稀品に對する好事的冠稱であつて、寧しろ斯かる名稱はなくもがな、世事萬端考へれば河童の屁である。從つて此等に本歌がある譯でもなく、又これにより窯、年代、陶技など判からう筈もない。だが、何事も判然せぬところに却つて數寄者の興味があるのかも知れぬ。

四、奥高麗と大正名器鑑

奥高麗といへば私は故高橋箒庵翁を思ひ出す。さうだ、支那事變の始まつた年だつたからもうかれこれ十年にもなる。早いものである。丁度その頃私は寶雲舍から發行した大正名器鑑の編輯に從事し、殆んど毎日赤坂の高橋氏邸に編輯の打合せに、或は讀者のために署名を貰ひに日參してゐた。高臺に建てられた見晴しのよい應接室で晩年の箒庵翁の溫容に接し親しく指導を受けた。もともと名器鑑の複刊は大きな誤ちだけを訂正して初版をそのまゝ踏襲する方針であつたが、校正してゐる間に次々に字句や寫眞に疑義が判明し、思切つて手を加へた處も可成り多い。或日奥高麗の誤說を指摘して訂正をお話したが、翁は熱海の別邸へ避寒のため今から出かけると言つて、その時はあまり氣にもされる樣子もなく微笑されてゐた。

名器鑑を所藏されてゐる人は既に御存じのことと思ふが、高橋さんは奥高麗を朝鮮茶碗の一手と解釋し、唐津燒とは全然別項に記述されてゐるのである。即ち第五編茶入の解說には、

○足利末期に於て唐津に來りたる陶工の製したる者を奥高麗と云ひ

と說きながら、第八編茶碗の巻頭解說には、眞淸水藏六の「陶寄」の說を採用して

〇奥高麗は滿州窯なり昔滿州が高麗地域內に在りし時、彼の撫順方面の陶器が日本に渡り來り、日本人は之を奥高麗と名づけたり、日本より云へば高麗の奥に當るを以てなり、とあるを最も能く肯綮に中れりと信ず、又奥は古の義にして奥高麗とは古き高麗燒を指すなり

として、奥高麗即ち半島物と斷定されてゐる。更に又奥高麗離駒茶碗の實見記の條には「唐津片口茶碗、腰廻り唐津特有の蛇蝎白釉かかり云々」と、掌を反すが如く奥高麗即ち唐津と解說し、そこには何んら一貫した見解は見られないのである。

暫くたつて箒庵翁を訪ねた時、翁はあれは拙づかつた、どうして初版の時にあんな區別を立てたか、古いことではありもう記憶にもない、奥高麗と唐津を切離すのが抑も無理な話だ。早速訂正するやうに、とのことであつた。そこで印刷屋や寫眞屋に手配したが、その時は既に後の祭り、印刷は出來上り製本屋に廻されてゐた。「惜しい事だつた、今少し早ければ」と翁には感嘆久しいものがあつた。そこで名器鑑完成の曉き雜誌に其旨を訂正發表される筈になつて居つたが、戰爭は大平洋戰へと進展して日々激烈の度を加へ、印刷は一段と窮屈となり、翁もこれが訂正を俟たずして忽焉として逝かれた。印刷の手違ひの爲めに遂ひ點睛出來なかつたのは惜しみても餘りがある。

たしか雜誌やきもの趣味上であつたと思ふ。岡山の多田利吉氏が此の名器鑑の誤謬を指摘されたことがあるので、私は此間の事情を發表する豫定だつたがそれもつひ機を失して終つた。久振り名器鑑を披いて當時のメモが挿入されてゐるのを發見し私かに苦笑したことであつた。名器鑑編輯責任者の一人として又高橋さんのためにも、玆に隱れた箒庵翁の意見を記して、同好者の參考に供する次第である。大正名器鑑をもじつて「大將目が利かぬ」と言ふ、あまり難有くないニックネームを高橋さんは頂戴して居られたやうだが、どうしてどうして、却々目の利く爺さんで、そこらの愛陶家の方がよつぽど目が利かぬ、と私は觀てゐる。今や箒庵翁なく往時を回顧して感慨新たなるものがある。

五、唐津に名物茶入なし

唐津で古くから數寄者にとり上げられて賞用されたものは何んと言つても茶碗で、茶入は高取、薩摩等の他の國燒程には珍重されなかつたやうだ。幕末の茶道筌蹄に

○唐津　遠州時代　古唐津は茶入なし、いにしへは茶碗のみ燒しなり

と推定してゐるが、茶碗のみを燒いて茶入を燒かなかつたと言ふのも一寸お可笑な話。しかし唐津茶入の尠ないのは事實だ。緊密端正な茶入を燒造するには、唐津土はあまりにも粗荒で、適當ではなかつたであらう。又茶碗が高名な爲めに、出來た茶入でも其名に隱くれて終つて、左程珍賞されなかつたのではないか、と私は考へる。それにしても唐物や瀨戸茶入の倣造品があつても佳さそうだ。又著名數寄者の指導になつた窯だから、數寄者の息吹のかゝつた茶入もありそうだが、頭の下がるやうな茶入には寡見にしてお目にかゝらない。これには傳世品よりの檢討が足らないせいも多分にあるが、今まで紹介された茶入を見ても、これぞと言ふ程のものは見當らなかつた。中で繪唐津と斑唐津の茶入がわづかに目をひいた。

繪唐津茶入――自由放奔な鐵繪、屈託のない形、親しみ深い佳い茶入だと一應敬意を拂つては見たものの、姿、釉、形、など唐物や瀨戸の茶入に比較して、矢張り何處かに喰ひ足らんところがある。殊に氣格の劣る點は致命的であつて、結局殘るも

のは「繪が珍しい」唯それだけの話である。斑唐津茶入――饂飩粉みたいな釉薬をダラリと流かけたものを斑唐津と呼んでゐる。この手の茶入は仿間屢見るところであるが、どうも釉調の面白さにしてはチト騒々し過ぎはしないであらうか。その他にもあるにはあるが格別擧げる程のこともない。時代がズレルと茶入も氣格が著しく落ちてカラ駄目だ。もう陶工達は磁器の燒造に專念して茶入や茶器の製作など見向きもしなかつたのであらう。

大正名器鑑には唐津茶入が三點擧げてある。一は「松山」で、二は「玉簾」でこの方は現今存滅不明となつてゐる。三は中與名物「思河」茶入である。去る大正十四年松平直亮伯爵家賣立の際に三萬八千一百圓で賣却された評判の茶入である。肩衝茶入で遠州の命銘と言ふ。この茶入は古今名物類聚に唐津燒と窯別けされて以來、陶書の悉くがこの說を繼承してゐる。しかし不昧侯の鐘愛を受け、當時目利者として名高かつた江戶の道具商伏見屋甚右衞門は、侯の說に反對して「思河唐津に見へ候え共、古サツマに候」と異說を立ててゐる。又箒庵翁も唐津茶入にしては一品物で殆んど他に比類なきものと疑を存じ、多田二夕居氏も伏見屋說を採つて居られたやうである。

思河は黑焦の流釉、胴の五筋のロクロ目、腰の一方を繞ぐる切篦、底は板起しで、他の茶入に見ない著しい技巧が施されてゐる。しかるに福岡の內本浩亮氏が加賀前田家傳來の古薩摩肩衝茶入を所藏され、雜誌やきもの趣味十四年十二月號に圖說されたことがある。この茶入は糸底に轡形の凸印風の銘（島津氏の丸十の紋所に因んだものか）があり薩摩茶入の大闘たる貫錄を充分に備へた佳品である。今此二器を比較檢討するに、施釉、ロクロ目、腰を繞ぐる切篦、底の板起し、形姿の粗にして器格堂々たる、技法及び樣式に於いて一味相通ずるものがあるのは不思議と謂はねばならぬ。他人の空似とするには餘りにも酷似しており、若し一を唐津とせば他も唐津であり、思河を本歌とするならば轡茶入は寫しと見るべきであらう。

又思河銘は遠州の撰で、壬生集の藤原家隆卿の歌「思河まれなる中に流るなりこれにもわたせ鵲の橋」に因んでつけられた銘と傳へられる。大正名器鑑には思河を考證して筑前筑紫郡にある逢初川（漆川とも）だといふ。しかし茶入の命銘は產地の

地名をつけるのが一般であり、高取燒の銘なら兎も角く、唐津燒に硘岡の河名を持つて來るなど、遠州の命名にしては少々迂遠な命銘のやうに考える。

鹿兒島にも思川がある。古薩摩茶入で著名な帖佐窯の西北方約一里、昔は帖佐鄕內にあつた川だが、今は區轄整理のため帖佐町と重富村の境界を流れる川を思川といふ、斯く考へて來るとどうも、伏見屋說に軍配を上げねばならぬ。要するに私は傳世類品、技法、銘名の三點に基いて、思河茶入は薩摩燒であり、從つて唐津燒には名物茶入はないと考へるが、どうであらうか。

六、唐津バラック論

唐津窯は何時創始されたか、諸説紛々いまだ確説を見ない。大別して舊説は遠ほく神功皇后に緣ありとし、或は齋明朝と謂ひ、或者は室町初期と稱し、又工藝志料が元亨年間開窯說を稱へて以來今日此說を踏襲するものが多く、恰かも定說となつた觀がある。されどこの說とても信據すべき出典はまだ明らかにされてゐない。新說は最近一部有志の提唱にかかわり、年代をグッと切下げて朝鮮役以降と推定し、その論據を飯洞甕窯を初め小山路、藤川內、祥古谷諸窯の發掘陶片に古田織部の息吹のかゝつた茶器が出土する點に求めたものである。

新說の謂うが如く、織部が朝鮮役中肥前名護屋に滯溜し、飯洞甕窯に發註して自己の創意になる茶器を燒かしめたこと（何等確證はないが）鬼子嶽崩れによつて飯洞甕の陶工は各地に移窯して織部系の茶器を燒造してゐることから、織部が唐津を指導したのは征韓役以後に屬すると見る點は、一應は肯づけもする。がしかし織部は飯洞甕窯に茶器の發註はしたであらうが、窯の創設者ではなかつた筈だ。又この窯は茶器專燒窯ではなく朝鮮風の雜器窯として早くから開設した窯ではなかつたか。かの有名な總長六間の割竹窯は大量製産を如實に物語るものではないか。これらに關して確實な傳を得ない限り新說も又單なる憶說と考えられ、われわれは隔靴掻痒の感を再び繰返すのみだ。もつとも新說は世間にありふれた文献と――陶器大辭典に收錄した程度の――發掘品に織部好みの茶器のある點から創始年代を究明せんと企圖したもので、初手から錯誤を敢えてしてゐる。謂う迄もなく發掘品は窯の位置を明確ならしめ、作品及び陶技の一端を推知するには最上の參考となるが、窯の年代、

變遷、關係陶工等を知ることは全然不可能に近いことを忘れてはならない。又ありふれた茶書から窯の年代を吟味することは木によつて魚を求めるやうなものである。卑近な例を擧ぐれば、高取燒に於て高取歷代記錄が發見されて初めて其全貌が明らかになつた、薩摩燒にしても島津家藏古記錄、薩陶製寬錄、苗代川古文書、其他の古記錄の出現を俟つて、辛うじて薩摩陶史が明瞭にされたが茶書とか一般陶書に負ふところは九牛の一毛にも及ばなかつた。要するに國燒の研究は地元の文献的記錄に俟つものが頗る多いことを吾々は銘記せねばならない。

唐津燒は關係文書が稀少で、藩廳の文書は消失したとさへ傳へられてゐる。ために古記錄がないと言ふのも一應理窟だが、文献的研究の振はないのは古文書が無いのではなく、熱意のあるよき陶史研究家が居ない點に、その原因の一部が潛んではゐないだらうか。斷簡零墨の中から片言隻句を蒐集整理するのは、臘を嚙むが如く、發掘よりも遙かに面倒臭い仕事に異ひないが、唐津陶史研究と言ふこんな筋道の立つた、しかも映へた道樂を初める特志家が、肥前にも一人位あつても惡くはない。前述の如く唐津研究は、唐津の入門とも言ふべき米斗、根拔、奧高麗の名稱さへ檢討されて居らず、創始年代といふ先決問題さへも究明されて居ないのだから、唐津も未だしであり、洵とに情ない狀態にあると謂はねばならぬ。

しかし唐津は文献的研究の困難なところから、窯趾の發掘は極めて盛んで、有象、無象、知るも知らぬも、まるで少女歌劇のバラエティの登場よろしく、全國にその例を見ない奇觀を呈してゐる。お蔭げで窯趾、製品、技法の大體の輪廓が明瞭になつたことは多とせねばならぬ。されど陶磁研究は窯趾の探索、發掘品の吟味のみではバラックで、文献の裏付けなくしては容易にその眞相は摑めない。要するに發掘品は文献及び傳世品の檢討と相俟つて始めて意義がある。發掘專門家の中にはバラックと言ふことを自覺してゐる偉らい人もあるが、中には發掘を以つて、製品、陶技のみならず、窯の消長、年代までも簡單に形づける人もあつて、これら發掘屋さんの頭はとても吾々凡庸の徒の量かり知るべからざるものと三嘆せざるを得ぬ。

話が脇道へ大部反れたが、要するに今迄の唐津研究はバラックだつた。文献並に傳世品の研究は萎縮低調で、窯趾發掘のみ

が著しく跳躍した跛行的現象であつた。今や時代は舊い秩序に代つて新しい秩序が生れ出でやうとする過渡轉形の姿をとつてゐる。陶片のみによる獨善的な解釋や、美しい夢のやうな鑑賞論をくり返して滿足してゐる時ではない。唐津研究も大戰前を第一卷の終りとして、今後新しい理論體系の確立に邁進すべきである。これには今度新しく生まれた日本陶磁協會が主體となつて、文献、傳世品、窯趾等を調査し研究し指導し、且つ集大成せなければならない。吾々の責任は愈重いものとなるが、陶磁文化の面に於ても潑剌たる民主日本をうち建てやうと言ふ意慾に燃えてゐる若人のみが果し得る事業であり、又吾々のみが持ちうる希望であり喜びなのである。

七、中尾是閑唐津

ついで私は唐津名物茶碗に言及し、木村探元の白鷺洲を援用して、探元が茶陶に唐物を斥け、骨のある麁相な朝鮮陶器や、唐津燒を禮讃してゐる點を紹介する豫定であつたが、これに關しては前に「木村探元の陶器觀」と題し、書畫骨董雜誌十五年九月號に書いたことがあるし、又別項に岡田君が面白く考證されてゐるから、一切こゝには觸れないことにした。ただ追錄として、私藏の陶器古寫本から唐津茶碗關係の記述を拔萃して識者の參考に供する、但しこれが解說は一つに讀者の思慮に期待する。寫本の著者、年代を審らかにし得ないが、恐らく數寄者の筆錄と思はれ、陶器の製作年代など誤斷も目につくが、說述は簡明卒直にして、間々ユニックな處があり、鑑陶など今尙ほ肯綮に中るもの尠なしとしない。

一、中尾是閑唐津茶碗

古唐津、建長ヨリ文明永祿ノ間ナリ。白土赤土共ニアリ、此頃ノ唐津ハ古唐津ト唱ヘタマサカニアリ、

名器ノ內　中尾唐津　同　是閑唐津、中尾是閑ト云フ醫師ノ所持スル所ノ二品ナリ、一ヲ中尾ト云フ、又一ヲ是閑ト云

賞テ名ニヨベルモノナルベシ、皆此年間ノウチノ唐津ナリ

二、禰子茶碗

名器ノ內、千家□□ノ內ニアリ、禰ノ滸　是ハ細川三齋所持、三齋公御名並ニ筥書ナリ、子ノ餠ト申事ノ名ナルヘシ、

皆此年間ノ唐津□

三、奥高麗茶碗

奥高麗、古唐津□□□永祿ノ頃ト見ユ、此頃茶禮ヲコリ高麗朝鮮ノ□器アツムルコロ古渡リノ古器ヲノゾムト雖モ稀ニシテ手ニ入ル事カタシ、ヨツテ唐津竈ニテヤキ出セルモノト見ユ、故ニ高麗茶碗ニ似タリ、ヨツテ後ニ奥高麗ノ名アリ、惣體高麗ヤキニ似テ古唐津ノ茶碗ヨリ淺メナリ、又ハ平造ナトアルトカ傳フ、五器、井戸ナト見アテニセシ物□先端反リニテ藥ヲカフリ米粒ノ如キカ、又ハヘマユ毛ノ如ク目アルモノナリ、先ハマユ毛ノ如キ目一ツ、米粒ノ如キ目ハ三ツ四ツ五ツトモアリ

四、繪唐津茶碗

繪唐津　是モ慶長ノ頃ヨリ又ヲイ〱ニヤケル物ト云、又末ニ至テモ畫唐津アリ、後時代ヲイ〱アリ、先此頃ヲ繪唐津時代トモコトバアリ、前古唐津ニコシシ云言バナルベシ、是モ繪高麗畫朝センヲ見アテニ燒シモノナルベシ、故ニモヨウ草ヤラ蔓ヤラワカラズ、モヨウモハキトシ、ワカルヨウナルハ後ノ畫唐津ナリ

五、朝鮮唐津

古唐津（末タ古唐津ノ名アリ）慶長ヨリ慶安承應ノ頃最早茶道モサカンニナリ、數寄者モフヘシ頃シキリニヤキ出セル故茶碗モチイサク當今賞スル品アリ、朝鮮藥、茶入藥ナト用ヒ、茶入、水指、茶碗等アリ、又朝鮮唐津ト云ハ朝鮮ノ土藥ヲ用ユト申傳アリ、中ニモ至テ手取ノ輕キアリ、朝鮮土ナルヘシ、此頃ニハヨキ物多ク出來シト見ヘタリ、世上ニハ至テ少ク稀ナルユヘ別テ賞ス

六、土井唐津

土井唐津ト云アリ土井大炊頭好ナリ、宗偏流ノ入ナリ、是ハ至テ作カタク畫唐津ガヲモナリ、モヨウハ寶盡多シ、又畫ノナキモアリ、茶碗香合アリ

七、掘出唐津

掘出シ唐津　是ハサカンニ茶器出セシ頃、形チソンジ又ハ火ワレ或ハクスリカセ、スベテ成就セザル品ヲ捨テ場ニコマリ埋メシヲ、後年茶道モサカンニナリ殊ニ器物モ不足ニテ、埋メシ所ヲ掘カヘシサガシモトメシユヘノ名ナリ、是ニモ多クノ事ユヘ埋メシ時自落コボレ、又カヘツテ掘出セシ頃ノ人氣ニ合ヒテ格別稚ナルモノアリ、依テホリダシト云ヘトモ中ニ賞スルモノモコレアルナリ、追々掘出シテ今ハ稀ナリ。

唐津燒二題

岡田宗叡

一、『白鷺洲』に現れる唐津に就て

『白鷺洲』といふのは、周知のとほり、薩摩の畫人、木村靜隱の直話を、島津久峰が靜隱の三曉庵を訪ね、寶曆五年より同十一年に亘つて筆記した書物で、茶事や文學、書畫等に關する、豊富な靜隱の見解が示されてゐる。ことに薩摩燒研究にとつては、つとに貴重な文献として知られてゐるところである。

また靜隱は、唐津燒に就ても、一方ならぬ興味を有し、珍重したであらうことは、同書中、屢々、唐津燒に關する知識を示し、今日われわれにとつて、非常な參考となることに於て察知される。いま同書の唐津燒に觸れた部分を抽出して、考察を續けたい。

一、織部燒又は唐津燒抔に藥のつよくかゝりて止有處をかいらき先キとも云又は露先とも云

釉藥の溜りを、寶曆の昔には「かいらき先キ」または「露先」とも稱したことがわかる。このことについて、今日の鑑賞家の間には、別に特定の名稱はないやうである。茶杓の一番尖端を「露」といひ、同じく、茶杓の先の方を「櫂先」と呼んでゐるのに、語呂が似てゐる。「露先」といふ意味は、茶杓の「露」とともに、圓くして淨き粒齋(つぶゆ)の意として容易に理解されうる。

「かいらき先キ」は、井戸茶碗の約束である「かいらぎ」が、鮫皮の梅花の形を現はしてゐるものとの相似から呼ばれてゐる

といはれるが、唐津の茶碗も、時に井戸茶碗を想はせる「かいらぎ」が器の下半部とくに高臺周邊にあることに依つて、かく、「かいらぎ」の末端とでも解される、言葉をもつて呼ばれたとして當らないことはないと信じる。織部燒には別に「かいらぎ」の狀態をしめす釉景はないやうであるが、志野は廣義の織部燒とみなし、長石釉が燒き縮んで「かいらぎ」を想はせる釉景を示すことは屢々であるから「かいらき先キ」といふ言葉をこの意味に解して、別に差支へはないやうである。

一、此間相求候織部大茶碗相求候段申聞候へは是はいけたものにて隨分秘藏いたし可置由被申候其後又織部燒を得と相考見申候に唐津織部と見へ候由被申候に付唐津織部とはいか樣成事を申候哉と相尋候へは唐津にて候織部燒に似せ燒候由先出來別而かたく出來候もの故此節相求候も唐津織部にて候はん存候由承候事

木村靜隱が唐津織部を判つきりと、唐津にて燒造されたものであると斷じ、その堅緻な出來を特にその見所として指示してゐるのは、今日の新しい唐津燒の研究と吻合してゐて興味が深い。おそらく、所謂唐津織部が不明瞭となつたのは、これより後のこと、幕末から明治、大正にかけての茶器鑑定が不勉强となつた爲であつたであらう。靜隱が特にすぐれた藝術家であり、器物の鑑識に長じてゐたといふばかりではなく、まだ當時は美濃織部は唐津織部と區別されてゐたのではないかとおもはれるのである。

唐津織部といふ稱呼は、既に元祿七年に上梓された『萬寶全書』の『和漢諸道具古今見知鈔』織部燒の部に

△茶入△沓茶碗とてせいひきく手あつにゐくほ入土色白く黑藥薄柿濃柿白藥にくろき染付乃繪有地藥白きはくあんゆう有形は色々かはり有△火入灰爐△花生△水續△水さし△水こぼし△鉢皿ちよく△香合△かはらけ油盞△根付をじめ等色々乃道具

物好にて燒たる物なり但瀨戶織部唐津織部とて二通有又後織部とて近代に出る物あり（傍點筆者）

と記されてあり、また永末新次郎氏舊藏（戰災により亡失した）の天明時代の書寫になる『松尾流茶湯聞書』といふ寫本の中に、「茶入　一、唐津織部茶入　唐津織部フリ出シ茶入ト云　底　唐津織部ハ手作リナリ瀨戶ハ糸切ナリ」と詳述されてゐる如くに、早くは元祿頃から、近くは天明頃まで、唐津織部の名が通稱されてゐることが判明するのである。このやうにかつては明瞭に登場してゐた唐津織部が、時とともに美濃織部の大きさに覆ひかくされて了つてゐたのは何としても殘念なことであつた。

天正十三年二月十三日、織部が古田左介時代に催した茶會に、瀨戶茶碗を使用したことが『津田宗及茶湯日記』に見へてをるが、この瀨戶茶碗が、織部好みの志野や織部であつたかどうか、いまは窺ひ知ることが出來ない。しかし『神屋宗湛日記』の慶長四年二月二十八日の織部朝會の條に「セト茶碗ヒツミ候也ヘウゲモノ也』とあるものとは同じ趣好のもの、或は幾分なりとそのやうな徵候のあるものと考へてよいであらう。『草人木』にも織部が使用した茶碗を說いて「茶碗は年々に瀨戶よりのほりたる今燒のひつミたる也」と言ふてゐる如くである。

不均整なむしろ異風と感じられる器物を好む織部が、利休の歿後、茶道界の覇者となつて、茶道具の總てが、直接に織部が指導したかどうか、いや直接の指導などはどうあつても、織部好みの、製作意慾の表面に强くうつたへ出てゐる。むしろ前覇者の利休好みからしては、變形の甚だしい器物が世を風靡したことは否めないことである。

古田織部が所持した古田高麗といふ御所丸茶碗や、藤堂家の舊藏で大正十二年の震火災で烏有に歸した、織部所持の古伊賀水指を想ふにつけ織部好みの單的なあらはれとしては沓茶碗を考へるが、唐津で沓茶碗を燒造した窯として

長崎縣東彼杵郡折尾瀨村牛石免の牛石窯趾、佐賀縣小城郡西多久村大字山口の高麗谷窯趾の二窯趾が知られてゐる。（『茶わん』第十卷第九號・金原陶片「唐津沓茶碗」）

『白鷺洲』にみる、織部燒の茶碗と見まがふ程にて、再度の硏究でそれと知られる唐津織部であるならば、これ等二窯の作品かもしくは近年所謂美濃の織部と全く同趣同調のものとして驚き讃美されてゐる、新發見の小山路窯（佐賀縣杵島郡東川登村大字永野字內田小山路所在）の作品の如きものに擬すべきものであつたに相違がない。

一、川上因幡殿え寺澤志摩守樣より被下候繪唐津の茶碗別而かたき出來にて繪も有之候に燒くされたるものにて靑磁なとの樣に有之候是又殊之外いきたける道具にて候素人は不出來之物と可存程の道具にて候へ共名高き茶人にて被下候ものもよく〳〵見申候に別而勝たる事と存候寺澤樣之時は切支丹發行の砌にて寺澤樣奧方誰か御娘にて候哉此人右宗にて奧方より之御すゝめにて寺澤樣にも切支丹と成被申候由その後權現樣御さつとうにて別而御法度に被仰出候節相つふれ候由左の次第無之候はゝ茶に名高き事小堀殿古田殿なとの樣に可申候由唐津燒之元祖は志摩守殿唐（高）麗歸陣の編被召列候ものの由

寺澤志摩守廣高は文祿三年に、波多氏に代つて唐津を領した。利休門の茶入で休甫宗可と號したことが知られる。しかし、晚年は感ずるところがあつて、茶を廢した爲、茶入としての聲名は得られなかつたと思ふ。朝鮮役にも從軍した武將であり、武將であり乍ら茶人であるといふ、當時の諸將の例にもれない人物であつたから、朝鮮から陶工を將來し、また旣にそれ以前

に於ても唐津近傍に渡來し、根を下ろしてゐたであらう、高麗人陶工を保護しなどして、唐津燒の振興につくしたであらうことは、完全な史料をもたないけれど、想像に難くはない。廣高は寛永十年四月十一日、七十一歳の天壽を得て歿した。切支丹に關係したのは、世嗣の二代寺澤兵庫頭堅高で、正保四年に、天草の亂の責をひいて、江戸淺草の海禪寺で自刄したといふ。堅高の茶人であつたかどうかは判明しないが、寛永十三年に藩内に極端な緊縮政策を行つたといふ點よりして、茶事にふけつた人物とは考へ及ばない。

兎もあれ、寺澤廣高が川上因幡なる人に譜つた繪唐津の茶碗は、燒くされたる、つまり燒けそこなひ、燒成不完全なもので、その釉色が還元して靑磁のやうにみへ、その作行もいきたける（ゆがんだ）素人の眼からは不出來と考へられるやうなものであつたやうである。

このやうな繪唐津の茶碗の採りあげ方は、古田織部の審美法の流れをくむ、織部好みのあらはれであり、この器物一つを考へても寺澤廣高が利休門とは云へ、織部の影響をもうけてゐた茶人であることが察せられる。さてこそ、唐津織部の當時名高く、今日、織部の茶風に合致するやうな器物が、古窯趾のこゝかしこから破片となつて、われわれの前に出現し、また傳來のものの手がかりともなつてゐるのであらう。

寺澤氏の領內、並びに平戶領の一部に及んで開かれてゐた唐津古窯趾を、金原陶片氏は寺澤唐津なる範疇に包含してゐる。最も活動的な繪唐津を燒造した道園窯阿房谷窯、澁くして且つ華麗な朝鮮唐津を生んだ、藤の川內窯もこのうちに含まれてをり、次の各窯が擧げられてゐる。

山瀨上窯、山瀨下窯、櫨ノ谷窯、大川原窯、田代窯、燒山上窯、燒山下窯、甕屋谷窯、市若屋敷窯、梅ノ坂窯、道園窯、御坊谷窯、明尊寺裏窯、阿房谷上窯、阿房谷下窯、藤ノ川內上窯、藤ノ川內下窯、金石原廣谷窯、金石原上窯、牟田ノ原窯、椎ノ峰下窯、平山上東窯、本部山崎窯、三河內早山窯

以上であつて、これらの名譽ある古窯趾は佐賀縣の東松浦郡、西松浦郡、杵島郡、及び長崎縣東彼杵郡に亘つて散在してゐるものである。

一、今日者歲暮として酒肴抔持參いたし候に拔き有之候終て自身手前にて如例安座にて候茶碗は墨藥の唐津にて數年前持來り候由夫に付先は此茶碗も塩笥成にて候此塩笥と申人は茶碗に燒候ては過半無之由然共用なれ候故塩笥とて用え此墨藥の茶碗もいか樣塩笥抔に爲燒ものと相み得候由被申候右終て歲暮の一首書付見せ被申候別紙には直筆有之候得共猶又此に記置候左に

年暮るゝそのいとなみに人とはて山にはあらぬ庵しつかなり

と書付被送候

この折の茶碗は歲暮にふさはしく、墨藥の塩笥成、深々とした、厚手の大きい碗であつたことが想像できる。墨藥の唐津、つまり近來いふところの黑唐津であらう。從來、黑唐津は釉藥が白釉を下に黑釉を上にする二重掛けの故をもつて、同じ手法効果の古薩摩の聲名にかくれ、その位置をうばわれ、往々にして古薩摩とあやまられてゐたものであつた。

この種、黑唐津を燒造した窯趾の所在が判然としたのは、昭和十六年の春、唐津市の三浦龍一氏に依つてなされた李祥古場窯（佐賀縣杵島郡武內村祥古谷所在）の發掘によつてであつた。この窯趾から發見されて、異色のあつたものは、口邊から胴の中央部にかけて三ヶ所程竪に凹ませ、その腰部があたかも壺の腰部のやうに、豐かに膨らんだ、茶碗とも、また向付とも云へる形態をもつた、他の唐津窯にも類似品のない器物、それには白と黑との釉藥が二重にかけられ、一見して薩摩の蛇蝎釉を感得させるものであつた。黑褐釉單色のものもその中にはありはしたが、それは前者の何割かにすぎなかつた。

この形態の器物は、塩笥成といふべくは上半部が前述したやうに異つてゐるが、大きさ、深度は、ほぼ塩笥成のものと釣り

合つてをり、特定の名稱も今のところ與へられてゐず、塩筍成の一變形と解せられないこともない。この手の傳世品はかゝる形態であり乍ら、多く眞冬用の茶碗として寶貴されつゝ、われわれの前に出現する。この釉薬を被つた沓形のもの一點、私はかつて福山市の某家で拜見したことがある。しかし悲しむべきことに、私達の前に出現するこれ等の多くは古薩摩となつてをるか、疑はしい唐津とされてゐるやうである。ともあれ、墨薬の塩筍成の唐津といふ文字をみて、直覺的に李祥古場窯の黒唐津に比定することは、あまり大きな誤りではないと信ずる。

一、當分の肥前唐津燒と申候て茶碗貰候間御覽被成可給由申候て賴見申候に當分の唐津は淸水燒又は新渡同前のものに候と被申少も譽不被申候左候て被申候は此肥前唐津は寺澤志摩守殿高麗陣の節御船奉行にて此御方なとの御船も差引にて被差越候節高麗人被召列候が此元祖にて候此御方も兩三人被召連候萩にも被召列此三所か高麗の手筋にて候然共唐津は奥高麗の手筋故上方にても唐津は別て賞翫仕候古帖佐田原家兩家熊川手筋故茶碗は唐津ほとには賞翫不仕候茶入は別て上方にても譽申事のいつそや申候通鴻池道億の所へ參候節咄申候は古帖佐の儀は古薩摩と申候古薩摩の茶入は上方にても別て無他事ものにて道億にも二つ見申候由得と見申度と咄爲仕上からは茶入は別て賞翫仕候由候右終て靜隱所持の此比の唐津を見せ被申候て見申候に餘程古くは相み得候へ共中々古き唐津とは大違のものにて候先比にて能考申候に被申候其時古き唐津の能ものと申候と見くらべ申候事

一。右咄の内に奥高麗と被仰候はいか樣成事に候哉と申候に奥の奥高麗とて井戸なとの類にて候都の方にて燒候を熊川抔と申候總て都の物は見事に有之候故古帖佐なとの茶碗茶入の藥立はやはり熊川にて候井戸は田舍細工の故麁相に有之候唐津なとは其奥高麗人を寺澤殿御つれ被成候其燒手故殊の外上方にては賞翫仕候由左候て寺澤殿御事は其時代迄は段々と切支丹多き時節候て何樣に致候哉奥方樣切支丹故寺澤殿にも右宗門の御不審有之家もめしつぶされ候然共茶碗計は于今

唐津と申候て此名は殘り居申候

當分の肥前唐津、つまり寶暦頃の唐津燒は古唐津とは全く面目を異にしたもので、清水燒や新渡の磁器と同樣で、興味の薄いものであつたことが知られる。またその頃、古唐津を模したものも唐津で燒いてゐたらしく、われわれが中時代の唐津として顧みないものはこれに當るのであらうか。京唐津とも異り、さりとて古唐津に劣つたものを往々にして見かけるが、『白鷺洲』にもあるやうに、「餘程古くは相み得候へ共中々古き唐津とは大違のものにて候」と嘆ぜざるを得ないものである。『白鷺洲』では再三にわたり、寺澤志摩守が朝鮮役に參加して高麗人陶工を連れ來つたことを述べてゐる。しかも奥地のそれを招いたことに記されてゐるが、金原氏等の研究ではこのことを認めてはゐない。古唐津窯趾を內唐津（鬼子嶽唐津・寺澤唐津）外唐津（武雄唐津・多久唐津・平戸唐津）に分類し、外唐津にのみ朝鮮役による渡來陶工の開窯とし、細別して、武雄唐津を住吉城主後藤家信に從つて渡來した宗傳一黨によるもの、多久唐津を鍋島藩の國老多久長門守安順に從つて、渡來した李三平一黨によるもの、平戸唐津を平戸藩主松浦鎭信に從つて渡來した引、金久永一黨によるもの、また別に鍋島藩國老諫早上總介道安に從つて渡來した土師ノ尾窯の道珍に依るものとするのが、金原氏の說であるが、このやうに判然と分類する程の資料があり得るのであらうか、私は久しく疑問とするところであるが、未だ調査の機を得ないので、金原氏の說に一應從つて置かねばならない。

既に述べたやうに、川上因幡なる人物に寺澤廣高が贈つたといふ繪唐津の茶碗が、かつて存在したことがあるとすれば、廣高の並々ならぬ唐津窯業への關心が窺はれるのである。朝鮮役の後に唐津に襲封された廣高とは云へ、茶道に參じてゐた彼のことではあるから、高麗陶工を求引しなかつたとは斷じ難く、むしろ若干なりといへその工人を將來せしめたとみるのが隱當であらう。この考への下にすれば、或は廣高に從つた陶工は『白鷺洲』にいふ如く奥の奥高麗人であつたかも知れないと思

ふ。この奥の奥高麗人の燒造したものは井戸などの類であり、唐津はこの奥高麗人が來つて燒造したが故に、上方では賞翫するといふ。都に近い熊川どいはれる窯の系統を古帖佐の窯ではひいてをり、唐津の窯とは全く別系統のものであることを述べてゐるのは、いろいろの意味で面白い。

奥高麗に就いては、從來、種々の說があり、『白鷺洲』の如く、朝鮮奥地說といふべきものに、

唐津燒高麗左衞門ニ始ル奥高麗ト稱スルモノハ朝鮮忠淸道ノ西北ニ唐津監アリ唐ノ船付ニテコノ地ノ燒物ナリ土藥ヲ見ルニ朝鮮ナリ古唐津ハ似テ違ヘリ

といふ『陶器考』の說、眞淸水藏六の撫順方面の滿州窯といふ說などが擧げられ、これに反し、高麗人が唐津に來つて燒造したとする初期唐津說ともいふべきものは、

奥高麗トイフハ文明ヨリ天正年間ニ至テ製スル所ノ者ナリ此ノ際點茶盛ニ行ハレ入高麗ノ茶碗ヲ珍愛スト雖モ舶載ノモノ少クシテ得易カラズ故ニ唐津ニ於テ模造セシム後世之ヲ奥高麗トイフ奥ハ往古ノ義ニシテ古キ高麗ト云ハンガ如シ陶膚稍密ニシテ釉色枇杷實ノ如ク又青黃ノモノアリ是モ亦臺輪ノ内ニ皺紋アルヲ以テ良トス

といふ『工藝志料』や、

引續キ高麗人唐津ニ渡來シテ陶器ヲ作リ此作ヲ世ニ奥高麗ト云（茶道筌蹄ニ曰ク奥高麗ト云フハ高麗人來リテ唐津ニテ燒シ

故ニ高麗ヨリ奧ト云コトナリ）此奧高麗ト云フ事ヲ考フルニ今ノ朝鮮國ノ古ヘノ國號ナリ（鴻臚外編考ニ曰ク今ヲ去ル事四百八十二年前ニ當リ新羅高麗百濟ノ三國ヲ合セテ朝鮮國ト改メ號ス）右高麗ノハルカ昔ヲサシテ奧ト云奧高麗ハ昔ノ高麗ト云事ナリ此時ノ作ハ朝鮮物ニ格別ニ替リ無シ唯土ノ替レルハ藥モ少シ替ル而已

といふ『觀古圖說』の說があり、更に金原京一氏の如きは、唐津のうちでもその窯趾を規定し、

濱崎町飛地の山瀨上窯下窯に出來しものにて、純白の極めて目小の土に不透明海獄釉を施したものである。この窯で出來た海獄釉を施さず透明釉だけを用ゐて靑黃色したものもかく言はれてゐる。（『陶器大辭典』卷二）

と述べてゐる新說にして珍說もあるのである。しかし私の賛意を表するのは、滿岡忠成氏の說くところで『美術史學』通卷第八十八號に揭ぐるその文章を抄記すれば、

奧高麗の產地に就いては、從來一部には朝鮮說もあつたが、これは先づ作行の點からも承服しかねる。矢張り和物と見たいとすれば、もちろん李朝系の窯だ。しかしこの種の問題は、いくら机上で空論を述べてみても、結局埒のあかないことで所詮臆測の域を脫し得ない。が、現在のところでそれと覺しき窯を物色すれば、先づ擧つてくるのは椎ノ峰である。この窯は土の點だけでなく、特に高麗寫しの一品物を出してゐる點でも注目され、奧高麗の中期以後のものと思はれる、明かに抹茶盌として作られた吳器形りのものや、小振りの端反り椀形りのもの、半筒形りのものなどとは殊に緣が深さうだ。三島手や刷毛目のものは、この窯でもそれらが多い點から、これに歸屬せしめて大過あるまい。だが、奧高麗をひつくるめて考へ

る段になると、必ずしも簡單に肥前唐津窯だけに納めて澄してゐるわけにもゆかない氣もする。江戸時代の唐津がそもそも廣義のものであるから當時の人々は、古唐津に就いてもそれに應じて、餘りむつかしくは考へなかつただらうと思ふが、それにしても目利の格段に進歩した不昧時代の人々は、いはゆる古唐津の內容に就いて、當時としても可成りの疑ひを抱く様になつたのではあるまいか。古唐津の中には、唐津を廣義に解する視角からみても、如何しても納得の行きかねるものがある。そんな考へが彼等の間に起つてきたのではあるまいか。とすれば、古唐津の名はそれらの總稱としてはどうも不適當だ。といふので、こゝにまた奥高麗の名の生れた一因があるのではなからうか。彼等は恐らく古唐津の中の非唐津的と思はれるものを漠然と高麗物と考へたのであらう。しかしその推定のなほ心許ないまゝに、奥高麗といふ様な微茫たる名を案出したものだらう。その様な心理の動搖がこの名によく反映されてゐる様に思はれる。たしかに奥高麗は唯一窯の所産ではない。たゞその範圍がどこまで擴大するか、これが問題である。

奥高麗と稱される茶碗の、私の貧しい見分からは、朝鮮產と解されるものが一點もないし、肥前唐津古窯群以外の九州諸窯や萩等の朝鮮系古窯（それ等は唐津と相等しい作行をもち、釉調また辨じ難いものがあるが。土味に覆ひきれない相違が發見され、馴れれば判別が容易である）の作品と鑑られるものもなかつたので、奥高麗といふものは狹義の古唐津、肥前唐津の作品のみであらうと考へてゐる。滿岡氏はこの點にやゝ見解を異にしてゐるが、私は他の如何なる說よりも滿岡氏說を支持するにやぶさかではない。奥高麗を特定の一窯に推す如きは全くの獨斷で私はとらない。それ程左樣に、奥高麗なる字義そのものが示すやうに、不明確なものが奥高麗といひたい。

奥高麗なる名稱をもつ茶碗が、その土も釉藥も、そして作風に於てすらも和風を帶び、それが朝鮮傳の技法を用ひてゐるとしても、既にこの國の茶道の空氣も及んでをり、その作品からは雜器としての意味を超えた作者の意圖が意識されるのであ

る。それは朝鮮風雜器の範疇をつとめて守り乍ら、茶器として生れて來た爲に、その初期の作品にあつては、おろそかな鑑賞者には、それが本來より雜器として生れてきたものとしか解されなかつた點もあらう。茶器に採りあげられた朝鮮茶碗が、雜器のうちの異常兒として認められたとしても、奧高麗といはれる唐津茶碗はさうではなかつたやうであり、最初から茶に應じて製作されたものとみて大過ないであらう。

唐津の古きは奧高麗といふ。唐津の奧に竈あり、是へ唐人來て燒く、是を奧高らいと云。土は唐津の土也。此土至てこまか成こし土也

といふ『鑑識錄』や

奧高麗惣體造り高麗物の如くにて見事なるものなり。藥白茶色薄赤ミ色少し靑ミ出來もあり。土も古唐津、造りざんぐりと結構なり。一品の物にて、高臺作も違ひ、見事なるものなり。格好よき茶碗ハすくなく、大ぶりなる茶碗あり。見事なれども大の方ハすこし下品なり

といふ『山越覺書』の奧高麗の土を唐津土なりと決めてゐるのは流石であり、高麗物を模した、井戸茶碗や熊川茶碗などの樣式をもつたところのある種の古唐津茶碗を奧高麗としてゐることは、今日その遺品から推して、異議なく首肯出來る譯である。

一、茶碗茶入澤山に持被出目利を可致申候故見申候最前被遣候茶碗を見仕舞候へは何と見爲申哉と被申候故高麗かと見申候

由申候得は高麗いらほ刷毛目の大茶碗にて候能き出來と申候へは別て見事成事にて候由被申又終て大茶碗を出し何と見爲申哉と被申候故又高麗に熊川と見及申候申候へは井戸脇にて段々と拙者も持候ものと同しものの由被申候又三ツ足の茶碗を出し何と見申候哉と被申候故どこやら瀬戸なとゝ見及候由申候へは是は定て始て拜見申筈と被申田原の元祖古帖佐にて候綱の手業抔別て名物にて候此茶碗は殊に殊勝に有之能き好奇屋道具にて候由被申候其外靜隱殿にも見知不被申候由被申候又茶入を出し被申候て此は何と見申候哉と被申候故すんこ抔共可申儀見覺も無之由申候へはいや唐津にて候由被申夫よりよくよく見申候に笹の葉を黑く書き下は成程唐津と見申候へ共唐津の茶入は初て見申候故右之通申候（下略）

繪唐津の茶入として生れてゐるものは、こゝでも「初て見申候」といふてゐる程、現存するものも甚だ尠い。『茶道筌蹄』に「唐津　遠州時代　古唐津は茶入なし、いにしへは茶碗のみ燒しなり」とあるが、同書の筆者は恐らく繪唐津の茶入をみることがなかつたのであらう、それ程に遺品の乏しいものなのであるが、幸なことに、私は古唐津に屬する茶入を三四點拜見をしてゐる。殊に青柳瑞穗氏藏の茶入は、唐物をみる如き、本格的な雄勁無類の大茶入で、時代もこと更、上るやうにみられる。「笹の葉を黑く書きて」と、『白鷺洲』にある茶入の文様はいはれてゐるが、私はもしやそれはあやまりで、蘆荻の葉ではなからうかと思ふ。それでなくば、檜垣やうの交錯した直線をもつてする文様でなければならないやうにも考へる。「すんこ抔共可申儀見覺も無之由申候へは云々」と、宋胡錄とも云ふべきかと想像されるやうな文様ならば、檜垣やうの文様であつてよろしいし蘆荻ならば、桃山期から江戸初期にかけての流行文様であり、美濃の志野や織部と共通して繪唐津の多くを占めてゐる、特徴のある文様であるからである。青柳氏藏の肩衝茶入も、赤味の勝つた黑褐色で描かれた蘆荻の葉とも檜垣ともみられる文様であつた。某氏藏の繪唐津茶入は、何といふ形か、文琳をやゝ平たくし頸をすこしく立たせたやうな、これ亦、茶入として作られたものであるが、その肩の部に桃山期に流行し、柄鏡や蒔繪に屢々現はれてくる、桐唐草の文様が描かれてあり、

珍重すべきものと思つた。

紀州徳川家の賣立に出た（昭和二年三月）繪唐津の茶入は木賊やうの文樣で、平たいが、柿形のものであり、了々齋の書附のあるものであるが、二三年前の根津家の賣立に出たものは、同品ではなかつたかと考へるが、記憶にあやまりがなければ幸である。次に福岡市の田中定雄氏藏のそれは、東京の展覽で見、更に田中邸で再見したが、敗荷と蘆荻と草花と三ケ所に、あたかも小天地を埋めつくしたやうに描かれ、やゝ燒成はあまいが、それ丈に、深遠な興趣が感じられて愛すべきものであつた。形は紀州德川家舊藏のものよりも立ちあがつて膨みがあり、豐かな形姿をしてゐたことである。

一、拙者より申候は此間四元正藏殿より唐津の細き茶碗且根來の薄茶入貰候由申候へは靜隱殿夫唐津は繪唐津にて候哉と被申候故小ふりの唐津にて黒き藥を以丸き模樣有之候と申候へは夫は繪から津にて候珍敷ものにて候と被申候夫より拙者申候は當分江戸え茶箱調に遣置候と申候へは靜隱殿又々被申候は當分唐津は却て高麗茶碗よりも珍敷有少きものと被申候此儀を以相考候へは唐津はよほと好と被存候事

丸い文樣のある繪唐津の茶碗に限らず、當時、古唐津は既に數がすくなく、靜隱の如きは、高麗茶碗よりも更に珍らしいとしてゐるやうである。靜隱がわが唐津黨であることに、微笑を禁じ得ない。丸い文樣の繪唐津とは、道納屋谷窯の作品とされる輪違ひ文樣の茶碗。道園窯から破片も出、傳世品も屢々みかける、ぜんまい蕨のやうな文樣のある茶碗。例へばさういふ茶碗が連想される譯であるが、たゞ丸い文樣といふだけでは明確さを缺き、眞の文樣が眼底に浮んでこないのは殘念である。細き茶碗とあれば、成程茶箱もわざわざ江戸にまで注文をして作りたくなることであらう。

一、今日は繪を山下御屋敷より被仰付候三十六歌仙に取懸畳山路喜平太へ彩色被爲致候由にて喜平太へ申聞歌仙の繪を見申候處に靜隱被申候は此繪は探幽かよき繪本を寫置候故夫を以書調候由申被候別て六ケ敷ものゝ由申被候左候て難有事にて候は山下御屋敷より御けんずいとして御茶御菓子御銚子等拜領被仰付急成御用にても無之來春ゆるりと相調差上候様に被仰付候故當分取懸候由又々拜領の御茶殘り有之候由にて自身手前にて茶を立被申候茶碗は筒の唐津茶入袋入織部赤繪にて右拜領の御茶いたゝき御干菓子も拜領の品の由にて頂戴夫より又々咄共被申候事

唐津の茶碗で、最も普通の姿は椀形であらう。椀形には大小ともあり、小なるものに比して大なるものは甚だ乏しい。椀形端反りの大なるものにあきらかに熊川寫とみられるものが稀にある。小椀の奥高麗はこの姿で、大なるものより上品とされ別して茶人に愛されるが、月並俳句をおもはせるやうな唐津も多くこの小椀にみられる。また、小椀の歪んだものもこれと同列である。塩笥成りといふのは小壺で口邊の廣いものを、茶碗に見たてたのが創まりであらうが、眞冬用として重寶された爲に塩笥の形態をねらつて作製したものもある。塩笥と對蹠的な平茶碗、これには深目の皿を見たてたものが殆んど大部分であるといつては過言であらうが、さりとて、皮鯨のやかましい瀨戸唐津は遠州好みのものと考へるが、平茶碗の楚々たる姿を有してゐる。

ところで、唐津の筒茶碗とは、いみじくも珍しい次第である。朝鮮唐津を燒いて著名な窯である藤の川內窯は、その繪唐津も筆太で超寫實的で、意想的な內容をもつと思ふが、この繪唐津の半筒茶碗が窯趾破片に夥しく多いのは特記すべきである。嚴密な意味での筒茶碗として、かつて私は、長石單味の釉を被つた、樂茶碗を髣髴させるものを所藏し、不孤齋廣田松繁氏に懇望さるゝ儘に讓つたことがある。その頃、長次郎作といはれる黑樂茶碗「面影」の寫眞と對照しては、このやうな古唐津茶碗の存在をひとり不思議と感じてをつたことを、こゝに記して置きたい。長次郎作の樂茶碗とはとりもなほさず、利休好みの

茶碗と理解されるので、その筒茶碗も同じやうに利休好みの唐津として理解され得るのであるが、これを裏付けするやうな記錄や所說に未だ出會はないことを、心淋しく思ふのである。

一、拙者え被相尋候は此間伊集院彌太左衞門殿茶を立被申候由承申候道具はあらまし承及候へ共慥に覺不申候が茶入は繪唐津にて候哉と被申候故共通の由候

繪唐津の茶入に就いては前述のとほりである。珍しいが稀に出現して私達を喜ばせる。

一、右の咄相濟候て又靜隱殿申候は今晚四郞左衞門正太夫參候間兩人共に手前を致させ可申由被申候故是は可然由申候左樣て追付茶菓子出申候左候て正太夫殿手前にて候右相濟四郞左衞門手前にて候相濟候ても拙者にも久々稽古も打絕申候故手前御覽被成可申候て取付申候に茶を立申候へは靜隱殿呑被申候て四郞左衞門殿正太夫殿三人にて相濟靜隱殿仕舞可被申由被申候て仕舞被成候其夜の道具加入ふくりんの茶入並三入別儀茶碗唐津茶杓靜隱殿自作にて候右相仕舞被申候手前の折から咄にて候は夏の茶の湯には爐にても風呂の直しにて候故茶を立候時釜え水一柄杓さし惣て茶を立候ものにて候是風呂の古實にて候由左樣て又々咄にて候は風呂に眞草行の柄杓有之候存候哉と被申候故不存段申候へは柄杓自身とりかけ柄杓引柄杓置柄杓にて候是通仕分け候か能候と被申候間拙者にも直に其時柄杓を取申候て右の三行の通いたし候へは共通の由被申候左候て茶を立候跡の仕舞は早く相仕舞か能く候然共中々早く仕舞候樣にいたし惡敷ものの由咄にて候

こゝで唐津の茶碗を使用してゐるが、別に詳しくこれに觸れてゐない。靜隱自作の茶杓とともに使用してゐるところをみ

て、愛用のものであることが知られるのみである。

一、拙者より申候は此間田舍より參候茶碗茶入五ッ宛もたせ入御覽候歟あまり宜敷ものは無之旨被仰聞候がいかゝ御座候哉御直に猶又委敷可承由申候へは成程其通の事にて候唐津なとの茶碗は別て不出來にて候右の內には赤繪茶入是が能候是は無痛ものにて珍敷御座候外には宜もの無之由被申候南京の茶入はいかゞ有之候哉と申候へはすがたがあしく御座候由咄にて候左候て右の道具澤山に田舍より參候歟もらい候哉と被申候故小根えの者所持いたし候右の內いつれにても氣に入候をくれ候由申に委せ右の赤繪をもらい可申と存候旨申候へは是は珍敷能候其通可然由被申候事

昔も今と同じやうに、唐津などでも不出來な茶碗を持ち廻つてゐたこともあるとみえる。この頃も繪唐津が流行すれば、繪唐津、繪唐津と騷ぎ、その作品としての藝術的價値を云はないで、何でもその鐵繪が畫いてさへあれば、大事にする。さうした繪唐津狂時代は下火になつては來てゐるが、實に下らないことだと思ふ。結局、出來のよさを重んじるべきで、繪唐津の出來の傑れたものなら結構、敢へて無地でも結構なのではあるまいか、藝術鑑賞の域をはなれて、淫するといふことはつゝしまねばならない。殊に愛する窯の作品に對しては冷嚴であるべきであると、わたしは自戒してゐる。

一、右の咄相濟候て自身相立被申菓子盆に干くわし少々看經所より被持拙者へくれ被申候左候て手前にて候其手前前以不斷相掛有之候かさ釜の緣はくり入有之かと存手にてなで見申候へは靜隱殿いやそれはくり込候ては無之候此通のかさ釜のすつと下に長くさかりたるを大だれと申候由にて手やういたし被申候　此大だれの事名初て承候此手やうの事もよく覺居候考べし

一、茶杓は棚より出し被申候て飾付

一、茶碗から津柿色にて候茶上林三入初昔

一、茶入丁新兵衞黄藥のやうに有之候

袋切　右牡丹と被申候紋柄小さき牡丹と白地にて金織出し

右之通候て道具相望見申候折柄茶碗の此唐津は小ふりには候へ共大祕藏の由被申候茶入は丁新兵衞にて候必丁新兵衞は底に丁の字有之もの多く候底になきのが有少候と被申候宜敷ものと最初より相見得候へは此又めつらしき事を序に承候茶杓は細川三齋老御作にて殊の外我儘の茶杓の由被申候中のふしと下とは邪候て中々不案内にてはあつかひにくき茶杓にて候茶入の切れは得と見候樣に被申候左候て其時咄にて候は正國寺にはよほと切の目利は有之候此間も此袋を見被申候歟こぼたんにて御座りますと見當被申候と咄にて候夫より直に一禮申達被歸候事

水町和三郎氏の研究によれば、唐津の釉藥は大體四種に分類され、暗青釉、失透白釉、長石釉、黑釉(1飴釉、2天目釉)であるといふ。柿色のからつ茶碗ともなれば、燒成の具合で、黑釉のうち2の天目釉が柿色に發色するので、これに該當するものと考へる。私は牛石窯(長崎縣東彼杵郡折尾瀨村大字牛石免字下牛石所在)出土の小皿を持つてゐるが、この釉藥は濃い柿色を呈した天目釉である。また金石窯廣谷窯(佐賀縣西松浦郡松浦村大字中野字金石原廣谷所在)から出土する、椀形にして、高臺の薄く高い茶碗は小振りで、これ又、柿色を呈した黑釉を被つてゐる。たゞしこの手の茶碗を私の知友は瀨戸系の尾呂窯の茶碗と對比して、好一對となしてゐるが、どちらも茶碗としては厚みとうるほひに缺け、出世のしないものとして、輕ろんじられてゐる傾向がある。このやうな茶碗は大祕藏のものとして、珍襲される程のことはないのであるから、柿色を呈すとしても、この窯に擬するにふさはしくなくそれは單なる暗合に相違がないであらう。

以上、婁々として、『白鷺洲』に現はれた、唐津燒について、現在の、唐津燒鑑賞の立場から小見を述べた。その厖大な、古窯趾の遺存するに依つてみても、その製作品の複雜多岐にして、全貌を知るにはまだ長時日と、多くの研究者の手をわづらはさねばならないだらうし、作品の背景をなす地方の歴史に就いても、曖昧な、傳說的な史料にたよる程度にしか至つてをらないから、この點に就いても、闡明して、納得のゆくやうなものにしてほしい。いろいろの點からわれわれの鑑賞が未だ垣のぞきの程度にしかすぎないことが感じられるのであるから、小見の誤謬を正して、樂しい、唐津燒の鑑賞に方向をすゝめて頂くことを切望して筆を擱きたい。文中引用が長きに失したやうな部分が多いが、前後の關係を充分知ることによつて、使用された唐津の印象が濃くなるであらうと感じた爲であるから、その點は諒とされたい。

二、斑唐津を考へる

白唐津（しろがらつ）乃至、斑唐津（まだらがらつ）などと呼ばれてゐる、唐津燒の一種がある。その呼稱が示すやうに、釉藥が灰白失透性のもので、白濁色を呈するものや、灰白失透性の釉藥に小量の鐵分が混じ、白濁色と黑色とが斑狀になつてその境界がなだれてゐるものを、このやうに呼び、この呼稱は近來のものであるらしく、明治頃の陶磁の文献にさへ出現してこないやうに考へる。

金原陶片氏はこれに就いて、

現今各地で白唐津の名稱が盛んに使用されてゐる。之は、朝鮮唐津の中でも素地及釉藥に鐵分最も少なく、其の上に不透明釉を施したのも、不透明釉が透明釉よりも溶解度低きため、下掛け釉を全部覆て下掛け釉全く見えなくなり、白色に釉色がなつたものに言ふのである。又斑唐津の名稱もあるが、之も右のやうな製法で素地及び下掛け釉に、少量の鐵分が所々に表面の不透明釉、白唐津の中に黑色又は灰白色の斑が出てゐるものを稱し、此の二種の新しい名稱の唐津も、朝鮮唐津の一種で製法も同一であるが、たゞ素地や釉藥に不純物が含まれてゐた故か、又は窯の中で火度の關係により變化が出來た朝鮮唐津にすぎないものである。（『九州乃古陶』第一號「朝鮮唐津に就て」）

と、說き、白唐津・斑唐津とは新らしい名稱であること、白唐津といひ、また斑唐津といひ、いづれも朝鮮唐津の一種で、製法が同一であり、素地、釉藥に不純物が含まれてゐた場合、窯の中で火度の關係により變化が出來た場合に生じたものであることを、詳しく述べてゐる。

白唐津・斑唐津を燒造した、代表的な窯趾として知られてゐるのは、岸嶽古窯群に屬してゐる帆柱窯（佐賀縣東松浦郡北波多村大字帆柱字帆柱谷所在）、皿屋窯（同郡同村大字稗田字杉谷所在）、道納屋谷窯（同郡相知村大字上佐里字道納屋谷所在）及び、山瀨窯（同郡濱崎町大字山瀨字上山瀨所在）、大川原樅の木谷窯（佐賀縣西松浦郡南波多村大字大川原字樅ノ木谷所在）の諸窯であり、私が、帆柱窯、皿屋窯、道納屋谷窯等で採集した破片をみると、茶碗（抹茶用のものではない）片口、德利、皿（大小あり、丸形、緣なぶり等の形姿さまざまである）ぐい吞と稱せられてゐる筒形の小椀がその大部分を占めてゐる。抹茶用の茶碗、茶入、花生、水指（水指にふさはしい壺はある）等の破片が出土したことを聞かないから、これらが雜器窯として存在してゐたことは動かせない事實であらう。

このやうな白唐津や斑唐津が、何時燒かれたであらうか、金原京一氏の言ふ、「鬼子嶽唐津は今より六百二十餘年前、松浦黨の領袖波多家の居城のあつた鬼子嶽山中に於て創められ、始めの飯洞甕窯からは靑唐津が燒出され、次に帆柱窯から斑唐津が出た」（『美術工藝』通卷第十二號「古唐津」）といふ說は、はたして無條件に信じてよいであらうか、岸嶽（鬼子嶽）唐津の終期はまた、文祿三年、秀吉の鬼子嶽城沒收に至るとしてゐるが、このやうに明確に年代を斷定してゐるとしても、しかし有力な根據のあるものとは信じることが出來ない。この窯趾に關する古記錄の信ずべきものは知られず、記年銘を有する作品のあることも聞かない。むしろ推定的な獨斷說であらうことは推察に難くない。

近來、岸嶽古窯中に於ても最古のものと目してゐた飯洞甕窯の一群の窯趾から、茶意識の有する、しかも織部の茶風の影響

を享けてゐると考へられる、破片等の出現するに及んで、觀念の上に歷史づけられてゐた、岸嶽古窯趾に、再檢討を要することが必然となつてきたやうである。

このやうな點からも、主として、白唐津・斑唐津の燒造された帆柱窯、皿屋窯等の窯趾に關しても、無條件に金原氏說を肯定し、盲從することは、非科學的態度であつて、新しく、陶磁の硏究をする立場からは、否定さるべきであると信じる。

それならば白唐津・斑唐津燒造時代の判定に有力な窯趾は如何と云へば、私は試みとして、高取燒第三次の窯趾とし、しかも朝鮮より渡來した、高取八藏が、藩主の被護を離れて經營した山田窯を擧げたいのである。高取山田窯は、寬永の初めに起り、寬永七年に、次の白旗山窯に移窯する迄の短期に行はれた、年代の明確な點、比較的良心的な發掘調査が行はれ、その報告が發表されてゐる點に於て極めて參考になると信じるからである。

簡單に、高取燒古窯趾の所在、歷史を述べると、最初に築窯したのは、現在、直方市永滿寺區宅間にある鷹取山窯（永滿寺窯ともいはれてゐるが、私は窯趾の所在を明示する爲に宅間窯と名付けたのが便宜であると思つてゐる。）で、この窯は『高取歷代記錄』に、

文祿元年秀吉公朝鮮御征伐の時爲御先手　長政公御渡海被遊候節御陣所の邊に井土と云村里有古高麗國の內なり此所に居住して瓷器を製し産業とせし八山と號せし者有　如水公　長政公に奉謁兩君も其良工が事をしろし召連御供仕日本へ可來旨被仰聞八山も兩君の御仁德を奉慕則御請申上御凱旋の刻後藤又兵衞基次に命ぜられ八山を召つれ可來由被付基次我家人相山常右衞門を指添船路入事を司らしめ八山夫婦並一子以上三人御共して渡海し慶長五年筑前御拜領被成御入國乃節鞍手郡鷹取乃古城山の麓に被召置陶器を製せしめ給ふ鷹取に被召置し故姓を高取と被爲改姓名を變じて名を八藏と可改旨承仰一子成長して八郎右衞門と改む鷹取山父子高取と書事高麗の流にて可用旨御意かと申傳有月俸七拾人扶持を給り御國寺社乃格式に被仰付御勤申上度此

時御國内を巡見し地土藥石を撰び出し又朝鮮國より土藥を取寄井土瓷器を製せし事あり 和に井土陶器製有事此時の事なり

とあり、高取山の南麓の地に遺趾が現存し、均窯系統の海鼠釉を被つた破片が出土することが知られてゐる。記錄に依つて慶長五年頃に創り、次の内ヶ磯窯に移る慶長十九年迄、續いたことが判明する。遺片に依つて、高取八藏が生國朝鮮より將來した技術が、斯くの如きものであつたことが知られ、興味の深いものである。

次の内ヶ磯窯（直方市頓野區内ヶ磯下久保の内かまの尾所在）は、同じく『高取歴代記錄』にみえる、左の記事により

慶長十九年鞍手郡内ヶ磯と云所に御陶所を御引移に相成し也其近邊にて開地田畠貳町餘の所無年貢にて拜領被仰付弟子等仕立專井土陶器を可製旨承傳門弟手附の者も多く有之候事

慶長十九年創業、黑田家よりの被護によつて、窯業が隆盛となり、從業した陶工の數も增加したことがうかがはれる。窯趾の遺片の量も多く、作品の種類も增加し、極めて少量乍ら唐物寫の茶入破片も採集される。釉藥の主たるものは、前窯の海鼠釉よりも灰分が多く加はつて、白色乃至黄色が強く感じられものので、例へれば、唐津道納屋谷窯のこの種の作品と共通するものがあるやうに思はれる。次いで鐵釉のものが多く、なかでも茶入の如きは、漉土となつてをり、前窯にみられない新しい技術のこの期に輸入されたことが判明する。

そして、本題の主點となる第三次の山田窯に移つた事情に就いては、これも『高取歴代記錄』にある、

忠之公御代初眘　御機嫌歸國儀を奉願義　御勘氣御扶持被召放出國は御免無之付門弟手附の者も方々へ離散して八藏父子

は門弟少し召連嘉摩郡山田村等にて自分小燒物爲致右の以餘力渡世の助とし致蟄居居候今に此所の百姓古き陶器類所持した
る者多し

といふ、記事に依つて知られる。

黑田忠之は、長政の長子で、第二代の藩主として元和九年十月に襲封されてゐるので、寬永の初めは忠之の治世となつて程無い折であつたのであらう。藩の手を離れて山田村に築窯した折は八藏の逆境時代であり、その製品も藩用のものではなく、いはば民需用として、生活の爲に、大衆の要求に應じた製品を燒いたものであらう。

窯趾は現在、福岡縣嘉穗郡山田町大字上山田字木城にあり、窯趾出土の陶片に就いて、栃内禮次著『古高取山田窯』によると、その種類は日用の雜器で、中形の皿が最も多く、その形が多種多樣である。他に茶碗、ぐいのみ、片口、油壺、瓶壺、中には茶器に用ひることを得る茶碗、水指、其の他の諸器、又は薄手の扁壺の如きものである。胎土は、灰色又は淡、濃茶褐色で燒締り充分である。しかし原土に、水簸等の加工をみとめないことが記されてゐる。そして、その釉藥に就いては、同書に

釉藥の色は白釉及び其系統である所謂なまこ釉が大部分を占めてゐる。白釉など岸嶽系のものと寸分違はぬものがある。普通釉たる布羅志藥も元よく少くない。かめぐろと稱する黑釉卽岸嶽飯洞甕、上野古窯などによくみる薄手大形瓶の釉藥と同一の物も認めらるゝ。此の白とフラシと黑の三者は古唐津と全く同樣と見てよいと思ふ。

と、述べてゐる。手法、作行きに就て、續いて同書を參照すれば、

手法は全く前古窯と同一である、明かに同系のものなるを示す。素より皆なまがいがけである。胎土に釉藥が喰いついてゐる。胎土の粗にして素朴なる處と高臺のケズリの雄々しく頑張つてゐる處に良い調和を見せてゐるのは、古唐津岸嶽の飯洞甕窯や帆柱窯と全く同一である。高臺を持つて釉藥にズブリとつけて、仰向けに置き藥が厚つく垂れ下つた處など千金の値がある。

重ね燒は甚少數である。稀に重ね燒の爲め皿の中央に無釉となしたものを見る。夫れが方形をなしてゐて、釉藥の內に垂直に四回ひたし表も裏も同一の方形をなしてゐるものなぞ面白味がある。併し多くの皿は殆重ね燒の跡を見ない。

作行きは、見て其豐かな線と形と色とに於て、觸れて其澁き味に於て、全く古唐津岸嶽系統のものと同一である。胎土の差を除いて古唐津の味を全部所有すると申して過言でない。

と書く處の余は爰に一つの問題を提供したいと思ふ。世に古唐津として信ぜられてゐるものは、其の或るものは實は古高取ではあるまいかと。

余は本窯に出土する處の陶片を檢して、餘りに所謂古唐津として考へられたるものと同一なるもの丶多きに驚き、否寧同一なるものが破片として唐津岸嶽方面より出土することなきものあるの事實に徵し、疑ふらく古唐津として世に存在するもの或は實は古高取にあらずやと

余は本窯出す處の陶片、就中完全品といふ可きものを得て證左爰にあるを思ひ古唐津再檢討の必要ありと言はんとするものである。

栃內氏の高取燒山田窯出土遺品に關する觀察と感想、また、同書の插圖となつた破片との對照に於いて、更に、栃內氏所藏の口付水指、茶碗等を實見するに於て、古唐津岸嶽系のうち帆柱、皿屋兩窯の作品と相等しいもの丶濃厚にあることは、全く同感である。寛永年中、約七ケ年の短期間に於て燒造された、山田窯の作品が、このやうに、唐津の最古窯の一つとされてゐる

窯趾の出土破片と全く相等しいのは何を意味するであらうか。當時は、全く藩の手を離れ、むしろ逆境にあつた高取八藏が、自慰的な興味を抱いて、古唐津を模したとは考へられない。さうした自己の興味を滿足させるやうな、周圍の事情とは考へられない。弟子の多くは離散し、家族とわづか腹心の身内の陶工を抱いて、經濟的にも苦しかつたであらうことは察せられる。むしろ、八藏が故郷である朝鮮の地からたづさへてきた技術を生かして、主として民需用の器物を製作したと解するのが妥當であらう。しかし、なぜその朝鮮傳の技術の最もよく發揮されてゐるとみられる鷹取山麓の思ひ出の窯の作品と、その釉藥に於て、變化が多いのであらう。第二次の窯である内ケ磯窯で、すでに兆したやうな、灰白失透釉を更に押しすゝめたとみられる山田窯の純乎たる白色失透釉は、かつての鷹取山窯に於て均窯風な青味の勝つた綠色を呈する釉色とは面目を一新し技術の系統的には等しいが、製品の感覺が向上してゐるのであらうか。私の思ふには、それは逆境にあつた八藏が、その窯の經營の爲に、當時最もその地方を風靡し、流行したであらう器物に等しいものを作らなければならない、生產費も低くして競爭相手にたちむかはねば生計がなりたたない事情が必ずあつたに違ひがないのである。

そして、寛永の當時にあつて、窯趾の數量からみても、九州地方の陶器の需要の大半をまかなつたと信じられるのは唐津の諸窯であつたと思ふ。そして更に大膽にいへば、唐津諸窯のうちでも、白唐津や斑唐津が新製品として、華々しく市場に登場してゐたのではないかと思ふのである。

既に述べたやうに、古唐津の道納屋谷窯の灰白透釉が、高取第二次の内ケ磯窯のそれに相似點をみいだし、（田邊加多丸氏藏のこの手の大鉢は、稀にみる傳世の優品であるが、萩か唐津か判明しないものとされてゐた、これが昭和二十一年春の陶磁協會の會合で、内ケ磯窯の土味と、最も特徴的な、大きな目跡その他により内ケ磯窯の作品であることが決定したやうなよい例もある。）帆柱窯や皿屋窯のそれが、高取第三次の山田窯に相似點をみいだすとなし、流行の同時性といふ見地からしてその年代を、道納屋窯を慶長中頃から寛永初年、帆柱窯、皿屋窯の寛永初期と引き降ろしたらどうであらうか。あながち無暴なこ

とではないと思ふが、如何であらう。

なほ、この灰白失透釉を論ずる場合に長門の萩燒が、一應取上げられねばならないのであるが、紙數も無く、私の調査も出來てゐない。しかし窯趾出土破片によつて坂窯の初代から三代頃までの間に燒かれたと推定される、初期の作品もまた、唐津のこの種の作品と相似點が濃厚にみいだされる。初代高麗左衞門の寬永二十年歿、二代助八の寬文八年歿、三代新兵衞の享保十四年歿といふことと考へ竝せて、灰白失透性釉藥が流行したであらう時期が、江戸初期といふ比較的降つた時にあつた事實が考へられ、初期高取窯の時代にまで、唐津のこの種窯趾の時代を引きもどすことも滿更、こと更に異をたてる暴論ではあるまいと信ずる次第である。唐津も古きが故に貴といのでなく、陶器として藝術的に傑れてゐるから貴いのである。冷靜に判斷してその眞實を考へたいものである。

あとがき

昭和二十一年一月日本陶磁協會が成立し翌二月役員會が設置されましてその席上、陶磁文化高揚、普及を目的に立派な陶磁の書物を出版しやうではないかとの議が出て、こゝに陶磁叢書の發刊が目論見られたのであります。一方各地の古窯を本格的に調査する案も決定してその報告をこの叢書で發表することになつたのであります。幸ひ古窯調査の第一歩を今春以來瀨戸古窯に始められ、これが成果を小山富士夫氏編輯にあたられ叢書の第一卷の成立を見たのであります。つゞいて第二卷唐津篇を不肖私にまとめよとの命により茲に古窯趾調査に先立つて編輯致しました次第であります。然し唐津調査發掘の報告書はいづれ金原陶片氏にお願ひしてありますので、より以上立派な「續唐津」篇として遠からず上梓の運びとなりませう。その節本編と合はせて見ていたゞきたいと存じます。

私がこの第二卷唐津篇の編輯をお引うけして考へた事は、在來雜誌その他に唐津燒についての研究文が澤山發表されて居りながら一冊としてまとまつた「唐津」の書物がない事を常々殘念に思つて居りましたので、この際なるべく斯界の權威者を網羅して充分に立派なものを出したいと念じたのでした。協會の名で出す以上、とにかく一冊で唐津燒なるものゝ概念だけでも會得出來る樣なものにしたいと思ひまして、いろ〱題目を考へて、それ〲の權威者にお願ひしたのでした。然しそれは私ひとりの理想であつて多勢の方々には通らない事が後で解つたのでした。やはりかうしたものは一人で書き上げねばまとまるものではないと云ふことが判然としました。

種々の事情で執筆する方々が少くなりことに水町和三郎氏、滿岡忠成氏は〆切迄の多忙な御用の爲め原稿が間に合はないで了つたのはかへす〴〵も殘念でした。然しこの私の勝手な計畫を早速きゝとゞけていたゞいた加藤義一郎氏、金原陶片氏、加藤土師萠氏には全く感謝の外ありません。ことに金原氏はこれ迄に發表されたことのない長文に渡る唐津全般の古窯趾について執筆していたゞいたこと又、加藤土師萠氏はこの原稿のため、改めて唐津古窯趾の調査をわざ〳〵實地に就て十五日間行はれて執筆していたゞいたことは全く編輯者の私の感謝のみではなく讀者諸氏にも感謝していたゞけることゝ存じます。前田氏及岡田氏もよい原稿をいたゞきました。この二編は唐津研究にとつて有益な論文であると信じます。すべての原稿は全部新に書き上げられたもので他へ發表されたものは一つもありません。不出來な編輯ではありますがこの巻が幾分でも唐津燒を解する指針ともなれば編者の喜びはこれに過ぎません。

口繪には十分の寫眞を準備したのでしたがこれ以上のせることは紙その他の面でゆるされませんので不本意ながら割愛しました。それ故に不備な點が多いと存じますがこれはあらゆる面が自由になつた曉、協會から立派な圖錄を出版することにならうと存じますのでそれ迄おまち願ひ度く存じます。

終りに印刷その他について寶雲舍の方々の勞を深く感謝いたします。

昭和二十一年十一月

目黒釉樂居

佐藤進三



陶磁叢書 第二卷

唐津

定價貳百圓

昭和廿二年八月一日 印刷　昭和廿二年八月十日 發行

編者 日本陶磁協會

發行者 小池又一郎 東京都中央區銀座四ノ二聖書館七階

印刷者 貫井修三 東京都中央區月島通二ノ九

印刷所 産業印刷株式會社 東京都中央區月島通二ノ九

發行所 株式會社 寶雲舍 東京都中央區銀座四ノ二聖書館七階

電話京橋〇六五一 一〇〇八 六六八一

振替東京 二六七三二

日本出版協會々員番號A一〇八〇一〇番

配給元 日本出版配給株式會社